
バトル・ロワイアル東方

虹双策

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトル・ロワイアル東方

【Nコード】

N7231I

【作者名】

虹双策

【あらすじ】

『東方Project』のキャラクターで行うバトルロワイアル。登場するのは『東方紅魔郷』から『東方風神録』までのキャラクターになります。

キャラクター同士の戦闘やキャラクターの死亡描写がある二次創作ですので、苦手な方はご注意ください。

1・1 目 録 ― 始まり（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

1・1日目 昼―始まり

(1) 一日目 昼

「皆さん、お目覚めでしょうか」
広い場所。

ごつごつとした岩肌に囲まれた空間で、幼く高い声がした。

「これから、皆さんには殺し合いをしていただきます」

淡々としたその声はトンネルのような高い天井で何重にも反響し、そこにいた少女たちに不吉な旋律を残して消える。

岩の壁に申し訳程度に点々と灯された火が、頼りない道しるべのように揺らめいた。

しゃべっているのは一人の少女。聞かされているのはたくさんの少女たち。

「手段は問いません。最後の一人になるまで戦い続けること、それがあなたたちのしなければならぬことです」

何でもないことのようにしゃべり続ける少女。金色の装飾が施された黒に近い青の帽子をかぶり、手には黒く紋様が刻まれた板のようなものを持っている。

「ただ、注意していただきたいことが、いくつかあります」

少女の口調に合わせ、黒く短いスカートの折り目がかすかにひらめいた。

「一つ目、あなた方の能力は制限させていただいております。強力な能力を持つ方もたくさんいらっしゃいますが、その能力は使うことができませんので悪しからず。……スペルカードは使用できますので、ご安心ください。ただし」

流れるように、言葉が紡がれる。こういったことに慣れているかのように。あるいは、どうでもいいと思っているかのように。

「皆さんの殺し合いを容易にするため、スペルカードによるダメー

ジは、直接皆さんの体に及びます」

少女の声以外静まり返っていた空間に、少しずつざわめきが起こり始めた。

「皆さんの体はいまや、かわい人間と同程度の強さしかありません。弾幕を受ければ死ぬでしょうし、死ねば蘇ることもありません。妖精であれ妖怪であれ神であれ、そしてもちろん蓬莱人であれ、それは同じこと」

状況を飲み込めた者が現れ始めたのか、ざわめきは徐々に大きくなっていった。

「二つ目です。皆さんの首に、発信機を仕込ませていただいています。発信機というのは、一言で言うとな皆さんの位置を我々に教えてくれるものということですが」

ざわめきがまるで聞こえていないかのように、少女は淡々と言葉を紡ぎ続ける。

「この発信機は、皆さんが無理やり外そうとしたら爆発するようになっています。また、皆さんが『禁止域』に踏み込んだ場合にも爆発します。それと、最後の死者が出てから誰も死なないまま二十四時間が経過した場合、自動的に全員の発信機が爆発するようになっています」

一息で言い切って、少女は顔を上に向けた。

申し訳程度の灯りではたどり着くことさえできない深みが、黒々とうずくまっていた。

「『禁止域』についても、お伝えしておきます。皆さんには、説明が終わり次第ここから戦いの地に移っていただきます。戦いの地に関しては、皆さんと一緒にを送りする荷物の中に地図を入れてありますので、後で確認してください。地図上で、戦いの場合は六掛ける六の三十六マスに分割されています。縦にアルファベットのA～F、横に数字の1～6で、この組み合わせで場所を示します」

「さて、この地図の三十六マスですが、このままでは人数が減ったとき、広すぎて殺し合いに支障をきたすことが考えられます。そこ

で、こちらで四時間ごとに『立ち入りを禁止する区域』を設定していきます。そこに立ち入った場合、無条件で首の発信機が爆発する、ということですね。

……ちなみに、今から四時間後の『禁止域』は、『A-2』になります。

なお、今私たちがいるこの建物のあるエリアは地図で言うと『F-6』になりますが、ここは皆さんが旅立たれてからすぐに『禁止域』となりますので、ご注意を」

「待ってください！」

がたり、と音がして、一人の男が立ち上がった。

「いきなりそんな訳のわからないことを言われても困る。僕は、帰らせてもらう」

森近霖之助。幻想郷で香霖堂という道具屋を営んでいる男性。

付き合っついてられないというふうに首を振ると、彼は少女に背を向けて、暗い空間に足を踏み出した。

「おい、香霖」

金髪の少女、霧雨魔理沙が声をかける。

「おや、魔理沙もいたのか。早く帰るよ。こんなところに続けるなんてたまらない」

「けどな……」

魔理沙が何か言おうとした、その時。

「仕方ありませんね。では、皆さんに実際に見てもらいましょう」
少女の声が、無感動に響いた。

「え？」

とつぶやく声に一瞬遅れて、低くこもった音が広い部屋に響き渡った。何か液状のものが、薄暗い部屋に飛び散った。

どん、と鈍い音を立てて丸いものが床に落ち、そのまま魔理沙の足元に転がってくる。

「う……！！」

げんそうに覗き込んだ魔理沙の顔が歪み、彼女は声もなく後ずさ

つて尻餅をついた。

転がってきたのは、爆発で吹き飛ばされた、霖之助の首だった。

首を失った霖之助の体が、奇妙なほどゆっくりとうつぶせに倒れる。

「な、な、な……」

誰かの悲鳴が上がり、誰かと誰かがぶつかる音がした。

「わかつていただけましたか？」

その中に冷たい声が響く。

「私が先ほど言った注意を守っていただけない場合、皆さんはこうなります。妖精であれ妖怪であれ神であれ、そしてもちろん蓬萊人であれ。……先ほども言いましたが、

十分気をつけてください」

どちらでも良さそうに彼女は言った。

「貴様！」

そんな彼女の前に、飛び出す者があった。

燃え盛る炎をその背に背負った白髪の少女で、彼女は真っ直ぐに飛び掛りながら手から炎を生み出す。

炎はその腕を巻き込むように燃え上がり、すぐに鳥のような形をとった。

「何てことを！」

赤々と燃え上がる炎はその声で一層勢いを強め、止まっていた腕から飛び立っていった。

目指すは、前ではしゃべっている少女。

「……ああ、そうそう。皆さんにおまけの情報です」

だが、火の鳥の向かう先で、少女はまるでそんなものが目に入らないかのように平然としゃべり続けている。

火の鳥を見もせず無造作に振った右手に握られた板が、あっさりと火の鳥を引き裂いた。真っ二つになった火の鳥は、上下に分かたれて少女の服を焦がすこともできず消えていく。

「！？」

続けて、少女は、火の鳥の主に左手の掌を向けた。

その瞬間、弾かれたように白髪の少女が吹き飛ばされ、闇にまぎれて見えなくなるほどの遠くへ背中から落ちた。

「ぐはっ……」

その声に耳もくれず、つまらなさそうに少女は続けた。

「五人以上殺した方には、その功績を讃えて発信機を無効化します。爆発しなくなりますから、『禁止域』に入っても平気です。当然、二十四時間死者が出なかった場合の爆発にも巻き込まれなくなります。五人以上殺した人が一人だけなら、そうなった場合はその人の優勝ですね。頑張ってください」

「妹紅！大丈夫か！」

白髪の少女に、誰かが駆け寄る。かすかなうめき声が、壁の灯りを揺らした。

「それでは、今から皆さんを戦いの地はどこかにお送りします。一人ひとり違うところにお送りしますので、自分がどこにいるかは地図を見てきちんと把握してください。今から六時間後に放送を流しますから、それもしっかり聞いておいてください。

…… それでは、皆さんの健闘をお祈りしています」

彼女がそう言った瞬間、空間がぐにやりと歪んだ。

「な、んだ、これは？」

「うぐっ」

その場にいた誰もが、何らかの行動を起こそうとして言葉しか間に合わず、明滅する光と溶け込む空気に吞まれ、意識を奪われて消えていった。

ひととき強い光が一瞬だけ輝いた後、穏やかに空間が収束していく。完全に収まったとき、そこに残っていたのはたった二人だけだった。一人は先ほどまでしゃべっていた少女。もう一人は身の丈を超える大きな鎌を携えた、長身の少女。

赤いくせつ毛を頭の両サイドで簡単に結んでいる。

「では、頼みましたよ、小町」

「はいはい。映姫さまももったいぶったことをされるんですね。

ま、あたしが口を出すことじゃないですけど。

……じゃ、行ってきます」

「ええ。気をつけて」

そう言ってから、二人してその言葉のおかしさに気づき顔を見合わせて苦笑する。

そして、小町と呼ばれた少女はどこか安心したように、どこへともなく消えていった。

【全員：現在地：F - 6】

【森近 霖之助 死亡】

【残り 35人】

《参加者一覧》

【主人公】2人

博麗 霊夢、霧雨 魔理沙

【東方紅魔郷】8人

ルミア、大妖精、チルノ、紅 美鈴、パチュリー・ノーレッジ、十六夜 咲夜、レミリア・スカーレット、フランドール・スカーレット

【東方妖々夢】8人

橙、アリス・マーガトロイド、リリーホワイト、リリカ・プリズムリバー、魂魄 妖夢、西行寺 幽々子、八雲 藍、八雲 紫

【東方永夜抄】8人

リグル・ナイトバグ、ミスティア・ローレライ、上白沢 慧音、因幡 てゐ、鈴仙・優曇華院・イナバ、八意 永琳、蓬莱山 輝夜、藤原 妹紅

【東方風神録】8人

秋 穰子、鍵山 雛、河城 にとり、犬走 椛、射命丸 文、東風 谷 早苗、八坂 神奈子、洩矢 諏訪子

【東方花映塚】1人

小野塚小町

合計 35人

【主催者】

四季映姫・ヤマザナドゥ

2・博麗の巫女と異変（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

2・博麗の巫女と異変

「まったく、何で私がこんなことに巻き込まれなきゃならないのよ……」

森の中を歩きながら、博麗霊夢はぼやいた。

何が起きたのか、彼女にはいまだに良く理解できていなかった。

博麗神社で普段どりの一日を過ごしていたはずが、何の違和感も感じないままいつの間にかあの場所にいた。

まるで夢の中にいるように、状況に対する疑問は浮かばず、彼女はただその場に立っていた。

やがて声がはつきりと聞こえて、彼女の思考力は覚醒に向かった。周りを見回すと、知った顔がいくつもあった。

魔理沙とは親しい仲だし、炎を生み出して飛び掛かった少女、藤原妹紅とは、一度敵として戦ったことがある。そして……。

「ああ、もう！」

頭に蘇った光景を、意識して記憶の底に押し込める。あの時耳にした低い音とその後見えたものが、脳裏をよぎって消えていった。

「それにしても、私の目の前でこんなことやってくれるなんて、なめられたもんだわ」

幻想郷の多くの人間と妖怪を巻き込んだ今回の事件は、まず異変と言っていいだろう。

異変であれば、それを解決するのは博麗の巫女の役目。

「あいつ、絶対に捕まえてやる」

がさがさと落ち葉を踏み分けながら、ひとりごちる。

珍しいことだった。普段であれば、異変は起こっても原因はわからない。

だから彼女は異変が起きれば、とにかく幻想郷中を飛び回ってその原因を探した。

しかし今回の事件に関して言えば、原因も犯人も既にわかっている。

彼女は、あの顔を知っている。

「とにかく、あいつのところに行かないと……。面倒ね」

四季映姫。楽園の閻魔。

一度会って話をした時には、こんな妙な異変を起こすような者には見えなかったが……。

いつの間にか足を止めてしまっていた自分にいららし、霊夢は首を振って余計なことを考えるのをやめた。

右手で懷の陰陽玉を握り締める。何の冗談か、彼女の脇にあった道具袋には、食料や水などと一緒に、彼女が普段使っている陰陽玉や霊符が入っていた。

「ま、あるものは使うけどね」

はあ、とため息をついて、霊夢は歩き出す。

「早く帰って、お茶にしましょ」

ざわざわと鳴る森の中、彼女の足音が土と風に吸い込まれて消えていった。

誰も信用しない、誰とも馴れ合わない博麗の巫女。

その彼女が、まだ考えていなかった。

この殺し合いに乗る者がいるかもしれないということに。

敵は四季映姫だけとは限らないことに。

そして、彼女は気づいていなかった。

ひととき大きな木の上に座り幹に背を預けて、彼女を見つめている者がいることに。

【博麗 霊夢：現在地… D - 2】

3・月の頭脳（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

3・月の頭脳

日の光も届かない森の中に建つ、一軒の洋館。

がらんとしたその館の一室で、八意永琳はソファに身を横たえて、目を閉じていた。

永遠亭にある自分の研究室の倍ほどもありそうな部屋。猫足のテーブルに、深く沈みこむ一人がけのソファ。テーブルの上には布の袋と救急箱、そして一本のナイフが置かれている。

袋は支給品として永琳に与えられていたもの。救急箱と包丁は、この館に飛ばされた永琳が、使用人用らしき部屋と厨房からそれぞれ持ち出したものだった。

ゆっくりと目を開き、右手でナイフを取り上げる。

わずかのためらいもなく永琳はそれを自分の左腕に押し付けると、すばやく手前に引いた。

「つつ……」

鋭い痛みに一拍遅れて、真つ赤な血があふれ出る。

どくどくと脈打つ自分の腕が、熱い。

永琳は、しばらく自分の左腕を見つめた後、ナイフをテーブルに置いて救急箱から消毒液と包帯を取り出した。

片手だけで器用に手当てを済ませる。

「どうやら本当のようね」

長い時を生きてきた彼女にとってさえ、初めての経験だった。

月から下りてきたあの日から。

数えるのもやめてしまうほどの昔、この地上で自分の主君を見つけ
たあの日から。

蓬莱の薬を飲んで不老不死となったあの日から。

彼女の体が不死の力を失うことなど、これまで一度としてなかった。
どんな傷も瞬時にふさがり、常人ならば死に至るような大怪我を負
ったとしてもわずかな時間で行動可能なまでに回復する体。

彼女と彼女の主君である蓬莱山輝夜、それにもう一人、輝夜の宿敵である藤原妹紅。

幻想郷でたった三人のみが持つ、呪われた体。

それが今は、この程度の傷でさえ簡単に治すことができない。

——大怪我を負えば死に、死ねば蘇ることはない。蓬莱人であつても。

皆が集められたあの場所で少女の言っていたことが思い出される。

悲観的になるつもりは無いが、信じる必要があるらしい。

自分の体は今、蓬莱人としての力を失っている。

「姫は、喜ぶかしら」

皮肉な笑みを口だけで作る。

さつきから永琳の頭を離れないのは、輝夜のことだった。

永琳の主君、蓬莱山輝夜は強い。

単純な身体能力の高さに加えて、彼女には長い月日をかけて集めてきた宝がある。スペルカードとして使うそれらは攻防兼ね備えた強力なもので、輝夜自身の力によるところが大きいとはいえ、その威力を見るたび永琳は地上の技術も捨てたものではないと思わされる。たとえこの殺し合いに乗った者がいたとしても、そこらの妖怪では輝夜を殺すどころか、ろくに傷を負わせることさえできないだろう。それぐらい輝夜は強い。だが、同時に輝夜には危うさもあることを、永琳は知っていた。

彼女のことは、永琳が誰よりも良くわかっている。誰よりも長く一緒に、誰よりも近くで過ごしてきたから。

——私は、いつだって今この瞬間を生きる。

口癖のように言っていた輝夜。

永遠と須臾の罪人として生きている輝夜は、その運命に対する反動か「今」に強くこだわっている。

その裏返しのように彼女の不死は幾歳もかけて、輝夜の、自分の肉体に対する無関心を育んできた。

今の自分たちは蓬莱人としての特性を失ってしまっている。

いかに強くとも、今のような状況で自分の体を気遣わないならば、それは死に直結する。

輝夜が危険にさらされる場面が、永琳には容易に想像できた。

「姫は守らなければ」

荷物の確認は既に済ませた。

ご丁寧にも、布の袋の中には、食料と水に加えて、彼女が普段使っている弓矢と薬品類が詰め込まれていた。

地図と名簿のチェックも、既に終わっている。

森の中にある館は、地図上で一箇所だけ。

名簿には知った名前と知らない名前があっただが、それは彼女にとって大した問題ではない。

輝夜を守り、自分も生き延びる。そのためには何をすべきか。日の光の届かない場所で、月の頭脳は再び物思いに沈んでいた。

どれぐらい経ったか。

眠ったように身じろぎさえしなかった永琳の目が、ゆっくりと開いた。

それと前後して、永琳の思考を打ち破るように、玄関のドアが軋む音がする。

耳障りな音に続く、何者かの足音。どうやら一人らしい。

永琳は体を起こすと、無駄の無い動きで荷物をまとめ、足音一つたえずに部屋から出て行った。

【八意 永琳…現在地：A - 6】

4・兎、死と対面し（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

4・兎、死と対面し

坂道を歩きながら、因幡てゐは考えた。
生き延びるためには殺さなければならぬ。

殺して回れば他の者たちから狙われる。

とにかくこのゲームは過ぎにくい。

どうすれば生き残ることができるか、行動に移る前に、じっくりと考える必要がある。

自分でも驚くほどすんなりと、てゐはこの殺し合いを受け入れていた。

あの場所じゃべっていた少女をてゐは知っている。

幻想郷の閻魔、四季映姫。その言葉に偽りが含まれていたことは、これまで一度として無い。

てゐとはまるで正反対である。

「？」

ぴくりとてゐの耳が動く。

地上の兎のリーダーであるてゐは、耳が良い。

その耳が何か不自然な音を捉えたらしい。

てゐは素早く辺りを見回すと、頭を低く下げて岩陰に身を潜めた。
息を殺して、じっと待つ。

一分、二分、三分。

変わったことはない。

ただひんやりとした風が首筋を吹き抜けていくだけ。

ぱちくりと目を瞬かせて、てゐはそうつと岩から顔を覗かせた。

そのてゐの耳元で、

「何をしている？」

声がした。

「わっ……」

驚いて振り向いたてゐの前に、赤い髪の少女が立っていた。その右

手には、背の高い彼女自身よりも大きな鎌を握っている。

軽々と持ったその鎌の柄でとんと肩を叩きながら、その少女はてゐに話しかけた。

「お前さん、永遠亭の兎だったかな」

「そ、そうだけど……」

てゐは答えながら、必死で考えた。

見るからに危なそうな奴だ。あの右手に握っている鎌なんて、まるで死神が持っているもののように――。

まさか。

てゐの背中を一筋の汗が流れ落ちた。

「あなた、ひよつとして、閻魔の部下の、死神？」

「そうさ。あたいは映姫さまの命令でこの殺し合いに参加してる。手早く終わらせるためにね。」

で、ちようどあんたを見つけたから、命をいただくって訳だ」

冷めた口調で彼女は言う。

てゐの顔が蒼ざめた。予想通りといえば予想通りだが、あまりにも唐突すぎる。

自分は、まだ死にたくない。

「ちよつと待つて。私を殺したところで、たった一人にしかならないよ。しかも私には何の力もない」

「それはそうかもしれないね。けど一人でもゼロよりはいいさ」

気にせず鎌を握り直す赤髪の死神。光を反射してざらりと光る鎌をできるだけ見ないようにしながら、てゐは必死で呼びかけた。

「わ、私なら、もっとたくさん殺す手伝いができるよ」

ほう？と眉が上がる。冷静に考える暇を与えないように、てゐは言い募った。

「そ、そうだよ。私のいうことなら誰だって信じる。神でも悪魔でも使って、殺し合いにつなげてあげるよ。あなた、それが望みなんでしょ？」

「まあ、そうだな」

少女の唇が、嫌な形に微笑んだ。

「じゃあ、お前さんにチャンスをやろう」

「チャンス……？」

不安げな顔をつくりながら、内心でてゐはほくそ笑む。一度こう言わせてしまえばこちらのものだ。

「ああ。この道を抜けた先の木陰に、一人の少女が座ってる。そいつと話をして、生き延びられたら見逃してやろう」

「へ、へえ」

少しだけ嫌な予感がした。まあ、向かう振りをして、まいてしまえばいい。

「逃げようとしたらすぐに殺すけどね」

けらけらと笑って、死神はひらひらと手を振った。

目はまるで笑っていないかった。

てゐにぞくりと悪寒が走った。

【因幡 てゐ…：現在地：E-1】

【小野塚 小町…：現在地：E-1】

5・葬送の音（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

5・葬送の音

森の中。

木々のざわめきに混じって、人工的な響きが漂っていた。

時に強く、時に弱く。強く、弱く。強く、強く。強く。

その響きを追っていくと、やがて一人の少女にたどり着く。

音の源泉は、彼女が一心不乱に弾いているキーボードだった。

森の中にあって円形に木が無い、広々としたその場所は、まるで彼女のためのコンサート会場のよう。

彼女と彼女のキーボードが紡ぎだすその演奏は、彼女が着ている服の赤色よりも情熱的だった。

聴衆はたった一人。

演奏の対価は、どちらかの命。

白と黒のモノトーンに触れた指から、形を取った音が弾け出る。

「ベーゼンドルファー神奏！」

叫び声と同時に、無秩序なうねりを伴った音の弾幕が、規則だつて標的に向かった。

音の勢いに負けて、てっぺんに星をあしらった赤い帽子が吹き飛ばされる。

「へえ、面白い芸当だね」

音の向かう先で、彼女は悠然と笑っている。

「ずいぶん余裕じゃん！けど、あたしのこのスペルを全部避けきるなんて不可能だよ！」

リリカ・プリズムリバーは、自分の前のキーボードをいつそう激しく叩いた。鍵盤の音色と共に音の刃はどんどんと数を増やし、風を切って先を争いながら突き進んだ。最も速い音が目標の首を引き裂こうと牙をむく。

「けどね」

ぱり、と何かの音がした。

「？」

リリカはふと指を止め、顔を上げて、――そして慄然とした。リリカと彼女をつなぐ直線上が歪んでいた。

歪みを生んでいるのは二人をつなぐように走った白い光の線で、そこから空間がひび割れるように光の筋が方々に伸びていく。泰然として動かない彼女の唇が、ゆっくりと単語を紡いだ。

「神の歩かれた御神渡り」
ばきり。

そんな音がした。

その直後、それが聞き間違いだったかと思うほど、比べ物にならないほどの轟音が、耳を覆うばかりに鳴り響いた。

それは地面を揺るがすほどで、目が届く精一杯の遠くにある木々をさえ震わせる重みを持っていた。

音が収まった時、リリカの生み出したベーゼンドルファーはその和音をかき乱され、粉々に吹き散らされていた。わずかに残った音の断片も、弱々しい響きを残して切なそうに消えていくだけ。

ベーゼンドルファーと同様、音圧をまともに受けたリリカもまた、全身を切り裂かれ打ち据えられて吹き飛ばされて、仰向けに倒れていた。

耳から、口から、体中から赤い血が流れ出て、彼女の服を遥かに情熱的に染め上げる。

「あんたのスペル、なかなか面白いけどね。繊細すぎる。同じ音なら今のあたしのくらい力がなけりや、実戦には向かないさ」

「うっ……」

「ま、これが今のあんたとあたしの力の差だ。どうする？まだやるかい？」

「あんた、何なのよ……」

顔を上げながら、リリカは声を絞り出す。

「ああ、知らずにかかってきたのか。納得したよ。なめられてるの

かと思つて、ついやりすぎちゃった」

そんなリリカを腕を組んで見下ろして、彼女は自信に満ちた声で言った。

「あたしの名は八坂神奈子。山の神で風の神、そして戦いの神さ。覚えときな」

目を細めてそう言い放つと、神奈子はふいと踵を返した。

「神、様？」

「あれだけでかい音を出したからね。もうすぐ誰かがやってくるだろう。動けるならあんたもさっさとここを離れな」

そのまま、神奈子はリリカに背を向けて歩き始めた。

さく、さく、さく、と、音を失った世界にリズムが刻まれる。

「……」

リリカの虚ろな目が、微かに光を取り戻した。指が震えながら持ち上がる。

「ファツイオーリ、冥、奏」

ぼそり、とつぶやくと、ベーゼンドルファーに似た、数は少ないが鋭い音の刃が宙に現れた。

「そら……いけ」

とん。

リリカの指が宙に落ちて、耳に聞こえない音が、神奈子に向かう。

振り返った神奈子の頬を、ファツイオーリが薄く切り裂いた。

後に続いて、次々と音の刃が神奈子を襲う。

「ヤマトトールス」

だが、残りの音は決して届かず。

つぶやいた瞬間、神奈子を守るように舞い上がったナイフの群れが、螺旋に渦を巻きファツイオーリを蹴散らして、嵐の中の枯葉のようにリリカの体をも一瞬のうちに飲み込んで吹き飛ばした。

「バカナ子」

一瞬だけ足を止め、哀れむような蔑むような視線を投げかけて、神奈子はそのまま歩き去った。

言葉が空に溶ける一瞬前にリリカの体は大地に落ちて、その時にはもうリリカは死んでいた。

その全身が奏でる最後の音が、吊いの鐘のように鳴り渡り、森がそれを受け止めて、後にはただざわめきだけが残された。

【リリカ・プリズムリバー 死亡】

【八坂 神奈子 現在地：B - 6】

【残り 34人】

6・同行二人（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

6・同行二人

名も無き大妖精は、草原の真ん中で途方に暮れていた。

「チルノちゃんは無事かな……」

さつきから彼女が考えているのは、彼女の一番の親友、氷の妖精チルノのことだった。皆が集められたあの場所でも一緒にいたのだが、気がつくと大妖精はここにいて、チルノとは離れ離れになっていた。

「きゃ」

心地よい風が吹き抜けて、大妖精の背中の羽を揺らしていった。虫のそれに似た彼女の羽は細い細い絹糸で織ったように薄くて繊細で、天高くにある光を受けてきらきらと輝いている。高い空は透き通るほどに青く、波打つ草原は折り重なるように碧く、大妖精を包み込むように広がっていた。

「……あれ？」

目の前に広がるその眺めの中にどこか不自然なものを見たような気がして、大妖精はつぶやいた。

じつと目を凝らす。

彼女の足ではずいぶんかかりそうな遠くにその原因はあった。

草原と空の境界線上の、草原と空のほんの一部分。ちょうど魚眼レンズからのぞいたように、ちょうど水面に波紋が立ったように、

ちょうど空に陽炎が立ち上ったように、そこだけがゆらゆらと揺れていた。目の錯覚か、それは大妖精から見て右側にゆっくりと移動しているようにも見える。

「何、あれ」

大妖精は思わず声を出していた。

その声が聞こえたのか、ただの偶然か。

移動が止まったように見えた。

それから、そのゆらゆらが大きくなり始めた。

そして、それが大きくなっているのではなく近づいてきているのだと気づくまでに、それほど時間はかからなかった。

「ひ……」

悲鳴をあげかけて、あわてて大妖精は口をつぐむ。

じりじりと後ずさり逃げようとするが、体が思うように動かない。固まってしまった大妖精の目の前まであつという間にやってきたそれは、そのまま大妖精の周りをぐるぐると回り始めた。

「い、一体、何？」

震える声で、大妖精はささやいた。その途端、その動きがぴたりと止まる。

「え？」

驚いて身をすくめる大妖精。

風がざわざわと音を立てて草原をかきわけていった。

「ねえ、あたしのこと、見えんの？」

「ひゃ！」

どこから突然聞こえた声に、大妖精は悲鳴を上げた。

「え、え、え、えっと、はい」

激しくどもりながら、大妖精は何とか声を絞り出す。思わず答えてしまっていたが、実のところ彼女自身にも何が「はい」なのか分かっていなかった。

「あゝ、やっぱり見えるんだ。なあんだ、あたしもまだまだだね」

大妖精の目の前、草原と空の揺らめきからそんな声がしたかと思うと、まるで本のページをめくるように揺らめきから一人の少女の姿が現れた。

そして突然、その少女は手に持った何かを大妖精にかぶせてきた。

何が何やらわからず、大妖精は立ち尽くしてしまう。

「あゝ、なるほどね、こうなるんだ。これじゃちょっと目立つなあ」

「……へ？」

ぽかんとしたままの大妖精。目の前の少女は、大妖精にかぶせた何かを取り払うと、白い歯を見せてにかりと笑った。

「すごいだろ？ これ。あたしが作った光学迷彩スーツさ」

全身水色で固めた少女の胸元で、金色をした鍵が光っていた。

「……び」

「ん？」

体の前で両手を組んで、大妖精は叫んでいた。

「びつくりさせないでください！」

・
・
・

「まったく、あんな目立つところで大声をださないでくれよ」

「ごめんなさい……」

「ま、いいや。怒ってるわけじゃないんだ。新作の実験台になってくれたんだしね」

「というか、別に私にかぶせなくても、問題点は自分で見られたんじゃない……」

しょんぼりとうなだれながらも、どこか釈然としない気持ちで大妖精はつぶやいた。

「ん？ 何か言った？」

「いえ」

「そう。あ、そついや自己紹介がまだだったね。あたしは河城にとり。谷カッパのにとりさ。初めて出会ったのがあんたで良かったよ。凶悪な奴だったらどうしようかと思った」

両手で頬を包み込むようにして掌であごを支えながら、谷カッパのにとりは嬉しそうに話した。

草原から少し外れた道の脇で、二人は腰を下ろして話をしていた。

「私事です」

ようやく一息ついて、大妖精もうなずいた。

「で、大妖精ちゃん？ 長いから勝手に大ちゃんって呼ぶけどさ、大ちゃんはこれからどうするんだ？」

にとりの言葉に、自分のことを同じ呼び名で呼ぶ友人を思い出して、大妖精は思わず笑顔になった。

「友達を探したいです」

「友達ねえ。どんな子？」

「氷の妖精なんです。チルノちゃんって言って、にとりさんみたいに全体的に青い子なんですけど……」

「あたしは緑も好きだけど」

言いながら、にとりは持っていた袋から緑色の帽子を取り出しかぶる。

「にとりさんはこれからどうするんですか？」

「そうだね。天狗様や山の神様を探すっていうのもアリだけど……」

かぶった帽子の陰から、にとりはちらりと上目づかいで大妖精を覗き見た。

「チルノちゃんだっけ？　しばらくは大ちゃんの友達探しに付き合ってみるのもいいかな」

そう言って、ぽんぽんとお尻を払いながら立ち上がる。

「ただし」

両膝を揃えて立て、組んだ両手を膝に回して座っている大妖精を、にとりは見下ろした。

「その代わり、そんな堅苦しいしゃべり方はやめてくれない？」

「あ……。は、……うん。にとりちゃん」

恥ずかしそうに言う大妖精。それを見て、にとりはもう一度にっ
と笑った。

「よっし。じゃあ行こうか！　この河童界の天才技師にとりに似てるなんて、会うのが楽しみだ」

「あはは、そういう意味ではあんまり期待しない方がいいかも……」

苦笑しながら大妖精も立ち上がる。薄い羽がリズムカルに震えた。

こうして、河童と妖精の二人旅が始まった。

）
）
）
）
）

【大妖精】

現在地：E - 5

前登場話：I

次登場話：《17・一人、二人》

【河城 にとり】

現在地：E - 5

前登場話：I

次登場話：《17・一人、二人》

7・天狗が見ていた（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

7・天狗が見ていた

「あやや、誰かと思ったら霊夢さんじゃないですか」
能天気な声が霊夢の耳に届く。

振り向いた霊夢の目に入ったのは、頭上高くそびえる木から伸びた枝に腰掛ける、射命丸文の姿だった。

ぶらぶらと投げ出した足が宙をかいている。

「あら、文じゃない。ちょうど良かった」

「ん？霊夢さん、私に何か用ですか？」

「ええ。あいつの居場所、知らない？」

「ちよつと待つてください」

そう言つて手早く荷物をまとめて肩に担ぐと、文は片手で地面と水平に伸びた太い枝を握り、踏ん張った足をぽんと蹴つて振り子のようにくるりと回転し、宙に飛び出した。

短いスカートが風をはらんで危うくひらめく。

背中の翼が空気を抱いて、彼女の体を霊夢から少し離れた地面にふわりと優しく下ろした。

「お待たせしました。で、何でしたっけ？良く聞こえませんでした」

「だから、あの憎たらしい閻魔の姿、あんたの目で見えない？目、いいんでしょう？」

「私の目はそんなに良くないですよ。そりゃ普通の人に比べればいいですけど、私たちの仲間には千里先まで見通す子もいるぐらいですから」

「そんなのどうでもいい」

「……まあ、結論から言うとも見えないです」

「あ、そう」

それじゃあね、と霊夢は興味を失ったように背を向けた。

「けど、あの閻魔様がどこにいるのかぐらいは知ってますよ」

その背を、文の面白がるような声が追いかけた。

霊夢が振り向く。

「あの、そんな疑うような目で見ないでください」

「どこにいるの？」

「ひたすら南東ですね。あの閻魔様が言っただじゃないですか、自分たちがいるのはF - 6だって」

「そういえばそんなこと言ってたっけ。でも、たしか入れないんですよ？」

「そうですね」

「空からでも無理かなあ。あんた、ちょっと試してみてください？」
「嫌ですよ。下手したら死んじゃうじゃないですか」

二人の間を風が吹く。

「ちなみに、地形から考えて私たちが今いるのはこの地図のD - 2のブロックですね」

いつの間に取り出したのか、文の手には地図が握られていた。

「閻魔のところまではけっこうあるわね」

「頑張ってください」

「空が飛べないのは辛いわ。結界は使えるみたいだけど」

こちらもいつの間に取り出したのか、手にした陰陽玉をぽんと投げ上げる霊夢を、文は静かに見つめていた。

「今度は私から質問してもいいですか？」

「何？」

地図をしまう文につられて、霊夢も陰陽玉をしまいながら答える。

「霊夢さんは、映姫さんを倒すつもりなんですか？」

「当然よ。それがどうしたの？」

「いえ、別に。面白そうだなあと思いました」

「面白くないわよ」

「にしているぶん隙だらけでしたけど、あれは罠か何かだったんですか？」

「罠？私がそんな面倒なことするわけ無いじゃない」

「……笑えませんか」

文は大きくため息をついた。

「で、あんたの話はそれだけ？ だったら私はもう行くわ。じゃあね」
そう言ってもう一度背を向けようとする霊夢を、文は止めた。

「待ってください、霊夢さん。用があるんです」

「用？」

「ええ。用っていうのはですね……」

文の声のトーンが、一段落ちた。

「ん？」

「『幻想風靡』」

そう口にした途端、霊夢には文の姿が霞んだように見えた。

文の背中の大きな翼がばさりとはためいて地上の落ち葉を舞い上げ、黒い靴がとんと地面を蹴る。

「なっ……」

文が飛んだ。

幻想郷一といわれるスピードで、羽ばたくのももどかしいといったふうの一直線に霊夢に向かう。

霊夢には、離れて話していた文が、瞬きをした一瞬のうちに目の前に現れたように見えた。

勢いを殺さないまま文は霊夢の隣を通り過ぎ、すれ違いざまに右手を振るった。

その一閃は素手にも関わらず刃のような鋭さを持っていて、とっさに横っ飛びした霊夢の逃げ遅れた髪を一房、ざっくりと切り飛ばした。

風圧と避けた勢いが重なって霊夢は吹き飛ばされ、地面に倒れこみながらも何とか体勢を整える。

柔らかい土の上をごろごろと転がりながら片膝をついて起き上がり、霊夢は文をにらみつけた。

「何すんのよ、この鴉天狗！」

「おや、面白いことを言いますね。霊夢さんの言葉とは思えません。妖怪は人間を襲う。人間はその妖怪を倒す。それがあなたの持論で

しょう?」

霊夢との間に十本ほどの木を挟んで立ち、文は険しい顔つきで霊夢の言葉に答えた。

二人の頭上に、舞い上がった落ち葉が力尽きて降り注ぐ。

「そんな無警戒なことでは、映姫さんを倒すどころか——」

ばさりばさりと背中の中を翼をはたかせ、文の足が地面から離れた。

「——そこらの妖怪に殺されて、おしまいですよ!」

再び文は一瞬で加速し、霊夢との間の障害物をものともせず飛び掛かった。

「ったく!」

霊夢は懷から霊符を取り出すと、霊符を握った手を横に伸ばした。ぱしり、という音とともに、霊符が輝いた。

「たあっ」

霊夢が握った手を弾くと、まるで意思があるかのように、霊符は文に向かって次々と一直線に飛んでいく。

同時に、そのまま横に走り出しながら霊夢は続けてスペルを唱えた。

「『夢想封印』!」

シャボンのように色とりどりに輝く光の弾が霊夢の体から立ち昇り、空中でいったん停止すると一斉に文に向かって飛んでいった。

「やっとやる気になりましたね」

霊符を避けながらにつこりと笑った文に、夢想封印の光が追いつき、弾ける。

光弾が命中する一瞬前、文はつぶやいた。

「『風神木の葉隠れ』」

そして、光が炸裂した。

巫女装束の袖で風と光から目をかばいながら、霊夢は前方を見つめた。

「きいてないわね」

風と光に視界が遮られる直前、彼女は見た。

文の周囲に木の葉の壁が巻き起こり、夢想封印を受け止めていた。夢想封印の光の弾はすべて木の葉に遮られて、文には届いていない。少しずつ光も風も収まってきたので、霊夢は上げた腕を下ろす。

きよろきよろと辺りを見回す霊夢の耳に、ばさりと羽ばたきの音が届いた。

「いや、危なかったですね」

続いて声。

霊夢は頭上を見上げた。

無傷の文が、気持ち良さそうにその羽を広げていた。

霊夢と目が合うと文は笑って、くると空中で回転して足から地面に降り立った。

「元気そうね」

霊夢はつぶやきながら、懷から陰陽玉を取り出した。霊符と同じように、陰陽玉も彼女の手の上で輝き始める。

「あ、霊夢さん。もういいですよ、戦わなくても」

「はあ？」

「私の用事は済みましたから」

もう一度文はにつこりと笑った。

「霊夢さんがあまりにも映姫さんのことしか考えてなかったもので、ちよっとしたショック療法です」

「……」

「妖怪を見たら警戒してください。妖怪を見なくても常に警戒してください。そうでないと殺されますよ、冗談でなく」

笑顔から一転してまじめな表情になり、文はそう言った。

「……つまり、あんたはそれを私に教えるために、わざと襲うふりをした、ってこと？」

「霊夢さんがそこの妖怪に殺されたら困りますからね。信用と油断は別ですよ。のんきなのはいいですけど、気をつけてください」

「その割にはずいぶん手加減なしかったような」

「手加減したらショック療法にならないでしょう?」

「避けきれなくて死んだらどうするつもりだったの?」

「大丈夫だと思ってましたよ」

三度につこりと笑って、文は翼をはためかせた。

「何か、納得いかないわ。この気持ちを私は誰にぶつければいいのかしら」

「それはもちろん、映姫さんに」

もはや耳になじんだばさりばさりと言う音が、落ち葉と一緒に文の体を持ち上げる。

「じゃあ、私はこれで。命があつたらまた会いましょう」

宙に浮きながら、文はぶんぶんと手を振った。

「あんた、どこに行くのよ」

「あの森を抜けてずっと向こうへ。何か面白そうなことが私を待ってる気がします」

「あんたの方こそそのんきじゃない」

「私の性分なんですよ」

その言葉だけを残してあつという間に舞い上がると、文はその姿を消した。

思い出したように、吹き上がった落ち葉が霊夢の肩に降りてきた。

「まったく、人騒がせな鴉ね」

霊夢は文の消えた先を見やり、ため息をついた。

「でも、ま、ありがと」

【博麗 霊夢：現在地：D - 2】

【射命丸 文：現在地：D - 2】

8・彼女の、幸運（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

8・彼女の、幸運

てゐの頬を、冷たい汗が流れ落ちた。
死神はこう言っていた。

——この道を抜けた先の木陰に、一人の少女が座ってる。そいつと話をして、生き延びられたら見逃してやろう。

嘘は言っていない。後半はまだどうか分からないが、少なくとも前半はその通りだ。

だが。

まさかそれが「彼女」だったとは。

その強さを疑う者は誰もいない。

そして、こと危険度で言えば、幻想郷広しといえどもこの少女の右に出る者はまずいないのではないか。

普段ならあまり関わりたくない相手。いや、絶対に関わりたくない相手だ。

だが、自分の後ろで目と鎌をぎらぎら光らせている死神も、てゐにとってはやはり同じくらい恐ろしい。

それに比べると、様々な噂はともかくとして、見た感じは純粹そうな分この少女の方が少しはましに思える。

というか、そう思い込まないとてゐの心が折れそうになってしまう。大丈夫。

取り込むことができればこれほど心強い味方もいない。

一生分の安全を買ってお釣りが来る。

大丈夫だ。

所詮は子ども。悪い賭けではない。

意を決して、てゐは歩き出した。できる限り優しく見えるような笑いを浮かべて。

大きな木に背を預け、膝を抱えて、フランドール・スカーレットは空を見上げていた。

「お姉さまたちはどこにいるのかなあ」

見上げる彼女の視線の先には、憂鬱な空が広がっている。

——外に出たら日光を浴びて灰になってしまう。

そう教えられて五百年近く館の中で過ごしてきたフランドールは、どことも知れないこの地に飛ばされた時、ひどく怯えて木の陰に駆け込んだ。

だが、不思議なことに体には何の異変もなかった。
恐る恐る木の陰から出ても、やはりなんともない。

「なあんだ」

ほっと息をついて、フランドールは木陰から出た。

「お姉さまのうそつき」

口を尖らせて、フランドールは文句を言った。

それから思い切って飛び出すと、しばらくの間フランドールは広い世界を大喜びで跳ね回った。

だが、それもわずかな時間のこと。

すぐに飽きてしまうと、フランドールは木陰に戻り、座り込んだ。
結局のところ、今までと何も変わっていない。

——お姉さまに、会いたい。

「あら？」

その目が、一匹の兎を捉えた。

いつの間に現れたのか、人懐っこそうな笑みを浮かべて彼女の目の前に立っている。

「あなた、だあれ？」

「私は、因幡てゐ。あなたの味方だよ」

敵意がないことを示すように、てゐは両手を広げた。

「みかた？」

きょとんとした瞳がてゐを見る。

「そう。あなたを助けるために、ある人から遣わされたの」

「ふうん」

フランドールは意味が良く分からず、あいまいにうなずくと小首をかしげてみせた。

「わたし、助けなんていらないよ」

「本当に？」

そのフランドールの顔を覗き込んで、てゐは尋ねた。

「お姉さんが相手だと、少し大変なんじゃないの？」

「お姉さまが？」

フランドールの瞳が大きく開く。

「私は知ってる。あなたの姉さんは、嘘つきだ」

どきり、とフランドールの胸が鳴った。

それは、聞きたくない言葉。

笑顔をしまって沈痛な表情になり、てゐは言葉を操った。

「こんなに広い世界をあなたに見せないために、嘘をついてまであなたを閉じ込めていた」

その言葉を聞いたフランドールの瞳が、恐れを含んで揺らいだ。

「何のこと？」

「わからない？ 今回の出来事は、そんなあなたに機会を与えるためのものなんだよ。外に出る機会を。囚われのあなたを、籠から出すための。あなたをこれまでだまして閉じ込めてきたあの吸血鬼から、あなたを助け出すための」

「でも、お姉さまはわたしのことを心配して……」

「それも嘘。あいつは、あなたが怖いのだよ。あなたの背中のその翼、あいつとは似ても似つかない。あなたたちは本当の姉妹じゃない。

あなたの本当の家族は、あいつに殺されたんだよ。それを知られないように、外の人間と接触しないように、あいつはあなたを閉じ込めた。あなたが本気になったらあいつじやかなわないから」

「……うそでしょ？」

「本当だよ、残念だけど。私がこうしてあなたを助けに来たのが、その証拠。放っておいたら、あなたは間違いなくあいつに殺される。

あなたはいい子だから。あいつを信用しきっているから」

「……よくわかんないから、別にいいけどさ」

フランドールは頬を膨らませた。目が少しずつ潤み始めているのを無理に押し込めて、すねたように答える。

「一人はつまんないよ。これじゃ今までといっしょ」

「私が一緒にいてあげる。私はあなたを裏切らない。あなたの姉さんと違って。どうしてあなたに友達がないのか、考えたことがある？」

「わたしがきゆうけつきで、こわいから？」

「吸血鬼だから嫌われてるんじゃない。あなたの姉さんは、良く外を歩いているでしょう？」

「それは……」

「あなたが嫌われてるんだよ。あなたが危険だって、姉さんがうわさを振りまいてるから」

「うそ」

「私は本当のことしか言わないよ。嘘だと思っなら、自分の目で、耳で、確かめてみたらいい。でも覚えておいて。あなたの味方は私だけだよ」

フランドールの体が震えた。

「ほんと？」

「ええ。だから一緒に逃げましょう。あなたの幸せを守るために。邪魔する奴は倒してでも」

「うん……」

放心したようにてめを見上げながら、フランドールはうなずいた。優しくに笑う幸運の兎、因幡てめ。

孤独の吸血鬼フランドールにとって、てめと出会ったのが幸せだったのか、不幸だったのか。

立ち上がり、ぐいと目元を拭って歩き出すフランドールの後ろには、気づかれないように笑っててめが。

更にその後ろには口を歪めててめを見る小町がいて、距離を空けて

二人の後をついていった。

【フランドール・スカーレット 現在地：D - 1】

【因幡 てゐ 現在地：D - 1】

【小野塚 小町 現在地：D - 1】

9・紅ずきん（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

9・紅ずきん

ドアの脇から、明るい光に照らされた帽子が覗く。

「お邪魔しま〜す……」

誰にともなく遠慮するように声をかけて、紅美鈴はその屋敷に入った。

彼女にとって、屋敷は気軽に立ち入ってはならない場所であり、また気軽に立ち入らせてはいけない場所だった。

それは彼女の仕事が紅魔館という屋敷の門番であることに由来している。

「お嬢様や咲夜さんは、大丈夫でしょうか」

門番のくせに基本的にお人よしで、しかもものんびりやな彼女。そんな彼女は、紅魔館の住人に対する愛着が人一倍強かった。

わがままで気高く、幼くて威厳に満ちた紅魔館の主人、レミリア・スカーレット。

その右腕であり美鈴の直接の上司でもあるメイド長、十六夜咲夜。喘息もちの魔法使いや、五百年近く屋敷から一步も出たことのない悪魔の妹。

自分と同様にこの騒ぎに巻き込まれている、家族と言ってもいい少女たちを心配しながら、美鈴は屋敷の扉をくぐった。

がらんとしたホール。毛の抜け落ちた、かつては赤かっただろうじゆうたん。大きすぎるシャンデリア。吹き抜けの、高い天井。

「このお屋敷は、何なんでしょう」

つぶやいて、美鈴はきよろきよろと辺りを見回す。

「お嬢様に似合いそうなお屋敷だと思ったけど、こうして入ってみるとボロボロですね〜」

口に出した言葉は、空しくホールの高い天井まで駆け上がっていった。

それを追うように、美鈴はホールの両脇に弧を描くように設えられ

た階段を上った。

「それにしても、このお屋敷には誰もいないんでしょうか？」

「いるわよ」

独り言に対する返事。

突然響いた自分以外の人間の声に、美鈴は驚いて、半分ほど上ってきた階段から下を見た。

ホールの真ん中に、一人の人間が立っていた。

赤と青に染め抜かれた服。十字の模様が刻まれた帽子。編みこまれた長い銀髪。

左手を頬の高さまで上げて、にこやかに振っている。右手は背中に隠れて見えない。

「あなたは……？」

「八意永琳。ただの薬屋よ」

とんとん、と弾むように階段を上り、美鈴に近づきながら、永琳は答えた。

「ただの薬屋さんが、どうしてこんな幽霊屋敷みたいところにいるんですか？」

「それは、この建物が薬屋の仕事の拠点にちょうど良かったからよ」とんとん。

「なら、どうしてこんな騒ぎの中でまで薬屋さんを続けようと思ってるんですか？」

「それは、それが私にとっても、私が助けたい人にとっても望ましいことだからよ」

とんとん。

「それじゃあ」

ごくり、と美鈴は唾を飲み込んだ。

「どうして、手に持っているのが薬箱じゃなくてナイフなんですか？」

「それはね」

とん。

「！！」

ぶん、と。

無造作に振り上げ、振り下ろされた銀の刃物を、美鈴はとつさに後ろに跳んで避けた。

顔をかばった右手に鋭い線が走り、紅い色がそこをなぞる。

「あなたを殺すためよ」

受身を取って二階に転がり込みながら、美鈴は齒を食いしばって相手をにらみつけた。

先ほどまでとまったくかわらない笑顔。嬉しそうに光っている右手の先。

二人の間に、ぱさりと、ゆっくりと、美鈴の帽子が落ちた。

「私の帽子は緑ですよ」

軽口を叩きながら、美鈴は起き上がる。

「それじゃあ、今から染めてあげようかしら」

「お断りします」

左手を油断なく構えながら、美鈴はじりじりと永琳との距離を詰めていった。斬られた右手には感覚が無いが、それほど深い傷ではない。

対する永琳は、階段を上がりきってからまるで無防備な様子で、にこやかに笑ったまま、微動だにしない。

二人の距離が少しずつ縮んでいく。

あと、五歩、四歩、三歩。

「覚悟！」

大きく叫んで、美鈴は地面を蹴った。足にかすかな違和感を感じたが、気にはしない。

二歩で永琳の懷に飛び込み、勢いを乗せたままくりと半回転して後ろ回し蹴りを放つ。

「速いわね」

顔を反らせながら一歩後退し、永琳はかろうじてその一撃をかわした。美鈴の蹴りが目の前を通り過ぎると同時に後ろに引いた右足を

踏み込む。体を低くして美鈴の首を狙い、永琳は右手のナイフを横なぎに振るった。

だが、美鈴はそれを予想していたかのように軸足の膝を折り、体全体を床に落としてナイフの一閃をかわすと、伏せた体勢から永琳の顎を狙って掌底を繰り出した。

体のバネを活かした、体重の乗った掌底が、右手の伸びきった無防備な永琳に迫る。

「くっ」

永琳の表情が少しの焦りをはらんで、あわてて突き出した左腕の肘が重い掌底を受け止めた。

低い音がして、二人とも弾き飛ばされる。

二人の距離が空く。

二人は体勢を整えて再び向かい合った。

「……あなた、強いよね」

永琳が感心したように口を開く。

「馬鹿にしないでくださいね。それでも、肉体労働には自信があるんですから」

軽口を叩きながら、美鈴はもう一度永琳との距離を少しずつ詰めていった。

ぞくぞくと寒気がして、手足の感覚が無い。

美鈴の頬を、冷や汗が伝った。

——この人は、強い。

一瞬の思考の後、美鈴は再び地面を蹴った。

「やああっ！」

吼えるような声。

永琳がナイフを構えなおす。

その永琳に真っ直ぐ向かうと見せかけて、美鈴は地面に着いた右足を強く踏み込んで左に跳んだ。

先にあるのは、ホールを見下ろす手すり。

「あら」

手すりについた左手を軸にし、右手を伸ばしたまま回転しながら、美鈴は宙を飛んだ。永琳のつぶやきがぐるりと回りながら美鈴の耳を通り抜ける。美鈴はそのまま左手を離し、下のホールに落ちていった。

だん、という大きな音が、広いホールに響いた。

「つつつ……。さ、さようなら」

言って、駆け出す。屋敷の扉はもう目の前。外に出れば周りの木々にまぎれられる。逃げるのは簡単だろう。

走る。走る。はし――

突然美鈴の足がもつれ、膝が砕けた。

「え？」

思いもかけないことに戸惑って、美鈴はそのまま床に倒れ込んだ。手が、足が。

体が、思うように動かない。

「言わなかったかしら。私は薬屋だって」

「あ――」

全身に寒気がする。

手足の麻痺に加えて襲ってきた強い眠気の中、美鈴は必死で目を開いた。

右手に一直線に走った赤い線がその目に映った。

その向こうから、とんとん、と弾むように階段を下り、永琳が近づいてきていた。

「こういうとき、毒薬って便利ね。一撃でも、かすりさえすれば勝負をつけられるんだから」

とんとん。

「安心しなさい。痛みは感じないはず。せめてもの情けよ」

とんとん。

「それじゃあ」

とん。

意識がなくなる直前、美鈴は一瞬だけ、自分にナイフを振り下ろそ

うとする永琳の姿を見た気がした。
「さようなら」

すべてが終わった後。

「……」

表情一つ変えず、八意永琳はその屋敷を後にした。
携えるのは自分の荷物、それに紅美鈴の持っていた荷物から抜き取った必要なものだけ。

後に残るは、血だまりの中に倒れた紅美鈴のみ。

まるで墓標代わりのようにその背に投げかけられた緑色の帽子が、
血を吸って真っ赤に染まっていた。

【紅 美鈴 死亡】

【八意 永琳 現在地：A - 6】

【残り 33人】

10・母（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

森の中で、八雲紫は久しぶりに怒っていた。

誰よりも幻想郷と幻想郷の住人を愛している八雲紫は、今回の殺し合いに言い知れない怒りを感じていた。

騒動の元凶が閻魔であることも、彼女にとっては驚きであり許しがたいことだった。

紫が幻想郷でただ一人苦手意識を持っているのがあの閻魔、四季映姫だったが、苦手とはいえ映姫の幻想郷に対する愛情には一目置いていたし、尊敬してもいた。

そしてそれは紫だけでなく、幻想郷の誰もが認めるところだった。なぜ、と、紫は考える。

答えは出ない。賢者と呼ばれる紫にも、分からないことが無いわけではない。

あれが四季映姫の偽者だなどとは考えるまでもない。紫が幻想郷に住む者を間違えるはずがない。

会って、彼女の意図を確かめる必要がある。

つらつらと物思いにふけりながら歩いていた彼女の耳に、突然大きな音が飛び込んできた。

水面に張った氷を踏み割った時の音。それを一冬分集めて、いちどきに鳴らしたような音だった。

「……？」

紫はそつと気配を殺し、木の陰から陰へ、周りに注意を払いながら音のした方へ足早に駆けていった。

幾本もの木の横を通り抜け、幾枚もの木の葉を踏みつけにして、紫はその場所にたどり着いた。

そこは外の森と隔絶されたような、広々とした円形の空間で。

「……これは」

足を踏み入れた紫の目の前には、赤いものが横たわっていた。

名前は確か、リリカ・プリズムリバー。

幽霊楽団の三姉妹の末妹。

全身をナイフで貫かれている。

赤く染まって見えるそれは、赤い服の赤なのか、赤い血の赤なのか、どちらにしても、もはや生きてはいなかった。

少し離れたところに赤い帽子が落ちていて、その先についた星の形の飾りが寂しげに光っていた。

「許せないわね」

軽い口調で言いながら、紫の目は真剣そのものだった。

四季映姫の言っていたことは、趣味の悪い冗談などではなかった。

「あら」

油断無く辺りを見渡すその瞳が、円の広場の縁に立つ一本の木のとこで止まり、すめられる。

紫のところからは死角になっていて一見では気づきにくいが、そこには一人の少女が座っていた。

両膝を揃えて立て、木の幹にもたれて顔を両手で覆っている。

「そこのあなた」

紫は歩み寄りながら、落ち着いた声で話しかけた。

びくりとその少女の肩が揺れて、おそろおそろといった具合に手が顔から離れる。

黄金色の、少し癖のある髪。ふつくらとした頬。

「ここで何があったの？」

紫の問に答えは無く、ふるふると首だけが横に振られた。

「わから、ない。わたしが来た時には、もう、こ、こんなで……」

しゃくりあげる少女。そのくりくりとした目には、涙が浮かんでいる。

「そう」

優しくうなずいて、紫は手を差し伸べた。

「もう大丈夫よ。私と一緒に行きましょう。立ちなさい」

その手は大きく、手袋越しにも温かさがはつきりと分かり、少女の

頬を包み込むようだった。

怯えたふうだった少女は、しばらくそれをじっと見つめた後、そつとその手を握った。

「私、秋、穰子」

その言葉を聞いて、紫はにっこりと微笑んだ。

「そう。よろしくね、穰子。」

……で、木の上のあなたは？」

「！」

大きな枝が揺れて、さらさらと葉ずれの音がした。

「え？」

穰子がびっくりしたように自分の頭上を振り仰ぐ。

「下りておいでなさい」

「……」

紫の言葉に返事は無い。

揺れが収まってしばらく経った。穰子は目をぱちぱちさせて、紫と木の上を交互に見ている。

「……」

やがて、がさり、と音がして、諦めたように一人の少女が下りてきた。

青いワンピースが、長い銀髪と白い肌に映えている。

「別に、隠れるつもりはなかったんだけど……」

荷物を担いで下りながら、彼女は口を開いた。

「私は上白沢慧音」

「いつか会ったわね。歴史を食べ、創りだす賢き獣——ワーハクタクの少女」

紫の目の色が変わる。

「よろしく。私は八雲紫よ」

「え、えつと……慧音さん？」

「あ……ごめん。隠れて覗くつもりなんてなかったんだ。ただ、二人が突然やってきたものだから、慌ててしまっ」

戸惑った様子の穰子に微笑みかけて、慧音は紫と穰子を交互に見た。
「紫さん、久しぶりだ。穰子、よろしく」
「ええ、会いたかったわ。……ともかく、まずはこの場を離れましょう。あなたたちがこの殺し合いに乗っているとは思わないけれど、さっきの音につられて誰か危険なのが来ないとも限らない」
そう言つて、紫は穰子の手を握つて引つ張り起こすと、慧音を促してその場を離れた。

【八雲 紫 現在地：B - 6】

【上白沢 慧音 現在地：B - 6】

【秋 稔子 現在地：B - 6】

11・おやぶんごぶん（前書き）

この小説は、『上海アリス幻楽団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻楽団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

11・おやぶんごぶん

「まったく、やれやれだぜ」

岩にもたれかかり、頭の後ろで両手を組みながら霧雨魔理沙はぼやいた。

つばつきとんがり帽子の黒白魔女の頭上で、白い雲がゆっくりゆつくりと青い空を流れている。

「……」

魔理沙は一人ため息をついた。

一人でいると、皆が集められたあの場所でのことを思い出してしまふ。

森近霖之助。

魔理沙にとっては兄のような存在で、彼の経営する道具屋『香霖堂』には魔理沙もよく顔を出して話をしたものだった。

「香霖……」

ぼつりとつぶやく。

穏やかな青と白は慣れ親しんだ幻想郷となんら変わるところ無く、自分が今置かれている状況を錯覚しそうになる。

それでも心のどこかで何かが叫んでいた。これは嘘じゃない、夢でもない、油断すると次は自分がああなる、と。

頭を振って、余計な考えを頭から振り払う。

今はとにかく、自分が生きること考えなくてはならない。

手にした地図を見る。

自分が今いるのは荒れ地だが、地図を見る限り荒れ地は一つではない。現在地を特定するのは難しそうだった。

「やれやれ……」

ため息をつき、ちらりと袋に目をやる。

支給された荷物袋の中には、いくつかのものが入っていた。

数日分の食料と水、それと救急セット。

その他には今手にしている地図と、参加者の名前が書かれた名簿。霖之助の名前が書かれているそれを意識して見ないようにして、地図を袋にしまう。

それから、魔理沙は右手に握った八角形をした物を見つめた。

魔理沙の魔力を最大限に引き出してくれる魔法の道具。

弾幕はパワーだと信じて疑わない魔理沙の魔法に最高の威力を与えてくれる、頼れる相棒。

霖之助にもらった、魔法の八卦炉。

「……ちっ」

舌打ちをして、魔理沙は八卦炉を握り締めた。

こういう時に限って、何かにつけ霖之助のことを思い出してしま
う。

「……おや？」

その時、魔理沙の視界を見慣れないものが横切った。

小柄な体。青い服に青いリボンに青い髪。そして何より見間違え
ようが無い、その背に生えた氷の羽。

「あいつは……」

帽子のつばをくいっと持ち上げて、魔理沙はにやりと笑った。

「よっ、と」

音を立て、反動をつけて立ち上がる。

「おゝい」

「ん？」

大きく腕を振る魔理沙の呼びかけに、遠くを歩いていた青が顔を向けた。

「むむ？」

首を捻り、唸りながら近づいてきたそいつは、魔理沙まであと数歩というところまで来てようやく納得がいったようにぼんと手を叩いた。

「あ、いつかの黒白」

「魔理沙だ。いい加減覚えてくれ、チルノ」

「どしたの、こんなところで」

「お前こそどうしたんだ？ こんなところで」

「あたい？ あたいはねえ、え〜っと」

突然聞き返されてきよとした様子の氷の妖精チルノは、額に皺を寄せ、腕を組んで考え始めた。

背中から伸びた氷の羽がはたはたと空を打つ。

「……何でだっけ」

「別に何してるってわけでもないんだろ？」

魔理沙が意地悪く笑った。

「うつつ、そんなことないもん。あのね、」

「で、まあ相談なんだが」

魔理沙はチルノの返事を気にしない。

「何？」

チルノもそれに気づいていない。

「特にやること無いんなら、私と一緒に行かないか？」

「どこに？」

「そっだなあ……」

とんがり帽子の影から青い青い空が魔理沙を見つめていた。にっと笑った魔理沙の白い歯が、光を浴びてきらりと輝く。

「あの、大空の向こうまで。あの光に届くまで」

「あたい、溶けちゃう」

魔理沙にならって空を見上げると、真剣な顔でチルノはつぶやいた。

「良く分かったな」

感心したように返す魔理沙。

「偉い？」

「ああ、お前には敵わないよ」

「わーい。あたいの勝ち！ それじゃあ魔理沙はあたいの子分だねっ！」

「へえへえ。そしたら子分は親分について行くぞ」

きらきらと目を輝かせたチルノは、偉そうに腕を組んでそっくり返りながら考えるふりをした。

「うーん、どうしよっかな。どうしてもって言うなら、考えてあげてもいいけど。どうしても、あたいについてきたい？」

「ああ、頼むよ」

魔理沙は苦笑しながらうなずいた。

誰か話し相手がいれば、余計なことを考えなくて済むかもしれない。

「しょうがないな。いいよ、連れてったげる。その代わり、親分はあたいだからね。親分の命令は絶対に聞かないとダメだよ！」

「ああ、はいはい。分かったよ。私はお前の子分だ。お前の言うことには何だって従うよ」

頭の後ろで手を組み、歩き出しながら答える魔理沙。

その隣を慌てて駆け抜けて、魔理沙の前に出てそっくり同じように頭の後ろで手を組むチルノ。

「ダメだつて！ あたいが親分だから、あたいが先に行くの」

「はいはい。分かった分かった」

黒と青。人と妖精。そんな二人も遠目にはまるで親子のようで、広い空の下、寄り添っていた。

）
）
）
）
）

【霧雨 魔理沙】

現在地：C - 3

前登場話：―

次登場話：《28・厄神の見たもの》

【チルノ】

現在地：C - 3

前登場話：―

次登場話：《28 厄神の見たもの》

12・ある一つの出会いと別れ（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

12. ある一つの出会いと別れ

「あらあら、まだいたの？」

鍵山雛は驚いて思わず声を出した。

「……雛」

少し前に言葉を交わして別れたはずの相手、犬走椋が、言葉を交わして別れたまさにその場所にいた。

小ぶりな頭からぴんと立った獣耳に、きゅっとした腰の、服の下から伸びたふわふわの尻尾。透き通るような白い髪が、色づき始めた光を浴びてきらきらと輝いている。

「まさか、ずっとここにいたの？」

「……うん」

雛は少し呆れた。もともと、そんな雛自身も、何となく予感めいたものを抱いて元の場所に引き返してきているのだから、世話は無いが――。

「で、どういう状況なの？今さらだけど」

「新手か」

雛が椋から移した視線の先には、新たな敵の登場に銀髪と眼光と声音を陰しく光らせた少女がいた。その傍らには、長い尾を引いた、一抱えほどもある白く丸い雲のようなものが漂っている。

だが、非常に目立つその物体よりも雛の目を引いたのは、少女が佩いた一振りの刀だった。夕焼けの光をぎらりと反射したそれは鞘に収まっていてなお妖しいほどに美しく、雛は少しの間、呑み込まれたように見入ってしまった。

それはまるで真つ暗な中を飛ぶ夜蛾が、ぽつりと灯る明かりを見つけたように。

それはまるで涸れた大地が、久方ぶりの雨を夢中になってすすするように。

「……雛、起きて」

ぼそりとした声で、雛は我に返った。

耳を少しばかり後ろに寝かせた椀が、無表情に雛を見ていた。

「あ、……ごめん」

雛は謝ると、ため息をついて一歩前に出た。

「私の名前は、鍵山雛。厄神よ。厄を集めて、あなたたちが幸せに過ごせるようにするのが私の仕事。無意味に戦うつもりは無いわ。まして殺し合いなんて」

雛の形の良いあごの下で、緑の髪を結んだ赤い大きなリボンが揺れた。頭のとっぺんを大きく飾った同じ赤のリボンも、それに合わせてさらさらと音を立てる。

少し戸惑うような素振りを見せた後で、相手の少女が名乗った。

「私は、魂魄妖夢。見ての通りの半人半霊だ」

「……犬走椀。天狗」

雛と妖夢を交互に眺めて、椀も口を開いた。

「犬走椀……」

不意に、妖夢が刀の鯉口をきる音がした。その目に険悪な光が宿る。

「取り消せ、犬走椀」

「……？」

「先ほどの言葉を、取り消せと言っている。さもなくば……」

妖夢の右手が、刀の柄にかかった。目の光は一層強く鋭くなり、その小柄な体が雛にはやけに大きく見えた。

あわてて両手を広げて二人の間に立つ。

「ああもう、待った待った！ どうしてこんなに険悪な雰囲気になつてるの？」

雛の問いかけに、妖夢は目を細めて答える。

「そいつは、侮辱したんだ」

「あなたのことを？」

「いや。私のことなどどうでもいい。そいつが侮辱したのは、私にとって自分の名誉よりも、自分の命よりもはるかに大切なものだ」

「大切なもの……」

「ああ。そいつは、お嬢様のことを……幽々子お嬢様のことを、言うに事欠いて閻魔の手先だと。あの四季映姫の、部下だと言ったのだ」

腰を落とし、わずかに前傾になりながら妖夢が唸る。

ぎりぎり歯をかみ締める音が、雛の立っているところまで聞こえてきた。

怒りのためか、鞘を握った左手が白くなっている。

「桜、それは本当？」

体は妖夢に向けたまま、雛は桜に尋ねた。

「……うん」

相変わらず何を考えているのか分からないぼんやりとした瞳で、桜は答えた。

「……手先だとは言ってない。でも、部下だと言った」

「どうしてそんなことを言ったの？」

雛はできるだけ優しく聞こえるように気をつけて聞いた。

「……そう聞いたことがあったから。冥界の管理者だって聞いたから」

表情は変えないまま、尻尾と耳だけが力無く垂れていた。

「……そんなつもりは、なかったの。あなたが怒るなんて思わなかった」

椀が頭を下げる。

「……ごめんなさい」

言って、椀はそつと目を閉じた。

「……」

椀を見つめる妖夢を、迷いの影がよぎる。

「ねえ、妖夢さん」

雛が困ったように頬を手に当てながら、妖夢に話しかけた。

「この子も反省してるみたいだし、許してあげてくれないかしら？
あなたがご主人様のことを大切に思ってるのはわかるけど、無抵抗
な相手を斬るのはやりすぎだと思うわ」

妖夢は右手でぐつと刀の柄を握り、決めかねたようにしばし目を
泳がせていたが、やがて目を閉じて右手を刀から離れた。

そつと息を吸い込む音がした。

「やめておこつ」

そう言って、離れた右手で恥ずかしそうに頬をかく。

「済まなかった、椛。私こそ、勘違いして熱くなりすぎた。閻魔があんなことをしているのを見たばかりだから、過剰に反応してしまったんだ」

そして椛と目を合わせないようにして言うと、妖夢は手を差し出した。

「……？」

顔を上げて小首をかしげた椛に、妖夢は早口でまくし立てる。

「そのっ、な、仲直りの、握手をだな……」

「……」

ぼんやりとした目が、少しだけ見開かれた。

そつと手を伸ばし、椛は差し出された手を取る。

柔らかそうな毛並みの尻尾が、ぱたぱたとはためいた。

「良かった！」

緊張して見ていた雛が、両手を胸の前で合わせて嬉しそうな声を上げた。

「あなたたちの厄も落ちたみたいだし。私も嬉しいわ」

言いながら、雛は両手を広げてくるりと回る。膝下まで伸びたスカートが、頭と首元のリボンと同じ赤色を鮮やかに翻してふわりとふくらんだ。

「ありがとうね、妖夢さん。ちゃんと話を聞いてくれて、本当に嬉しい」

その言葉に照れたようにふいと顔を背けて目を細めると、妖夢は横目で雛を見た。

「ああ。……こちらこそ、頭を冷やしてくれて、ありがとう」

それだけ言うと、妖夢はそのまま二人に背を向けて歩き出した。

「では。ぐるぐる模様の幽霊頭巾に淡い色づかいの着物。そんな服装の美しい女性を見かけたら、妖夢はこの道を行ったと伝えてくれないか」

「あら、一人で行くの？」

「ああ。できるだけ早く幽々子様と合流したいんだ。すまない」

「そう？ ……その方がいいかもね。私は厄神。厄を集める神。私と一緒にいると不幸になる」

力が制限されているという今でもそうなのかは分からないが、雛は自分のせいで誰かが不幸になるところは見たくなかった。

「それじゃあな」

一瞬物思いに沈んだ雛は、妖夢が片手を上げるのを見て我に返る。

「あなたたちのことは忘れない。縁があつたら、生きて三人、また

会おう」

細長い影を引き連れて、半人半霊の少女は歩き去っていった。
そしてそれを、厄神と白狼天狗は並んで見送った。

「……それにしても」

見送った姿勢のままではばらく立ち尽くした後、はあ、とため息をついて、雛は柵を見やった。

「どうして私と別れてからの短時間であんなことになってるのよ」

「……わかんない。怒らせちゃった」

はあ、ともう一度ため息。

「本当に気をつけるのよ。それじゃあ」

またね、と言って去ろうとした雛の服が、引っ張られた。

「……待つて」

「何？」

「……一緒に」

「私と一緒にだと、厄が集まって不幸に」

「いい」

彼女には珍しく、間髪入れずに遮る言葉。どんな言葉よりも短い一言が、耳を通して雛の中に入ってきた。

「いいの？」

「……うん」

小さな種が水と光を浴びてやがて芽を出すように、一言一言が雛の中でゆっくりと育っていく。

「じゃあ……」

打算かもしれない。だがそれでも良かった。

「一緒に行こう、か」

「……うん」

わずかに詰まった雛の言葉に、無表情にうなづく少女。
その耳はぴんと立ち、尻尾はぱたと音を立てていた。
夕闇が少しずつ迫っていた。

〵
〵
〵
〵

【魂魄 妖夢】

現在地：B - 3

前登場話：―

次登場話：《24・紅と白／銀と金》

【鍵山 雛】

現在地：B - 3

前登場話：I

次登場話：《28・厄神の見たもの》

【犬走 椀】

現在地：B - 3

前登場話：I

次登場話：《28・厄神の見たもの》

13・交錯（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

13・交錯

八坂神奈子。

山坂と湖の権化。

はた迷惑な謎の神様。

山の神。

風の神。

守矢神社の祭神。

リリカ・プリズムリバーを殺害。

圧倒的な力。自分が最強だと自負している者の、自信に満ちた立ち居振る舞い。

舞う木の葉。

立ち並ぶ木の間を、彼女は北に歩く。

八意永琳。

月の頭脳。

蓬莱人。

薬屋。

輝夜の従者。

紅美鈴を殺害。

圧倒的な知識。 目的のためにどんな手段でも選ぶ者の、鋭さに満ちた眼光。

風に煽られたドア。

立ち並ぶ木に向かって、彼女は南に歩く。

そして、二人の歩む道が、ある一点で交差した。

お互いに一足では詰められない距離を空けて、彼女たちは向き合っ

た。

「こうして話すのは、初めてだったかな」

首までの長さの青い髪の方が、先に口を開く。

「そうね。噂はいろいろと聞いているわ、迷惑な山の神様」

真ん中で赤と青に染め分けられた服。編んだ銀髪を肩の後ろに払いのけて、もう片方が答えた。

「おや、月人にまで一目置かれてるだなんて、あたしも大したもんだ。神様冥利に尽きるね」

鼻で笑うと、青い髪が一緒になって揺れた。

「で、何か用かい？八意永琳。殺し合いならいつでも乗るよ」

「用ってほどもないんだけれど」

「そうか。じゃあ私は急ぐからこれで」

「まあ待ちなさい」

せつかちねえ、と口だけで笑って呼び止める永琳に、彼女は首だけ振り向いてにいいと笑った。

「あんたと違って、私の時間は無限じゃないからね、ムダに時間を過ごすことに耐えられないのさ。」

…… ああ、『昔のあんたと違って』だったか」

じろりと皮肉げににらみつけるその流し目を何でもないように受け流して、永琳は唇を結んだ。

「八坂神奈子、相談よ」

「四季映姫のことかい？」

「いいえ」

ほう、と意外そうな顔をし、少しだけ沈黙してから、神奈子はうなずいた。

「言ってみな。話だけは聞いてやる」

「……で、それに協力しろって？」

話し終えた永琳に、先ほどよりも長い沈黙を挟んで神奈子は返した。永琳がこくりとうなずくのを見て、ただ一言答える。

「お断りだね」

「私が信用できない？」

はっ、と息を吐いて、神奈子は笑った。森の木の枝の葉の表を揺する風を愛しげに眺めながら、捨てるように言葉を投げる。

「信用なんていりゃしない。あたしが欲しいのは信仰だけさ」

「そう。ならどうして？」

「気に入らないことがある」

「何かしら。解決する努力はするわよ」

どちらかがすうと息を吸う音が響いた。風が収まったか、その音は高く二人の間に広がる。

「あんたはその話をあたしに持ってきた。つまりだ」

ぎらりと神奈子の目が光った。

「あんたにとつてはあいつがあたしよりも怖いと、そういうことかい。能力の使えないあいつが」

「……嘘についても仕方が無いから言うけど、その通りよ」

びきり、と空間がひび割れる音がした。

「……へえ、はつきり言うじゃないか。本当にそうかどうか、あんた自身で確かめてみるかい？」

「それであなたの気が済むのなら、いいわよ。死んでしまっても知らないけど」

「死ぬ？あたしが？誰に向かって口を聞いてるんだ？」

お互いに笑ったまま、張り詰めた空気だけが膨れ上がっていく。いつの間にか二人の距離が詰まっている。

「」

永琳が口を開きかけた瞬間。

かかか、と神奈子が笑った。心底楽しそうに、腹を抱えて。

「？」

驚いたように永琳が身構える。

「ふふふ、失礼。」

あんた、気に入ったよ。そこまではつきり言う奴は、あんまり見な

い。自分に相当自信があるんだろうね。そういう奴は嫌いじゃない」
怪訝な顔の永琳を見て、神奈子は饒舌になる。

「……あたしは裾野の広い神だからね。あんたみたいなものには、これらの人間や妖怪とは違う信仰の仕方を求めるとするよ」

「それはつまり、色よい返事がもらえたということかしら？」

「あんたはあたしを信じない。あたしはあんたを頼らない。ただ自分に都合がいいように、互いの力を利用しあうだけの関係。それもまた信仰の一つの形」

「ドライな神様ね」

「不服かい？」

屈託の無い笑顔で、神奈子は続けた。

「あんたも、そういうドライな人間だと思ってたけど？」
「……」

一瞬の沈黙。

「助かるわ」

永琳の返事に、どこかの木から鳥が飛び立つ音がした。

まるでそれがきっかけになったかのように、二人の周りにざわめきとさざめきとひそめきが戻る。

ふつと唇を歪めて、神奈子は笑った。

「あたしをこけにしたんだ。自分の間違いをはっきり認識するまでは死なせないよ」

「まるで私を守ると言ってるように聞こえるわ」

「そんな生易しいもんじゃない。今回だけは死にたくても死なせてやらないよ、蓬萊人」

「これが終わったらいつ裏切ろうが自由ってことね」

涼しい顔で答える永琳に神奈子は一瞬だけ驚いたように口をつぐみ、目を伏せる。

「本当にドライな薬屋さんだ」

そして、歪めた唇をにやりと曲げた。

「それじゃあ、最初で最後の共同作業といこうか」

「ええ」

ある一点において交差した二本の道が、交わらない平行線となって薄暗い森を伸びていく。

向かう先に何かがあることを知って、あるいは知らないで、ひたすらに真っ直ぐ、二本は道を刻んでいった。
夜が近い。

【八意 永琳 現在地 A - 6】

【八坂 神奈子 現在地：A - 6】

14・紅白黒（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

14・紅白黒

ほら穴の外から音がした。

「ふわ……」

小さな口を精一杯開けて、紅い吸血鬼、レミリア・スカーレットはあくびをした。

口に当てた紅葉のような手の隙間から、片方だけの八重歯がちらりと覗く。

「うゝ」

顔をしかめて半分閉じた目をこすりながら、彼女は起き上がった。大きく開いた背中から伸びた蝙蝠のような翼が、飛び立つ前の蝶のようにぱたぱたと震えた。

激しい音は今も続いている。

それは、何かがぶつかって弾けるような音であり、しのつく雨のように絶え間なく打ち付ける音であり、夢の中にまで入り込み、レミリアを起こした音だった。

「うるさいわねえ」

すべすべの頬をぷくりとふくらませると、レミリアはほら穴の出口に向かいながら、きゅっと握り拳をつくってつぶやいた。

「『神槍』」

「くふ」

その子は私を見かけると、嬉しそうに走ってきた。

とつてもすてきな笑顔で、金色の髪もすぐきれいでうらやましいなあなんて思ってしまった。

私も思わず走り出してた。

良かった。

もうひとりぼっちじゃない。

すごく怖くてすごく心細かったけど、もう大丈夫。

安心したら鼻がつんとして、走りながら私は涙ぐみそうになっていた。

もうあとちょっと、っていうところで、その子がぽくんと高くとび上がった。

太陽が後ろにあつたからか、その子の姿は薄暗くて。

両手を横に広げていたから、何だか十字架みたいに見えた。

「どうしたの？」

声をかけてみる。

「いただきまゝす」

そんな声がしたと思ったら。

風を切るような音がして、何かが飛んできた。

「きゃっ……」

びつくりして思わず目をつぶって後ずさってしまふ。

何かが地面にぶつかるような音がした。

両腕を上げて目をかばっていた私のお腹に、何だか軽いものがぶつかる。

そうつと目を開けて見下ろしたら、目の前にその子がうずくまっていた。

その子のいる地面だけ他のところよりちょっとへこんでるみたい。

私にぶつかってきたのはちっちゃな土の塊だったみたいで、私のお気に入りの白いワンピースが少し汚れていた。

良くわからない。

その子をもう一度見る。

金色の髪が跳ね上がって、その子が私の方を向いたところだった。土に汚れた右手が見えた。

「外しちゃった」

赤い舌がちろりとのぞいて、唇をそつとなめた。

自分が品定めされてるみたいで、何だか嫌な気分だった。

それからちょっと遅れて、ふと私は思い出した。

ずっと、ずっとあの女の人怖くて。

あの人に見つからないように逃げなきゃってことだけを考えたけど。

あの人は何て言ったんだっけ。

「『みんなに殺し合ってもらいます』……」

そう言ってた気がする。

……。

この金色の髪の子は。

私を、殺そうとしてる？

「じつとしてね」

そう思った瞬間、にっこりと笑ったその子の笑顔がものすごく恐ろしく見えた。

逃げなきゃ。できるだけ遠くへ。

私は背を向けて逃げ出した。足が震える。

もっと早く気づいてたら逃げ切れちゃってたのかな、と、後になつて思ったのを覚えてる。

「あ」

あっけにとられたような声がした。

それからすぐに、低いつぶやきが聞こえた。

「『ナイトバード』」

羽根を必死で動かして飛びながら、首だけで振り向く。

その子の周りに光の弾がたくさん浮いていた。

彼女が腕を振るたびに、光の弾の一団が飛んでいく。

それは何だか群れなして夕焼け空を渡る鳥たちみたいで、きれいだなあなんて思ってしまった。
でも。

逃げなきゃ。

コントロールはあまりうまくないのか、最初の一団は見当違いのところにつかって、大きな音を立てただけだった。

二つ目の塊も私には当たらなかった。けど、さっきのよりは近づ

いてるような気がする。

「やだ!!」

叫んで、必死に羽根をはばたかせた。

何とかこちらからも攻撃したかったけど、私はあまり戦いが得意じゃなくて。

うまく光の弾を生み出せなくて、結局逃げるために飛び回るばかりだった。

振り切れるかな、なんて弱気なことを考えたのがいけなかったのかな。

それとも、光の弾がいろんなところにぶつかる大きな音をずっと聞かされて、集中力がきれてたのかな。

どっちでもいいけど、突然、群れからはぐれた鳥みたいに流れ弾が飛んできて。

「ひっ……」

自分でも情けない声だったと思う。

反応もできずに、私は羽根を打ち抜かれて、どてりと地面に落ちてしまった。

「やだ……」

必死で起き上がって走ろうとするけど、落ちたときにくじいてしまったのか、足がずきりと痛んで立ち上がれなかった。

後ろを見ると、あの子がもうすぐそばまで来ている。

なんて嬉しそうなんだろう。

それが、私は少しだけうらやましかった。

ああ、私、殺されちゃうのかな、なんて。

いつの間にか泣きながら考えてた。

腕が上がって、振り下ろされた。嬉しそうに。

最後まで目を閉じられなくて、私はそれを目で追っていた。

私が殺されるはずの時から、一瞬だけ前。

「『スピア・ザ・グングニル』」

声が聞こえたような気がした。

そのすぐ後、紅色の光が走ったかと思うと、私とその子の間を目にも留まらぬ速さで駆け抜けていった。

目の裏にだけ残ったその光は、白かったようで、紅かったようで、良く覚えてないけど。

目の前の子の金色の髪よりも、その子の鳥のような光の弾よりも、ずっとずっときれいだった。

少しだけ遅れて、山か何かが崩れたような音がした。

それが合図だったみたいに、その子の頬から血が一筋流れる。

「へ……？」

驚いてる。もちろん私も驚いてる。

ついつい私はその子から目を離して、光の飛んできた方を見た。

そっちには、私たちから二十歩ぐらい離れたところに小さなほら穴があつて。

そこには、腕を組んで入り口の岩にもたれてる人がいて。

「うるさいよ、お前たち」

光が当たってなかったから良く見えなかったけど、何だか怒ってるみたいだった。

「迷惑だわ。よそでやりなさい。ここでこれ以上続けるなら」

今度は、何だか笑ったみたいだった。

「次は当てるわよ」

笑ってるように見えるのに、さっきの怒ってた時よりも、ぞっとした。

「レ、ミ……」

声がしたから、目の前を見た。

あの子が固まっていた。

そうだ。逃げなきゃ。

そう思ったんだけど、何だかその子の様子がおかしい。

顔は青ざめて、唇は震えてる。

さっきまでの生き生きとした様子はどうしちゃったんだろう？

その子はもう私なんて見てなかった。

岩陰の人だけを見て、じりじりと後ずさる。

そして、ぱつと身をひるがえすと、一目散に逃げていった。

「……わあ」

助かった、のかな。

お礼を言いたいな。

「ふふん」

あの人は、さっきまで怒ってたのに、今は何だか嬉しそうでそのまま鼻歌を歌いながらほら穴の中に戻ってしまった。

「あ、あのっ！」

声をかけたけど、気づかなかったみたい。

いつの間に腰を抜かしたのか、私は地面に座り込んでいた。

誰にかはわからないけど、何だか恥ずかしくなって照れ隠しに笑い、私は立ち上がった。

「何か用？」

一歩踏み込んだとたん、ほら穴の中から声がした。

反射的に体が震える。

「あ、あの」

声をかける。

「さっきは、その、ありがとうございました。助けてもらって……」
返事はない。

「あの……」

「用があるなら、入ってきなさい」

言われるままに歩きだす。

ほら穴は思ったよりもずっと小さくて、カーブした先はすぐに行き止まりになっていた。

そして、左の隅にあの人が座っていた。

膝を抱えて、その膝に左の頬をくっつけてる。

横向きにこっちを見る顔はさっきまでとは違って、何だか、そう、ぼんやりしてるみたいだった。

「別にあなたのためじゃないわ」

私の姿を見るなり、私の顔を見てるような見てないような微妙なまなざしで、彼女は言った。

彼女が着てるドレスは新品じゃなさそうだけどぴかぴかで、誰かがていねいにお手入れしてるのがわかった。

青い髪は少し癖があつてふわふわしていて、きれいに整えられてた。

背中には、私の羽根とは違う深くて大きな翼があつて、ゆっくりと揺れていた。

「用はそれだけ？」

言つて、あふ、と口を開ける。

……あくび？

そっか。この人、眠いんだ。

なんだか急に身近になつたように感じて、私は嬉しくなつた。

「それだけなら……いいから……どっか行きなさい」

目を閉じてつぶやくようにそれだけ言つと、彼女は黙ってしまった。

何となく、ゆっくりと近づいて、彼女のそばにうつ伏せになる。

頬杖をついて、彼女の寝顔を見上げた。

ふっくらとしたほつぺた。

つんとした鼻。

優しく閉じられた目。

遠くから見たときは大きく見えただけ、こうして近くで見ると、私より少し大きいぐらいでしかなくて。

ちようど、そう、歳の近いおねえちゃんみたい。

「おねえちゃん」

思ったことをつい口にしてしまう。

そしたら。

「……」

ぐっすり眠つてると思つてたのに。

ぱつちりと目を開けて、文字通り彼女は飛び上がった。

さつきまでとまるで違う鋭い動きで辺りを見回して、その目が私を見た。

「……あなた」

見たとたん、すぐくがっかりしたみたいで、彼女はため息をついた。

何だか悪いこと、しちゃったかな。

その人は、とっても可愛くて、最初はちょっと怖くて、でもすごくかつこよくて。

ひとりぼっちの私にもしおねえちゃんができるならこんな人がいいな、と思うような人で。

ぱつちりと開いた紅い目は吸い込まれそうに澄んでいて。

一緒にいると、何だか狭いほら穴の中じゃなくて、大きなお屋敷の広いお庭を散歩してるみたいな気分になる。

これが、私、リリーホワイトと、レミリア・スカーレットが会ったときの、お話。

【ルーミア 現在地：B - 4】（次登場話：24・

紅と白／銀と金）

【レミリア・スカーレット 現在地：B - 4】（次登場話：24・

紅と白／銀と金）

【リリーホワイト 現在地：B - 4】（次登場話：24・

紅と白／銀と金）

15・不死鳥（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

15・不死鳥

ふと目を覚まし、もたれたベッドから体を起こそうとして、藤原妹紅はずきりとした痛みにうめいた。

痛みは苦い思い出と一緒にあって、妹紅をさいなむ。

あの時。

妹紅は何もできなかった。

目の前で人が一人殺されたというのに。

とっさに飛び掛かったが、あの少女、四季映姫には触れることさえできず弾き飛ばされてしまった。

じくりと胸が痛む。

どうやら、その時に肋骨を何本か痛めてしまったらしい。

ひび程度で済んでいるのか、折れているのかは分からない。

今まではすぐに治っていたから、長いことそんなことを気にしたことさえなかった。

妹紅は、八意永琳と同じ蓬莱人である。

本来、蓬莱人は決して死ぬことが無い。大怪我を負ったとしても、瞬く間に回復する。

それが今はどうしたことが、痛みがひく気配さえない。

悪くてもたかだか数本の骨折が、こんなに辛いものだったのか。

百年か、二百年か、それよりもずっと前だったか。もう思い出せないほどの昔。

妹紅は、普通の人間として生きていた。

普通の人間と普通の人間の間に生まれ、普通に愛されて育った。普通に誰かと恋をして、普通に生きていくはずだった。

それを変えたのは、ある運命的な出会い。

月の姫、蓬萊山輝夜との出会い。

最悪の出会い。

最愛の父が侮辱されるきっかけになった彼女への恨み。

子ども心にも許せなくて、仕返しの方法を考えて眠れなかった夜。そして、自分が蓬萊人になった、あの山での出来事。

逃げるように人間社会から離れていつしか迷い込んだ幻想郷での、輝夜との思いもしない再会。

輝夜も蓬萊人であると知ったのは、その時だった。

それ以来、二人は日常的に殺し合いをするようになった。

どちらも死なない。殺し合いをすることで、それを確認できる。

——昔の話だ。

自嘲するような笑みを浮かべて、妹紅は立ち上がった。

「……つつ」

動きたびうずく胸が、妹紅に生きていることを実感させてくれる。扉を開けて、妹紅は廊下に出た。

大きな屋敷。

かつては立派だっただろうと思わせるのだが、今は荒れ果てている。

煉瓦造りの壁に埋め込まれた燭台は錆びびついているし、足元のじゅうたんは薄汚れていて、毛も抜け落ちてしまっている。

部屋から出て廊下を右に歩くと、吹き抜けのホールにたどり着く。見上げると、ほこりの積もったシャンデリアが寂しげに吊り下がっていた。

見下ろすと。

「な……」

どくり、と妹紅のこめかみが脈打つ。

めまいがした。

何も考えず、ただ必死で階段を駆け下り、そこに向かう。

そこには。

血だまりがあつて。

一人の少女が倒れていた。

息を切らせた妹紅の胸が痛む。

「おい！ 大丈夫か！」

痛みに構いもせず、妹紅は大声を出した。

誰がやったのか、というのは、完全に妹紅の頭から抜けていた。

ただひたすら、目の前の少女を助けなければ、という思いしかなかった。

「しっかり！ ……っ！」

手をかけて少女を抱えた妹紅の手が止まる。

抱き起こした少女の首はだらりと力なく仰向いて。

もう生きていないことが、明らかだった。

「……」

妹紅の手が震える。

ぎ、と歯を食いしばった妹紅の胸に、突き刺すような痛みが走った。

「……許せない」

絞りだすような妹紅の声が、広いホールに響いた。

さくさくと穴を掘る。

ざくざくと彼女は掘り続ける。

掘るたび、彼女の胸に痛みが走る。

それを押さえつけるように、彼女は一層強く、手にしたスコップを握る。

ゆつくりと移ろう太陽の下で、彼女が土を掘る音だけが風に乗って流れていく。

屋敷の外で、妹紅は額に流れた汗を拭った。

「……安らかに、眠ってくれ」

汚れた手をそつと合わせて、妹紅はつぶやく。

目の前には土がこんもりと盛り上がっていて、その上に血で紅く染まった帽子が置かれていた。

どこから持ち出したのか、傍らには大きなスコップが落ちている。胸の痛みは、いつの間にか感じなくなっていた。

そつと立ち上がると、きゅつと妹紅はこぶしを握った。

その顔は静かに怒っていて、食いしばった口元はまっすぐに引き結ばれていた。

少しの間だけ別れを惜しむように土の盛り上がりを見つめた後、ぶかぶかのニッカーボツカーに手をつ込んで妹紅は歩き出した。

館の前に広がる森に姿を消した妹紅。

夕暮れ前の風は徐々に冷たさを増していて、黒い森をざわざわと吹き抜けていった。

【藤原 妹紅】

現在地：A - 6

前登場話：I

次登場話：《27・紅の夜（1）》

16・信じるということ（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

16・信じるということ

「それにしても、あなたは どうして 私たちを あっさり 信じて くれるんだ？」

歩きながら、慧音は隣を歩く紫に問いかける。

「あら、それを言うならあなたや穰子だってそうだと思うけれど」

「……まあ、確かに」

あっさりと認める慧音に苦笑しながら、紫は答える。

「あなたたちがこの馬鹿げた殺し合いに乗っているとは思えなかったからね」

「そう言ってもらえると助かるな」

「そもそも、このゲーム、自分から殺して回ることにメリットは少ない。強さ比べじゃないんだから、最後の一人になれば良い。

殺すにしても、できるだけ油断しているところを襲って殺していかないと、自分の身がもたないでしょう？」

「それはそうだが……。けど、誰もがそう考えているとは限らないだろう。それに、あなたぐらい強力な妖怪になれば、狙われることも多いはずだ。

……あの子があんなことになってたってことは、少なくとも一人はこの殺し合いに乗ってる奴がいるということだろうし」

「まあ、ね。けど私としては、こうして会えて良かったわ」

「あの……」

それまで黙っていた穰子が、口を挟む。

「なあに？」

「あの広間でしゃべっていた、あの人……あの人は、いったい誰なんでしょう？」

「ああ」

苦い顔になって、紫は言った。

「あれは、四季映姫よ」

慧音が息を呑む音がした。

「あれが……」

「そう、幻想郷の閻魔。簡単に言えば、良く姿を見せる者の中では幻想郷で一番偉い人よ」

「話は聞いたことがある。しかし、妙だな。私の聞いた話では、彼女はかなり生真面目な性格だが、幻想郷とその住人のことはとても大切に思っているはずだが……」

「的確な評価ね。私の知っている映姫もそうだったわ」

「ど、どうしてその閻魔様が、こんなことを始めてしまったんでしよう?」

「分からないわね。本人に直接聞いてみないことには」

その言葉に、やれやれ、と慧音は首を振った。

「それで、紫さん。あなたはこれからどうするんだ?」

「そうねえ。慧音と穰子は?」

「私は、友人を探そうと思う」

「ああ、あの時の蓬莱人ね?」

皆が集められたあの場所で、ただ一人四季映姫に戦いを挑んだ少女を思い出して、紫は言った。

「藤原妹紅。確かに、彼女はこんな殺し合いに乗るような人間じゃなさそうね」

「ああ。なんとか合流して、協力したい」

「穰子は?」

「私は……」

言葉を促された穰子の顔が、悲しげに沈んだ。

「どうしたら、いいんでしょう」

慧音と紫は顔を見合わせた。

「知り合いはいないのか？」

「姉がいるんですけど、あの場所にはいなかったみたいです……。知り合いの神様はいましたけど、そんなに親しいわけじゃありませんし……」

「そう。なら、私があなたにこれからやることを教えてあげるわ」

紫が片目をつぶる。怪訝な顔で紫を見る穰子と慧音。

「あなたは、何があっても慧音を守りなさい。私がいる間は私があなたたちを守るけど、いつ離れ離れになるかわからないから」

「紫さん。お言葉を返すようだが、普通は私が穰子を守るんじゃないのか？」

苦笑しながら慧音は頬をかいいた。

「いいのよ。穰子、いいわね。分かったらもつとしゃんとしなさい。でなきゃ、いろんな人から崇められる立派な神様になんてなれないわよ」

「は、はい。でも私、そんなに大した力も持っていないし……」

「そんなことは問題じゃないの。大切なのは思い。あなたが思いを持ってくれるなら、それはそれだけで力になるわ。……ありがとう、穰子」

ほんと穠子の帽子に手を乗せて、紫はにっこりと笑った。それはとても優しく、信頼に満ちた笑顔で。

「姉さん……」

穠子は、ここにはいない大好きな姉と一緒にいるような、落ち着いた気分になった。

「……はい」

「よし」

「ごしごしと穠子の頭を撫でると、紫は目を細めた。

「じゃあ、慧音、穠子。あなたたちは先に行きなさい」

低い声。

「ん？」

突然変わった紫の口調に、慧音はいぶかしげに眉を寄せた。

「敵が近くにいますわ。おそらく狙いは私でしょうね」

「敵って……さっきの子を、その、殺した奴か？」

穠子の方を気遣うように眺めて、慧音はささやいた。

「わからない。けど、かなり手強いわね。一人ならともかく、あな

たたちを守りながら戦う自信はないわ。

先に行つて。私は逃げる時間を稼いで、後から追いかける」

「しかし、一人じゃ」

「私を誰だと思つて？」

「……」

黙り込んでしまつた慧音に、紫は穏やかに話しかける。

「慧音。あなたにもお願いがあるの」

「何だろう？」

「あなたのお友だちを探すのと合わせて、探して欲しい子が二人いるのよ」

「それは、いつたい？」

「一人は、霊夢——博麗の巫女よ。私と一緒にあなたと戦つた紅白の巫女」

「ああ、知っている」

今ではもうずいぶん懐かしく思える。今はこんなに頼りにしているのに、かつて慧音は紫と敵対していたことがあつたのだ。

その時に紫と一緒に慧音の目の前に現れたのが、博麗の巫女、霊夢だつた。

「あの子なら、この異変の解決のために、あなたたちの力になってくれるはず」

「もう一人は？」

「もう一人は——」

いったん言葉を切って、紫は息を吸い込んだ。

「——紅い悪魔」

ぴくり、と慧音の顔が強張った。

「紅い悪魔……吸血鬼、レミリア・スカーレットのことか？」

「そのとおりよ」

聞いて、慧音は即答する。

「それはあなたの頼みでも難しいな。吸血鬼の恐ろしさは良く知ってる。危険すぎる」

「お願い」

静かな、有無を言わせない迫力のある声だった。

「霊夢に会えたら、伝えておいて。二人は絶対に守らなくてはいけない、と」

慧音はしばらく紫の顔をじっと見つめた。まっすぐに慧音を見返

してくるその顔からは、紫の考えは読み取れない。
ほう、と慧音はため息をついた。

「分かりましたよ」

「ありがとう」

にこりと笑うその姿は、母のように優しげだった。

「さ、もう行きなさい。……穰子、よろしくね」

突然声をかけられて、穰子はびくりと飛び上がる。

「は、はい！ 早く追いついてくださいね」

「慧音、穰子。二人とも、気をつけて」

「ああ。紫さんも、無事で」

「絶対に、また会いましょうね」

二人の言葉にくるりと背を向けて、紫はそつと歩き始めた。

しばらくして、二人分の足音が、徐々に遠ざかっていく落ち葉の音が、耳に入って、消えた。

それ以外には、紫自身の足音と、風が森をなでる音しか聞こえてこなかった。

「待たせたわね」

立ち止まって、八雲紫は声を上げた。

）
）
）
）
）

【八雲 紫】

現在地：B - 5

前登場話：《10・母》

次登場話：《20・三ツ八の戦い》

【上白沢 慧音】

現在地：B - 5

前登場話：《10・母》

次登場話：《32・遺志を継ぐもの》

【秋 穰子】

現在地：B - 5

前登場話：《10・母》

次登場話：《32・遺志を継ぐもの》

17・一人、二人（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

17・一人、二人

私は、体の後ろで手を組んで空を見わたした。

満月に少しだけ足りない月が、ゆつくりと夕暮れに向かう空に顔を
を出し始めている。

私の故郷。

視線の先で浮かんでいるそれは、自分でも不思議に思うほど何の
感慨ももたらさなかった。

懐かしくもなければ、恐ろしくもない。

月に対する特別な感情を、今の私は持っていない。

自分に関わらないでいてくれさえすればそれでいいと、そう、私
は思っている。

「妹紅、大丈夫かな……」

ため息をつく。

あの時、みんなが集められたあの場所で、妹紅が弾き飛ばされた
のを私は見ていた。

鈍い音がしていたのに反応できなかった自分が悔しい。

多分、怪我をしたと思う。

あの少女——確か名前は四季映姫——が言っていたことが本当だ
とすれば、その怪我は治っていないんだろう。

妹紅のことだから大丈夫だとは思っけれど、少し心配だ。

藤原妹紅。

喧嘩友達、というか、はっきり言ってしまえば敵。

出会ったたびに喧嘩をしている私たちは、多分端から見ればとても
仲が悪い。

実際、妹紅は私のことを恨んでいるし、喧嘩の時はお互いに手加

減などしない。

でも、私たちは知っている。

すべてが移ろい続ける中で、老いることも死ぬこともできない私たち蓬萊人。

それがどれだけ心細いことか。

蓬萊人でない普通の人間や妖怪に交じって生活することが、どれだけ悲しいことか。

それは、実際に蓬萊人になった者にしか分からない。

だから、妹紅は人里を離れて幻想郷に逃げ込んだのだと思う。

そして、同じ蓬萊人になってしまった私と妹紅だからこそ、幻想郷で再会できたのだろう。

私は永琳と同じくらい、妹紅のことが好きだった。

出会いは最悪だったし、会うたびに殺し合いをしてはいるけれど、それはお互いが変わらず存在し続けていることを確かめるための行為で、私たちには必要なことなんだと思う。

私には永琳がそばにいるけれど、妹紅はそういう意味で一人だけら。

そこまで考えて、私は思い出した。

永琳。

永琳は、無事だろうか。

けれど、すぐに思い直す。

永琳は私なんかよりずっと強い力を持っている。

普段はそんな素振りを見せないけれど、多分幻想郷でも指折りの強さなんじゃないだろうか。

永琳が誰かにやられるところなんて想像できない。

いろいろなことを考えながら草原を横切って歩いていくと、向こ

うから見慣れない二人連れが歩いてきた。

片方は緑色の髪、青い服、背中に生えた透き通った羽根。

もう片方は、緑色の帽子、青い髪、青い服。

仲良さそうに何かをしゃべっている。

私は警戒しながらも二人に近づいた。二人も私に気づく。

「こんにちは」

何て言っているのか分からなかったので、とりあえず私はその声をかけた。

「あ……」

羽根の生えた方が、怯えた様にもう片方の陰に隠れる。

もう片方が羽根の生えた方をかばうように一歩前に出た。

「こんにちは」

私は、もう一度声をかけた。

「こ、こんにちは」

隠れたまま、羽根の生えた方が上ずった声で返事をした。

臆病なくせに、几帳面ではあるらしい。

その様子がかわいらしくて、私は思わず笑ってしまった。はしたなくならないよう、着物の袖で口元を隠す。

「私は、蓬萊山輝夜。そんなに警戒しないで。戦うつもりはないから。第一、一対二なんだから、警戒するしたら私の方でしょう？」

くすくす笑う。

顔を見合わせる二人。

その様子は見ていてとても仲むつまじく、お互いに信頼し合っているのがひしひしと伝わってきて、私はうらやましくなってしまうた。

……そして、無性に悲しくなった。

「えっと……何て呼べばいいかな？」

そんな気持ちを振り払うように、私は努めて明るく話しかけた。

「あたしは、河城にとり。こっちは、大妖精の大ちゃん」

緑色の帽子の方が、まだ少し警戒しながら言った。

「にとりちゃん。この人は大丈夫だよ、きっと」

おずおずと、その大ちゃんが顔を出す。

隠れたことを申し訳ないと思っているのか、それとも単なる恥ずかしがり屋なのか、顔が真っ赤になっていた。

「あの、ごめんなさい。いきなり隠れたりして」

前者だったらしい。申し訳なさそうに頭を下げる彼女の背中で、薄い薄い羽根がぴんと伸びていた。

なぜだか、セミのようだと思った。

「ふうん？ まあ、私もそう思うけど」

ワンテンポ遅れて、緑色の帽子のにとりが答えた。そのままぱりぱりと頬をかいて、彼女まで申し訳なさそうな表情になる。

「ごめん、輝夜さん。あたしたち、あんまり強くないからさ。どうしても警戒してしまうんだ。こんな状況だからさ。……それに、あなたは強そうだし」

すまなそうに、にとりは言った。

ずいぶんと気のいい二人組だと思う。自分たちより強い得体の知れない人間に話しかけられて、まともに相手をしてくれているだけでも大したものだ。

「気にしないで。それにしても、二人はずいぶん仲がいいのね」

私は言ってみた。

「うーん、そうかなあ。確かに出会ったのがたった数時間前って考えると、いいかもね。仲」

そう答えた緑色のにとりの言葉に、ついつい口を出してしまう。

「……時間は、問題じゃないと思うわ」

ぽかんとする二人。

短い間でも一緒に過ごしていると似てくるのだろうか。それとももともと似たもの同士の二人なのか。

その様子があんまりそっくりでおかしかったので、私はまた笑ってしまった。

でも、それからの反応は違っていて、にとりはうん？ と首をか

しげ、対照的に大ちゃんはうん、とうなずいた。

それを見てしまったからか、私は言うつもりのなかったことまで口にしてしまう。

「時間は問題じゃない。仲良くなるのは、相手が自分と似ているからか、相手が自分と違っていているからか。

どちらにしろ、お互いにとってお互いが必要だから。……あなたたちは、お互いいい人に巡り会ったのね」

自分でも何を言っているのだろうと思いつながら、私はぺらぺらとしゃべってしまった。

そんな自分が嫌になる。

けれど、そんな私の言葉に、なぜか大ちゃんはうなずいてくれた。

「そう、ですね。私とチルノちゃんも……」

何かつぶやいている。

「あたしはそういう文学的なことは苦手なんだよね」

頭をかきながらにとりは笑った。

「ま、でも大ちゃんのこととは好きだよ。チルノちゃん、早く見つかるといいな」

恥ずかしいことをはつきり言うにとりの笑顔は私にはまぶしかったけれど……。

いけない。大切なことを忘れるところだった。

「あなたたち、ここに来るまでの間、誰かに会わなかった？」

もともと、それを聞くことが目的でこの二人に話しかけたのだった。

できれば永琳か妹紅。

あるいは鈴仙かてゐ。慧音でもかまわない。

誰か、知り合いの情報が欲しかった。

だが、二人は顔を見合わせ、揃って首を振った。

「そう、ありがとう」

あまり期待はしていなかったはずだけど、よほどがっかりした顔をしていたのだろうか。

あわてた様子で、大ちゃんが声をかけてくる。

「あの、良かったら私たちと一緒に行きませんか？」

顔を真っ赤にしてまくし立てる。

隣でにとりもつなずいていた。

それはすごく魅力的な提案で、私の心は揺れ動いたけど。誰かと一緒に行動したいという思いは強かったけど。

でも、私はできる限り素敵な笑顔をつくって答えた。

「ううん。三人は、きっと二人と一人になるから。」

だから、私も探すことにするわ。あなたたちにとってのお互いみたいな、私の友だちを」

そして、手を振る。

「それと、私も今まで誰にも会ってない。『チルノ』ちゃん？ は、こっちは——少なくとも近くには——いないと思うわ」

自分の来た方向を指差す。私の歩いてきた道のりは一面の緑色で、どこをどう通ってここに来たのか、もうわからなくなっていた。未練に囚われる前に、私は踵を返して歩き始めた。

「あ……ありがとう。無事で、な、輝夜さん」

にとりの声が聞こえてくる。

「気をつけてくださいね」

心配そうな大ちゃんの声が追いかけてくる。

足を止めて振り返り、自分にできる一番魅力的な笑顔をつくって、私はもう一度、大きく手を振った。

目の前だけを見つめて歩き続けて、どれぐらい経っただろう。多分、あの二人ともう一度会えと言われても難しいくらい。

私は体の後ろで手を組んで、空を見上げた。

視線の先にあったのは、先ほどと変わらない、満月に少しだけ足りない月。

……仲のいい二人を見ていると、私はなんだか悲しくなってしまう。った。

もしも違う出会い方をしていたら、私と妹紅も、あんな風に笑いあうことができていたのだろうか。

私と永琳も、あんな風に仲良く肩を並べあえていたのだろうか。そっと胸に手を当てる。

とくりと微かに手を押し上げる、規則的な音。
なくしたはずのもの。

一瞬だけ目を閉じて涙を飲み込むと、顔を上げて私は歩き始めた。

）
）
）
）
）

【大妖精 現在地】

現在地：E - 5

前登場話：《6・同行二人》

次登場話：《29・星空》

【河城 にとり】

現在地：E - 5

前登場話：《6・同行二人》

次登場話：《29・星空》

【蓬莱山 輝夜】

現在地：E - 5

前登場話：―

次登場話：《》

18・なくしもの（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

18・なくしもの

わたしとてゐはいつしよに旅をしていた。

出会ってから今まで、てゐはいろんなことをしゃべっていた。

何を言っているのかはよくわからなかったけど、わたしのとなりにだれかがいて、何かを話してくれるのはすごくうれしかった。

うれしくて、ずっとずっと前のことを思い出した。

大きなベッドで二人、かたをよせてねころんだ。

その日もわたしはねむれなくて、だれかがしょうがないわねえってあきたように笑って、お話をしてくれた。

ふとんを口元まで引き上げてあおむけにねたわたしのおなかのあたりを、少しだけ大きな手でゆっくりゆっくりとリズムをつけてなでくれた。

なでながら、いつのまにかお話はお歌にかわっていた。

そうして、わたしはいつのまにかねむっていた。

ずっと昔の話。

そんな昔のことを思い出すぐらい、わたしはうれしかった。

ずっと行こう。

どこまでも行こう。

いつしよに。

そんな時、わたしたちは一ぴきのほたるに出会った。

緑色のかみをした、男の子みたいになかったようにしたほたる。光っていてとってもきれいだった。

わたしはすごくうれしかった。

また、友だちができる。

わたしと仲よくしてくれる、大好きな友だち。
うれしくて、うれしくて。

わたしはてゐをおいて走りだしていた。

まっすぐに新しい友だちのところに向かった。

本当に、すごくうれしかったから。

けど、ほたるはおびえたように後ろを向くと、いちもくさんにに
げていく。

待つて。

待つて。

わからない。

きらい。きらわれ、て？

わたしはよびかけた。

どうしてにげるの。

その声にほたるはふり向いてくれて、わたしはうれしかったけど。
そんなわたしにほたるは言った。

「……………！！！！」

何て、言われたんだろう。

よくわからない。

かまわない。

待つて待つてとよび続けると、ほたるはさらにこわがって、手か
ら光を出してわたしに向かって投げつけた。

それがわたしのうでをかすめて、とんでいく。

ほたるがもう一度さけんだ。

「来るな！悪魔！！」

……なぜだろう。すごく悲しくて。

うでがいたんだ。

それでもわたしは手をほたるにのばした。

ますますおこったように、ほたるは光を作って投げつける。

それはわたしには当たらなかったけど、後ろからひめいが聞こえた。

ふり向いたわたしの目に、うでをおさえてうずくまっているてゐが映った。

うずくまっているてゐはすごくいたそうで。

その目に映った目はすごく悲しそうで。

それを見たたん、どくり、と、むねで音がした。

いやだ。

いたそう。

だれかと話をするのが楽しかったから。

だれかと話ができるのがうれしかったから。

失うのは、いや。

とても、いたそうな、てゐ。

わたしはだれにも助けてもらえなかったけど。

ぞくりとした。

どうして？

どうして、一人だったの？

わたしといっしょにいてくれたのは――。

守らなきゃ。

やっと出会えた。

てゐは、わたしのことをわかつてくれた子なんだから。
そう思ったとたん、体が軽くなった。

だれかのために何かをするって、とってもすてき。
お姉さまはこんなわたしをみて、ほめてくれるかな。

お姉さま？

ああ、だめか。

おねえさまは、わたしのことがきらいなんだもの。

まだだ。

おねえさま？

それって、だれ。

ほんの一とびで、わたしはほたるのところにたどりついた。
ひきつったかお。

何かさけんでいる。

でも、いい。わたしはきらわれても。

そして。

そして。

少しだけむねがじくりといたんで。

それをふりきるようにいきおいをつけて。

わたしはうでをふりおろした。

あかい。あたたかい。

それでおわり。

わたしをみるほたるの目が、にげようとしたほたるの足が、さけ

ぼつとしたほたるの口が。

さつきまでうごいていたのに。

あつというまにとまって。

あつというまにわたしからはなれていつて。

こんなにかんたんなこと。

どうしてだか、わからないけど。

わたしはわらって、わらって、ないて、けどなみだはでなくて、
わらって。

わらいがおさまったときには、でなかったなみだもとまっていて。
わたしの中から、なにかがきえていて。

わたしのとなりには、てゐがいて、なにかしゃべっていた。

れみりあとはちがう。まもってくれてありがとう。

ああ。

おもいだした。

おねえさま。

れみりあおねえさま。

かわいそうなおねえさま。わたしのことをずっときらっていたお
ねえさま。

やさしくおはなしをしておうたをうたってくれたわたしのたいせ
つなひとをうばったおねえさま。

だいすき。

かわいそうなわたし。なにもしらずおねえさまのことをしんじて
ずっとひとりうすぐらいなかでひざをかかえててんじょうをみあげ
てねむっておきてまたひとりわたし。

わたしとおねえさまと。

ずっといつしよにいた。

ずっといつしよにいた？

ずっとだいすきだった？

ずっとだいすきだった。

でも。
だから。
にくい。

【リグル・ナイトバグ】死亡

【フランドール・スカーレット】

現在地：D - 1

前登場話：《8・彼女の、幸運》

次登場話：《30・ハート・ハート》

【因幡 てゐ】

現在地：D - 1

前登場話：《8・彼女の、幸運》

次登場話：《30・ハート・ハート》

【残り 32人】

19・猫と蛙と（前書き）

この小説は、『上海アリス幻楽団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻楽団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

19・猫と蛙と

「まったく、乱暴するなあ」

川沿いをけるけろと歩きながら、土着神の頂点、洩矢諏訪子は憤慨しました。

怒っているのはもちろん皆が集められたあの場所でのこと。遊びでならともかく、本気で誰かを傷つけたり殺したりなんていうのは、諏訪子は嫌いなのです。

「……でも」

と、目深にかぶった深い編み笠のような帽子のつばを握って、諏訪子は土手をぴょんぴょんと駆け上がります。

服に描かれた蛙の絵柄と帽子についた大きな二つの目玉が、諏訪子が跳ねるのに合わせてくらくら揺れました。

「すごい世界！」

両手を広げて風を浴びながら、くると半回転して背中から地面に倒れこみます。

「こんな世界もあるんだね」

諏訪子は、「坤を創造する程度の能力」を持っています。言ってしまうえば大地を作り出す力。

いつかはこれぐらいでつかい世界を創造してみたいなあと、諏訪子は大事な家族の神奈子と早苗を思いながら考えました。

「風は気持ちいいし、せせらぎは落ち着くし、祟り神のみんなもこれらもう虫干しだね」

そう言っ て懐に入れた手が、ふと止まります。

帽子の影ではちくりと目が瞬きました。

「そういえばこの世界、神様がいないよね」

いつだっ てどこから顔を出している神様が、一人も見当たりません。

ありとあらゆるものに宿っているはずの神様が、一人も出てきません。

隠れているのではなく、いませんでした。

「うーん」

温かい大地に触れた手を胸の前で組んで、諏訪子は難しい顔になりました。

……

「ま、いいかつ」

ぱっちりと目を開けて元気良くつぶやくと同時に、諏訪子は両足で反動をつけてぴょんつと跳ね起きました。

それと同時に、帽子についた大きな二つの目玉がぎょろんと諏訪子の後ろを向きます。

「にやつ!?!」

驚いたような声がしました。鳴き声といった方が近いでしょうか。

「うん？」

帽子の目玉を追っかけて後ろを振り向き、諏訪子はそこにいたものを見つけました。

「おおっと」

大げさに驚いた声を出して、諏訪子はきょとりと目を見開きます。

そこにいたのは赤いワンピースを着て緑色の帽子をかぶった少女で、ワンピースの下から二股に分かれた尻尾がピンと覗いていました。

猫を思わせる少女は、全身の毛を逆立てて、といった様子で、諏訪子の帽子をにらんでいました。

「これは可愛い猫ちゃん」

「猫ちゃんって言うな！ 私は藍さまの式神だよ！ 橙っていつかつこいい名前があるもん！」

橙は怒ったように答えました。ふうつと唸り、強がっていますが、体はぶるぶると震えています。

「なあに？ ひょっとしてこれが怖かった？」

いたずらっぽく笑って、諏訪子はいっと帽子のつばを持ち上げました。

橙は顔を真っ赤にし、あわてたようにぐんぐんと首を振りました。

「違う！ 私は藍さまの式神なんだから、そんなの怖くないもん！
ただ、ただちよつとびっくりしただけでっ！」

息を荒らげながら、橙はまくしたてます。

諏訪子はほんわか笑いしました。

「あ。あなたってひょつとして八雲さんちの飼い猫さん？」

「違うよ！ そうだけど！ そうだけどっ！」

尻尾が逆立ちます。

「ばっ……バカにして！」

怒った橙は、体を低くして、一足に諏訪子に飛びかかりました。

「あらら」

驚いたように一瞬固まった諏訪子でしたが、ぴよいと服の裾をはためかせて避けます。

「この！ この！」

尖った爪を右手左手と振り回す橙を、諏訪子はひらりひらりとかわしました。

「ケンカはやめようよ」

ぼんぽんと橙から距離をとって、諏訪子は両手を上げます。

「ごめん、言い過ぎた。あんまり怒らないで？こんなところで戦ったら目立つよ」

「うるさいっ」

なだめる諏訪子でしたが、頭に血が上った橙には届きません。

橙はぴっとお札を取り出すと、凜とした声を張り上げます。

「『飛翔韋駄天』」

そしてぐつと踏み込んだ足がどんと地面を蹴立てて、橙はあつという間に諏訪子に迫りました。

「わ」

諏訪子はぽかんと口を開けて、橙が目の前に来るのを見つめていました。

「やあっ！」

そのまま真っ直ぐ諏訪子に突進すると見せかけて、橙は踏み込みを少しだけ回転をかけて瞬く間に諏訪子の後ろに回りました。生け捕りにしようと羽交い絞めにします。

が。

抱きつくように振り回した手は空を切って、目の前の諏訪子の体をすり抜けてしまいました。

「え？」

「ダメだよ、手加減しちゃ。スピードが落ちちゃうよ？」

目の前の諏訪子とは違うところから、諏訪子の声がしました。

声のする方をぱつと見ると、少し先の川べりにもう一人諏訪子が立っていました。こちらに背を向けていて、顔は見えません。

「え？ ええ？」

何が何やらわからず、近くの諏訪子と遠くの諏訪子を見比べる澄。そんな澄を尻目に、目の前の諏訪子はけるけると歩いてどこかに行ってしまう。

ぐちゃぐちゃに混乱した頭で、澄は、どことなく赤く光って見える諏訪子を見送っていました。

「分身の術、って感じかな」

川べりの諏訪子が振り向いて、にっこりと笑いました。

「今度はこっちからだよ」

言った途端、流れる川の水面がぼこりと音を立てて盛り上がりました。

「あ……」

見ていた橙の顔が青ざめました。

川の一部分だけがまるで嵐で増水したようになり、そこから大きな水柱が上がります。

「式神は水に弱いつて聞いたことがあるから」

大きな水柱は、まるで生きているかのように途中でいくつもの細い流れに分かれ、うねり、きらきらとしたしぶきをまき散らしました。

「や、やだ……」

橙はじりじりと後ずさります。さっきまでの威勢はどこへやら、すっかり及び腰になっています。

「風雨に負けないでね」

諏訪子がそう言うと、何本もの水柱が、一斉に橙に向かって飛び掛かりました。

「ひっ……!!」

喉から音を漏らし、思わずぎゅっと目をつぶってしまう橙。

……

何秒たったでしょうか。

なぜか何ともないようなので、橙は恐る恐る目を開けました。すると目の前に水柱はなく、代わりに諏訪子がいてほわほわと手

を振っていました。

もう一つ視線を感じて顔を上げると、諏訪子のかぶった帽子についた二つの大きな目玉が、ぎょろりと橙を見下ろしていました。

「……!!」

あわ、あわと口を動かす橙。

そんな橙に、諏訪子はぱちりと片目を閉じます。

「ケンカはおしまい。仲良くしましょ」

しびれたように目玉を見つめていた橙は、そんな諏訪子の言葉にようやく我に返ると、恥ずかしそうにぷつと頬を膨らませ、諏訪子に背を向けました。

「もういいっ！　じゃあね！」

あれれ、と諏訪子は首をかしげました。

「行っちゃうの？　一人で？」

「そう！　私だって藍さまの式神なんだから。一人でだって大丈夫！」

「うゝ。危険だよ」

顔をしかめる諏訪子。

「第一、どこに藍さまがいるのかもわからないんでしょ？」

ぴたり、と橙の足が止まります。

「そうだけど。……蛙に負けてバカにされたなんて、藍さまには絶対言えないよ……」

後姿だけでも目に見えてしゅんとしてしまった橙に、諏訪子は優しく苦笑します。

めまぐるしく変わる橙の様子はとてもかわいらしくて、諏訪子は思わず早苗の小さい頃を思い出してしまうのでした。

「ふうん。ならいいよ。私に追いつけたらあなたの勝ちにしたげる。鬼ごっこ、というか、蛙狩り？」

「え……？」

橙が首をかしげました。

くるくる変わる表情は猫の目のようで、諏訪子は笑いながら身を翻しました。

「ほらほら、急いで急いで。こっちだよ」

「……ま、待てっ！」

諏訪子を追って、橙は条件反射のように走り出しました。

橙は気づいていませんでした。

橙が行こうとしていた方向は、身を隠す場所も無いただ広い草原だったことに。

そして、諏訪子が走り出した方向は、起伏があり、障害物もあつ

て、人の目から逃れやすい場所だったことに。

ころころと笑って、諏訪子は帽子を押さえながら、楽しそうに逃げて行きました。

その後を、橙が尻尾を揺らしながら追いかけていきました。

）
）
）
）
）

【橙】

現在地：D - 4

前登場話：I

次登場話：《26・神の守るもの、式神の守るもの》

【洩矢 諏訪子】

現在地：D - 4

前登場話：I

次登場話：《26・神の守るもの、式神の守るもの》

20・三ツハの戦い（前書き）

この小説は、『上海アリス幻楽団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻楽団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

20・三ツ八の戦い

「いつまで隠れてるつもり？」

足を止めて、八雲紫は声を上げた。

「出てきなさい」

ざわざわと木々の揺らめきだけがしばらく続く。

その木々の一本、紫の見つめるひとときわ太い幹の陰から、一人が姿を現した。

「さすがは八雲紫だ。良く気づいたね」

紫に向かって歩みを止めながらそう言ったのは、少し前に同じ森で騒霊のリリカを殺した者。

紫はうなずいて、なお油断無く別の方向を見つめてから目を戻す。

……しばらく前から紫を見つめていた気配は、二つあったから。

「八坂神奈子、ね。山の神様がこんなところで何をしているの？」

「あんたに用があつてね」

悠然と腕を組んで答える神奈子に、ちょうど良かったと紫がつぶやく。

「私もあなたに聞きたいことがあつたのよ」

「答えてやるよ」

「あの騷霊を殺したのは、あなた？」

「ああ、そうだ」

「そう」

返事を聞いても紫は目を細めただけで、そのことについてはそれ以上触れなかった。

「それで、あなたの用は何？」

冷たい目のまま、淡々と続ける。紫と神奈子の距離は、数歩ほどに縮まっていた。

にやりと唇の端を上げて腕を解くと、神奈子は無造作にその距離を詰めた。

「あんだと、戦いたいのだ」

そしてそのまま腕を振るう。

斜め下からしなるように繰り出された右腕を、紫はついと上体を反らし、同時に一步後ろに下がって避けた。

うなりを上げて目の前を通り過ぎる腕に瞬き一つせず、紫は質問を重ねる。

「私と？ どうして？」

にいい、と神奈子は嬉しそうに笑った。

「あつさり避けてくれるね、まったく。それが理由さ」

「私なんて、境界を操る能力が使えない今、ただ長く生きてきただけの妖怪に過ぎないけれど」

「能力が使えなくても、八雲紫は八雲紫。幻想郷最強と名高いあなたを倒せれば、あたしはこの世界で最も有名な存在になるだろうね」

油断なく距離を取る神奈子の目は、軽い口調とは裏腹に真剣だった。

そんな二人の間で、ふう、というため息の音が木々を揺らした。

「そんなことのために、私を探していたの？」

「八雲紫、あんたはわかってない」

紫の言葉に眉を上げて、神奈子は言葉を投げつけた。

「あたしたち神にとって、信仰がいかに重要なものなのか。それだけであたしたちの力や存在そのものを左右するほどのもの。憧れ、友情、ステータス。どんな言葉でもいい。あたしたちにとって信仰ってのはどんな手を使ってでも手に入りたいものなのさ」

「分かっているわ。だから『そんなことのために』と言ったのよ。

……『あたしたち神にとって？ そんなことだから、あなたは洩矢諏訪子に負けたままなのよ。たとえ力では勝っていてもね」

「ふん。おかしいことを言うね。まあいいさ。分かってもらえるとは思ってないし……それに、分かってもらったところで、あんたはここで死ぬんだから」

言って、神奈子は後ろに跳んだ。

その体を包むように色とりどりの魔符が空中にたくさん現れ、ぶんぶん嬉しそうに飛び回る。

「あんたには手加減無しだ」

神奈子がそう言った途端、強い風が吹き始めた。その背を押すように吹き荒れる風は、地面に落ちた木の葉を舞い飛ばし、空まで吹き上げながら、冷たい身を紫に向かわせていった。

そしてその風よりも速く鋭く、神奈子の体を取り囲んで舞う魔符が思い思いに神奈子に向けて走り出す。

「『マウンテン・オブ・フェイス』」

速い。

とつさに地面に倒れこむように体を飛ばし、くるりと転がりながら紫は体勢を立て直した。

その間にも一瞬前まで紫がいたところを、魔符が首を刈るように駆け抜けていく。

徐々に徐々に紫に肉薄してくる魔符に服の裾を削り取られながら、間一髪で紫は大きな木の幹に逃げ込んだ。

と、とと、と、という小気味良い音が、紫が背を預けた木の裏から響いてくる。横目でにらんだ紫の鼻先を、剃刀の刃のような札が風を切って飛んでいった。

ほっと一息ついた紫は、しかし、ざわりと背中を這い上がる嫌な予感に木から飛び出した。

虫の群れのように乱れ飛ぶ魔符に手足を切り裂かれながら、紫は見た。

銀色の光が視界を横切り、紫の頬をかすめて木の幹に刺さるのを。動かなければちょうど紫の眉間を貫いていた位置に、その銀色の光が突き立つのを。

「……なるほど」

身を裂く痛みに顔をしかめながら、紫は笑った。

「木の上からずっと私を狙っていたのは、あなただったのね」

紫はそつと頬に手をやった。わずかに血がにじんだ左頬が焼けつくように熱い。

傷は浅いはずなのに。

そこまで考えて、紫は忌々しげにつぶやいた。

「しかも、毒……悪趣味ね」

聞こえないように、走りながら軽く舌打ちをする。

八坂神奈子に、おそらくは八意永琳。幻想郷でもトップクラスの力を持つ二人が、同時に自分を狙っている。

加えて、彼女たち二人の能力が直接戦闘には関係が薄いのに対して、紫の『境界を操る程度の能力』は攻防一体、万能の力といっていい。紫自身、戦闘時にしろ平常時にしろ、この能力に深く頼って生きてきた。今は、その能力が制限された状況下での戦闘だ。

紫にとって圧倒的に不利な状況が重なっていた。

慧音と穰子はもう遠くまで逃げただろうか。

「けど、時間稼ぎなんてできそうにないわね」

自分を狙い続ける魔符と銀の矢に走りながら悪態をつく、紫は

跳びこみ前転をして、回りながら体の向きをかえた。そのままつぶやく。

「『ストレートとカーブの夢郷』」

腕を上げる。紫の頭ほどもある赤い光の弾が、その腕を中心にいくつも撃ち出され、全方位にまっすぐ飛んでいった。一つは狙ったように、神奈子の元へ。

「反撃かい。面白い」

不敵に笑うと、神奈子は魔符を操って迎撃の体勢を整える。気の早いいくつかの魔符が、待ちきれないように飛び出して、紫の光弾に向かっていた。それを追うように神奈子自身も腕を振って、光弾を打ち落とすべく魔符を放つ。

魔符がそれに触れる直前。

「ん？」

光の弾が、大きく弧を描いた。右に大きくずれて、ありもしない方角へ飛んでいく。

そして神奈子を本当に狙っていたのは――。

「ちっ」

左右から弧を描いて飛んでくる、先ほどまで完全に神奈子の視界の外にあった弾。

器用に魔符の間を縫って、的確に神奈子を狙っていた。舌打ちをしてそちらに意識を向けた神奈子に、紫が走る。

「『動と静の……』」

「『お天水の……』」

走りながらスペルカードを使おうとする紫。

その紫を迎え撃つべく、魔符と別の魔法を出そうとする神奈子。

「何!？」

それはどちらの叫び声だったか。

二人が交錯しようとした瞬間、脇から大きな緑色の光弾が群れをなして押し寄せ、二人の間に割って入った。

魔符も、赤い光弾もそれに押し流される。

「……」

神奈子も紫もその弾を避けて後ろに跳び、二人の距離は再び開いていた。

揃って横を見つめる二人。

「……残念。外れたわね」

そこにいたのはいつの間にも移動したのか、木の枝の上に立っている永琳だった。

「やってくれるじゃないか」

神奈子は唇を歪めて笑った。その虹彩が爬虫類のようにすばまる。

「永琳! あんたが勝手に戦うのは勝手だけど、あたしの戦いを邪

魔するんじゃない！」

激しい怒り。永琳が今まで見たどの神奈子よりも怒っているようだった。

それに同調するように、神奈子を取り巻いた魔符がいつそう激しく飛び回る。

黙って肩をすくめた永琳をぎっとにらみつける神奈子の耳が、微かな呟きを捉えた。

「『二重黒死蝶』」

赤い光弾を放ちそのまま移動する紫の体から、白い蝶が舞い上がった。蝶は紫を狙っていた魔符を飲み込むと、嬉しそうに神奈子と永琳に向かっていった。優雅に舞うその姿とは裏腹に、スピードは速い。

黒死蝶は紫が先に放っていた赤い光弾を瞬く間に追い越して、神奈子の首を狙う。

「読みやすいんだよ！」

すつと横に移動して、神奈子は蝶を避ける。

こと力とスピードにかけて、神奈子は自信を持っている。いかに速くとも、この程度であれば神奈子なら問題なく避けられるレベルだった。

蝶を避けきってから、神奈子はちらりと永琳の方を見る。

永琳も迫り来る蝶を避けるのに専念しているようだった。

——邪魔は、許さない。

ぎ、と唇を噛む。

八雲紫との戦い。どんな形であれ決着をつけたい戦い。

それに水を差すことは許せなかった。特に、自分を侮辱した永琳

には。

そこまで考えて、神奈子は紫に意識を戻す。

紫の動きはにぶっている。既に全身が神奈子の魔符で切り裂かれている上に、永琳の横槍も警戒しなければならなかったため、精神的にも消耗しているのだらう。毒も少しずつ回っているらしい。

——少しばかりフェアじゃないが、まあ仕方ない。

紫が次なる弾を放つのが見えた。今度は蝶ではなくてナイフ。スピードは先ほどとあまり変わらないように見える。

そのナイフが神奈子の元に届いたのは、ちょうど先ほどの赤い光弾と同じタイミングだった。

「ちっ……」

左右両方に気を配りながら、神奈子は飛来するナイフを魔符で撃ち落とした。

そして新たなスペルを繰り出そうとした神奈子は、嫌な予感感じて振り向いた。

「な……っ」

その目に入ったのは、白い黒死蝶。嬉しそうに神奈子の背を焼こうとする黒死蝶。

一度通り過ぎたはずの蝶が、音も無く舞い戻ってきていた。

予想外の方法からの攻撃を、神奈子は無理やり腰を捻ってかわした。

だが。

辛くも避けきり視線を戻した神奈子の背を、冷たい恐れが走った。

「え……？」

紫が、いない。

目を離れた一瞬の間に、紫が消えていた。そして。

突然ばちりと音がして、神奈子の動きが止まった。止められた。

いつの間に張り巡らされたのか、神奈子の足元に広がる蜘蛛の巣のような光の網。

それが神奈子の足を絡めとり、全身を縛っていた。

「あうっ……」

全身を走るしびれるような痛み、集中が解けて魔符が宙に消えていく。

「『光と闇の網目』」

ぽつりと声がして、紫が姿を現した。

「これで終わり、かしら」

紫が現れたひととき大きな木は、奇しくも神奈子が隠れていた木。ほっと息をついて、紫は安心したようにつぶやいた。

「あの、時、か？」

自由にならない口を無理やり開いて、神奈子は何とか言葉を紡ぎ出す。

「ええ。永琳に邪魔されたあの時、結界を仕込んでいたのよ。うやむやになって、結果的には助かったわ」

突き刺さる痛みにか、口惜しさにか、神奈子は顔を歪める。

「ストレートとカーブの夢郷で気づくべきだったわね。私のスペルは、ただ真っ直ぐ飛ばすものだけじゃない」

ぼろぼろになりながらも、紫は余裕を見せて笑った。

ど、と神奈子が膝をつく。憎らしげに顔を上げて紫をにらみつけるが、紫はもう神奈子の方は見ていない。

「で、永琳さん。あなたはどうするの？」

そして、木の上に立って腕を組んだままこちらを見下ろしている女性に声をかけた。

「そうね。私としてはこのまま見逃してもいいんだけど……」

ずっと紫と神奈子を見つめていた両の目が細められ、解いた腕がゆっくりと背中中の弓を構えた。

「あら、まだやるのね。一人になっても戦うなんて、大したものだわ」

紫は気づかれないように舌打ちをして、軽口を叩いた。

実のところ、もうスペルを使うだけの力が残っていない。

これ以上の戦いは避けたいところだった。

そんな紫の気持ちを知ってか知らずか、永琳は薄く笑う。

「まったく、大したものだわ。毒もあまり効果が無いみたいだし。やっかいね」

「あら、そんなことないわ。もう全身ボロボロだし、体もしびれてあまり動かない。しゃべっても舌を噛みそうよ」

「あら、そう？ それは好都合」

「？」

永琳が弓を引く。矢の切っ先が一瞬だけ紫を向いて、すいとその後ろに逸らされた。

「あなたとは、やらないわ。でもあなたには一泡吹かせてあげたいから」

張り詰めた弓の弦と眼差しが、紫の肩越しの遠く、はるか遠くに向く。明確な目標を持って。

「上白沢慧音に秋穰子、だったかしら」

「！」

「ずいぶんご執心のようにだったけれど。どっちに当たるかしらね？」

聞かれるまでもなく、どちらに当たるかなど、どちらもが分かっていた。

ため息をついて、紫は微笑む。

「あの子たち、まだそんなところにいるの？ ……私を待ってるつもりなのかしら」

ことによると、それは永琳の嘘だったのかもしれない。永琳の弓と目標の間には障害物もたくさんあって、撃ったところで当たらないかもしれない。

それでも。

永琳の指が離れた。

自分の命と、知り合ったばかりの他人の命を天秤にかけて。

銀光が閃く。

八雲紫は、その射線上に、身を投げた。

紫の意思によるのか、それとも永琳の腕によるのか。

永琳の放った銀の矢は、始めから予定されていたかのように、紫の左胸に吸い込まれていった。

「ぐっ……」

吹き飛ばされながら肩越しに後ろを顧みて、紫は誰の姿も見えないことに安堵する。

それでも念には念を入れ、自分自身の命を使って。

紫はつぶやいた。

「『生と、死の、境界』」

「！　まだそんな技を……」

その光を見て、神奈子が痛みを堪えて立ち上がる。

紫が傷を受けたせいか、神奈子を捕えた結界は束縛を弱めていた。

そして腕を上げると、ぴたりと紫に向けた。

「『水眼の如き美しき源泉』！」

神奈子の体から後光のように光の線条が伸びる。
一直線に自分に向かってくる光をちらりと見て、それでも紫はすぐに興味をなくし、生み出した弾幕を地面に叩きつけた。

「!？」

その弾幕が自分たちに放たれるものと思い込んでいた神奈子は、完全に不意を突かれて息を呑んだ。

轟音。

かつてリリカを倒した神奈子の弾幕をはるかにしのぐ音と光が、熱が、粉塵が、木っ端が、荒れ狂い狂い飛んだ。

地形が変わるほどの爆発で視界が完全に消える直前、神奈子は見た。

一斉に体に向かい来る光を穏やかな顔で見て、満足げに目を閉じる八雲紫の姿を。

全身を光に貫かれて、それでも笑っている八雲紫を。
それが、神奈子の見た八雲紫の最期だった。

「さよなら、八雲紫」

地面にできた巨大な穴を覗き込み、辺りに降り注いだ大小様々な何かの残骸を見渡しながら、永琳はぼつりとつぶやいた。

「当てられないなら、自分から当たりに行かせればいい。簡単ね」

「……あんたは、最初からそれを狙ってたの？」

「そついつわけじゃないわ。でも、どう転んでも損にはならなかったでしょうね。」

……これで約束は終了。あなたと私の協力もおしまいね」

「あいつ、自分を犠牲にしてまで仲間を守るのか……。さっきの、弾幕も……」

「八雲紫を仕留められたのは、あなたの協力によるところが大きい。感謝するわ。でも、覚えておいて。今度会った時は、あなたも容赦なく殺すわ」

「これじゃ、あいつらは追いかけれない。そのために……？」

「じゃあ、さようなら」

「……ああ」

森の中は既に暗く、森の外では沈みきる直前の太陽が、弱々しい光をあかくように投げかけていた。

【八雲 紫】 死亡

前登場話：《16・信じるということ》

【八意 永琳】

現在地：A - 5

前登場話：《13・交錯》

次登場話：《30・ハート・ハート》

【八坂 神奈子】

現在地：A - 5

前登場話：《13・交錯》

次登場話：《30・ハート・ハート》

【残り 31人】

21・狂わせる者　～最初の夜の訪れ（前書き）

この小説は、『上海アリス幻楽団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻楽団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

21・狂わせる者　～最初の夜の訪れ

「私の目を見て、狂うがいいわ!」

「私の歌を聴いて、狂いなさい!」

妖しく光る瞳が彼女の目を覗き込み、妖しく響く歌声が彼女の耳に
忍び込んだ。

「……」

「……」

「あれ?」

そして、二人同時に間の抜けた声を上げた。

「何で平気なの?」

「あんたこそ」

しばし、沈黙。

「ええい、めんどくさい!なら、弾幕で勝負よ!」

「望むところ!」

二人の構えた手に、光が宿る。

「勝負!」

そして、光が同時に二人の腕を離れようとした。

その瞬間。

鐘の音が鳴り渡った。

驚いた二人が見上げる夕闇の空に悲しげな長い尾を引いて、鐘の音
は走り去って行った。

「夜、ですね」

「うん」

「あまりはかどらないようですが」

「あまり急がなくても良いよ」

「そうですか？」

「うん。時間はあるんだしね」

「私は、忙しいですが」

「ははは、まあたまには良い」

「……では」

鐘の音が黄昏に鳴り響く。

広い野原に、深い森に、高い山に。

音に誘われて、その時、多くの者が空を見上げた。

「どこにいらっしゃるのですか？紫様、橙……」

「上海、おいで」

「けほ」

「お嬢様、ご無事で」

「び、びつくりさせますね……」

「おなか空いたなあ」

鐘の音が空に溶け消えて間もなく、後を引き継ぐように少女の声があった。

大きくはないが、凜としたその声は大地に刺さるようにはっきりと通る。

「皆さん、お疲れ様です。まずは今私の声をお聞きの皆さんに、そのご無事をお喜びします。」

……さて、それでは、皆さんにいくつかの情報をお伝えしたいと思

います。良く注意して、聞き漏らしのないようにしてください」
「まず一つ目ですが、これからの半日の間に入ることができなくなる区域をお伝えします。

私の話が終了してから夜明けまでの間を三つに分けます。

私の話の終了後。月が天頂にかかる前。月が天頂と地平の真ん中をよぎる頃。

D - 6。 E - 5。 C - 1。

それぞれの時に、それぞれの区域が立ち入り不可能となります。

近くにいる方は、余裕をもってその場を離れるようにしてください」

「次に二つ目。始まりから今までの間に、この地で亡くなった方がいます。

追悼の意を込めて、彼女らの名前をお知らせいたします。

『リリカ・プリズムリバー』

『紅 美鈴』

『リグル・ナイトバグ』

そして。

『八雲 紫』

以上四名が、これまでの死者になります。誰の手で殺されたのかは申し上げません」

「それでは、皆さんの引き続いての健闘をお祈りしています。

夜は何かあるか分かりません。皆さんの中には夜を主な活動の場とする方もいらっしゃるでしょう。

休息を取るのも結構ですが、ゆめゆめ油断はされませんよう。

……では、また夜明けにお会いできることを願っています」

最後の声が夜の帳に追いやられ、星の輝く暗く長い夜が訪れた。

【一日目・昼 終了】

【一日目・昼の死亡者数 4名】

【残り 31人】

22・1日目 夜（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

22・1日目 夜

鐘の音に乗って誰かの名前を読み上げる声に、八雲藍は耳を疑った。

化け猫の橙を式神として使いながら、自身もまた式神である九尾の妖狐、藍。その藍を式神として使う主こそが、

「紫……様……？」

最後に名前を呼ばれた、八雲紫だった。

誰よりも強く、誰よりも賢く、そして誰よりも幻想郷とその住人を愛する妖怪。それが八雲紫。

その紫が、死んだ。

「そんなこと、信じられるか……！」

呻くようにつぶやくと、藍は唇を噛み締めた。

風になぶられた草がざわざわと音を立てていた。

・
・
・

「死んだ人が、いるのね」

やってきた上海人形を抱き上げながら、アリス・マーガトロイドはつぶやいた。

「本気でこんなこと、やるつもりなの……？」

返事はない。悲しげに見つめ返してくる上海人形をなでて、アリスは一人、当てる無い道を再び歩き始めた。

・ ・ ・

紅美鈴。

紅魔館の門番をしている、気のいい妖怪。

その名前が呼ばれた時、パチュリー・ノーレッジと十六夜咲夜は、まったく離れた場所にあって、まったく同じ反応をした。

「「そんな……！」」

決して優秀な門番ではなかった。仕事中に居眠りはするし、霊夢や魔理沙といった招かれざる客の侵入を許すこともままある。

それでも美鈴は、彼女らにとってかけがえのない存在だった。

大図書館にこもりきりで、めったに外に出てこないパチュリーも、門番としてろくに機能しない美鈴に内心頭を痛めている、メイド長の咲夜も。

ともに食卓を囲み、同じ屋根の下で眠り、お互いを大切に過ごしてきた紅魔館の家族の一員として、美鈴のことが大好きだった。

「美鈴が、死んだ？」

パチュリーの言葉は虚しく宙に消えるだけで、誰の耳にも届くことがない。

「嘘でしょう？あ的美鈴が、死ぬ、なんて……」

咲夜の脳裏を元気な頃の美鈴がよぎる。

体力には自信を持っていた美鈴。

怒られてもまるでめげなかった美鈴。

咲夜の思い返した美鈴はとても楽しそうに笑っていて、その姿は

そのままおぼろな霞の中に消えていった。

・ ・ ・

「神奈子様と諏訪子様は両方とも無事、と」

ときどきする胸を押さえながら、東風谷早苗はうなずいた。

「それにしても、本当に殺し合いなんてやってるんでしょうか？」

誰に聞くでもなく、続ける。

答える者は誰もいなかった。

・ ・ ・

「私、おかしいのかな」

鳥の羽の少女と別れて、兎耳の少女、鈴仙・優曇華院・イナバはため息をついた。

考えているのは先ほどのこと。

死者を告げる声が聞こえた後、結局二人は戦いを再開することなく別れた。鳥の羽の少女は北に、鈴仙は南に。再開しなければならぬ理由もなかったし、どちらも本気で殺し合うつもりなどなかった。命のやり取りから程遠いそれは戦いなどではなく、幻想郷で日常的に行われている、挨拶程度のものでしかなかった。

……つい先ほどまで、鈴仙はそう考えていた。

だがあの声を聞いた今では。

一歩間違えば、そんな「挨拶代わり」でどちらかが死んでいたのかもしれない。

死者の名前を聞いてそんなことに思い当たり、そのことに今まで

まるで思い至らなかった自分に、鈴仙はぞくりと身を震わせた。

——死って何だろう。

実感がわかない。彼女の周りにいるのは、死から遠い者ばかりだったから。

蓬莱山輝夜と八意永琳はどちらも『蓬莱の薬』を呑み、不老不死となっている。

因幡てゐも、ずっとずっと昔から幻想郷で生き続けているらしい。かつて月で戦闘要員として生きた鈴仙は、その三人に比べればはるかに死に近いところにいた。それでも、鈴仙はもともと戦いなど好きではない。月に住んでいた頃の彼女は臆病で、戦いからも月からも逃げて幻想郷に下りてきた。

逃げ出して以来、彼女は更に戦いが嫌いになった。戦いが、自分の肉体を傷つけるものであると同時に自分の臆病さを嫌というほど思い知らせるものに変わったからだ。

そうして戦いから逃げ続け、死というものに触れずに長い時間を過ごして、彼女は今に至った。

「のうのうと生きすぎたのかな」

今は死の脅威が現実のものになっている。鐘の音と一緒に聞こえてきた声は、淡々としているせいで逆に真実味を帯びていた。だが。

「……やっぱり、実感がわかないわ」

首を振る。自分はやはり狂ってしまっているのかもしれない。

「あれ？」

そこまで考えた鈴仙の視線の先で、何か周囲と異質なものが動い

た気がした。

背の高い、黒い影。徐々に大きくなっているように見えるのは、こちらに近づいてきているのだろうか。それにしても、遠目にも大きい。

——いや、違う。

少しずつ露になるその輪郭に、鈴仙は目をこらした。

あれは人の姿じゃない。何かもっと直線的な。直線的な曲線で構成された。そう、人工的な。

「……鎌？」

ごしごしと眼をこする。

間違いない。あれは、大きな大きな鎌。でも鎌が一人で動き回るはずはないから、その持ち主が一緒にいるわけで。

胸がざらついた。そのざらつきが何なのかうまく理解できないまま、鈴仙の足だけが前に進む。

鎌を携えた黒い影も、鈴仙に向かって真っ直ぐ近づいてくる。

周りからは何の音も聞こえてこず、鈴仙は自分の耳がおかしなつたのではないかと疑った。

影までの距離がもうあと数歩というところで、月明かりを背に浴びたその真ん中が、横倒しになった三日月のように光った。

——笑った？

そう思った瞬間、その三日月の上で、もっと大きな三日月がひらめいた。

「え」

何が起こったのか、まるで分からなかった。

目は影が飛びかかって来た光景を捉え、肌はお腹に走った衝撃を伝え、それでもそれぞれの感覚がつかないまま、気がついたら鈴仙の視線の先には空が広がっていた。

背中には土の感触。頬には草の香り。

——倒れている？

良く分からないまま起き上がろうとするが、なぜかお腹が熱くて力が入らない。それに、不思議と眠い。

起き上がるのをあきらめて、鈴仙はぼんやりと空を見た。

あれが一番星、二番星、三番星。視界の端には柔らかい明かりを投げかける、満月に少しだけ足りない月。

その視界に、硬く光る三日月が飛び込んできた。三日月は鋭い色に輝きながら、鈴仙の目の先に降ってくる。

「ごめんよ」

そんな声が聞こえて、鈴仙は自分の耳がおかしくなかったことに安堵した。

——ああ、そうか。

奇妙なほどゆっくりと自分に吸い込まれる三日月を見つめながら、鈴仙は思った。

——これが、死、なんだ。

・
・
・

鳥の羽の少女、夜雀のミステリア・ローレライは、鈴仙とはちよ

うど反対側に向かって羽ばたいていた。気持ちが浮き立って、自然と口から歌が漏れる。

彼女は夜が好きだった。

夜雀である彼女にとって、夜の闇は視界を遮りはしない。逆に、他者から彼女の姿を隠す帳となってくれる。夜なら彼女は誰よりもうまく立ち回る自信があった。

「
」

明るいメロディーが口をついて出てくる。鈴仙との戦いのことは、もう頭になかった。

「あれ？」

その行く手で、ぼんやりと光るものがあつた。光の中に白い姿が見える。

興味に駆られてぱたと飛んでいくと、光の正体があった。

それは、たくさんの数の、白く輝く光の蝶だった。薄く儚く光を発して、白い姿の周りを無秩序に飛び回っている。

何となく誘蛾灯みたいだ、とミスティアは思った。そのまま、彼女自身も白い姿に吸い寄せられていく。

「わ」

思わず声が漏れる。夜の闇に生きてきた彼女が、光の蝶を美しいと感じた。

声が聞こえたのか、気持ちが届いたのか。蝶の一匹が、ミスティアに向かってきた。

「？」

それに引つ張られるように、白い人影がこちらを向く。

空色の着物に桜色の髪、雪色の肌。

光の蝶のカーテンを通して振り返った少女は、溶けて消えてしま
いそうに淡く、この世のものとは思えないほどに美しかった。

「あら、こんばんは。偶然ね」

少女は優しそうに笑うと話しかけてきた。

「え、ええ」

答えながら、ミスティアはいぶかしんだ。この人は一体何だろう
か。

「ひよつとして、神様？」

「あはは。イヤねえ。私はそんなに偉くはないわ。ただの亡霊よ」

儚げな見た目から想像したのと少し違う、気さくな返事が返って
くる。

「亡霊？それってもしかして、さっき誰かが言ってた人たちの……
？」

思い浮かんだままを口にすると、少女は一瞬だけきょとんとし、
それから声をあげて笑い出した。

「ふふ。あの子たちの亡霊か。面白いことを言うわね。」

「……そう。そうかもしれないわね」

どこか自嘲するような笑いは、つぶやきとともにすぐ消える。

「あの時、八雲紫って言ってたじゃない？」

「そう言われれば、そんな名前の人もいたかも」

「その子って、私の親友なの。私の親友で、誰よりも強くて賢い妖怪。」

でも、誰かに殺されちゃったみたいなのよ」

「そうなんだ」

伏し目がちに話す少女を見てみると、ミスティアの方が悲しくなってしまう。

「それで、私は思ったの。どうしてこんなことになってるんだろう、って」

「うん」

「でね。このバカみたいな殺し合いを企画したの、何と私の知り合いなの。驚きでしょう？」

でも、私の知ってるあの子は、こんなバカげたことやるような子じゃない。どうしてこうなったのか、私にはどうしても分からなかったの」

「ふうん」

なぜ、自分にこんな話をするのだろう。ミスティアは不思議だった。何かを深く考えたわけではなかったが、何となくこの少女とはそろそろ別れた方が良くように感じた。

「だから、私は考えたのよ。分からないなら自分から聞きに行けばいいじゃない、ってね」

顔を上げて微笑む少女。口調は今までとまるで変わらず、笑顔は柔らかく優しい。

だがその言葉を聞きその顔を見た途端、なぜだかミステリアの背筋は寒くなった。

「そ、そう。じゃあ……」

頑張つてね、と言ってその場を後にしようとしたミステリアの体は、動かなかつた。自慢の羽も。

いつの間にか、光の蝶が彼女を取り巻いていた。その数はどんどん増え続け、光の燐粉が彼女の体に触れてきらきらと散っていく。「でも、あの子のところに行くには、五人殺さないといけないんですって」

優しげな笑みのまま、彼女は言った。

「あ……」

ミステリアの呼吸が速くなる。吸っても吸っても、息ができない。視界を多い尽くすほどの光の恐怖の中で、ミステリアはふと、誘蛾灯は自分の方だったのか、とどうでも良いことを考えた。

「だから、ごめんなさいね」

笑みを崩さないまま、彼女はそつと手をあげた。

ミスティアの目の前が暗くなる。
彼女は初めて、暗闇が怖いと思った。

・
・
・

「私が言うのもどうかとは思っけど、安らかに眠ってくれ」

鈴仙の前に立った黒い影、小野塚小町はつぶやいて、べっとりと濡れた鎌をぶんと振った。飛び散った液体が、草の葉に黒い斑点を生む。

「……さ、次行くか」

心なしに苦い顔に見えたのは、月明かりの加減だったか。

片手で軽々と鎌を持ち上げると、小町は再び歩き出していた。

・
・
・

動かなくなつたミスティアを見下ろして、白い光の中で西行寺幽々子はつぶやいた。

「ごめんなさい。私はどうしても映姫に会いたい」

優しい笑顔はそれまでとまるで変わらない。けれどミスティアを見つめるその笑顔は、どうしてかひどく悲しそうだった。

彼女の周囲を飛び回る光の蝶もまた元氣なく飛んでいたかと思うと、やがてふっと宙にかき消えた。

後には、幻想色の少女だけが立っていた。

）
）
）
）
）

【鈴仙・優曇華院・イナバ】死亡

前登場話：《21・狂わせる者　　最初の夜の訪れ》

【ミステイア・ローレライ】死亡

前登場話：《21・狂わせる者　　最初の夜の訪れ》

【小野塚 小町】

現在地：D - 2

前登場話：《8・彼女の、幸運》

次登場話：《36・メイド、巫女、死神》

【西行寺 幽々子】

現在地：F - 3

前登場話：《21・狂わせる者　　最初の夜の訪れ》

次登場話：《25・三人寄らば》

【残り 29人】

23：人間同士（前書き）

この小説は、『上海アリス幻楽団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻楽団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

23・人間同士

横長の机が両脇に何列も並ぶのを横目に奥まで真っ直ぐ進み、ステンドグラスを見上げて咲夜はため息をついた。

「神さま、ね」

たどりついたのは大きな教会。神が守ってくれるならば祈ろう。主であるレミリアが、その妹であるフランドールが、レミリアの友人であるパチュリーが、無事であるように。そして、死んでしまった美鈴が、安らかに眠れるように。

自分の知る何人かの神を思い出し、また、悪魔に仕える自分が神に祈っていることに気づいて、咲夜は皮肉を込めた笑みを浮かべた。と、咲夜の物思いを遮るように、ドアの軋む音が背後から響いた。

「！」

振り返りざま入り口に向けてナイフを投げると、外から入ってこようとした誰かが一瞬だけ覗いてすぐにドアの影に隠れた。木でできたドアに、かつりと音を立ててナイフが突き立った。

「誰」

鋭く発した咲夜の声に答えは無く、お返しとばかりに小さな光弾がドアの隙間からいくつも飛んでくる。

「答える気は無し？」

ぼん、と左に跳びながら、咲夜はつぶやいた。真っ直ぐに飛んで

きた光の弾丸は、咲夜にかわされてそのまま正面の説教壇にぶつかる……はずだったが。

「え？」

ぶつかる直前でぎゅりと方向を変えると、そのまま、跳びのいた咲夜を追いかけてきた。

「嘘」

舌打ちしながら懷に手を入れ探り当てたナイフを、取り出すと同時に投げつける。ナイフに貫かれたいくつかの光弾が、まばゆい光を放ってかき消えていった。

「く」

まぶしさに片手を目の前にかざしながら、もう片方の手で再度懷を探る。掲げた手の隙間から、仕留め損ねたいくつかの光が迫っているのが見えた。ちらりと視線だけ動かすと、ドアから入り込んだらしい人影が、机を何列か挟んで壁沿いに移動していた。

一つ大きく跳んで机を飛び越え、その陰に隠れる。後ろで光が机にぶつかって四散した。

すかさず飛び出して懷から取り出したナイフを構えると、待ちかねていたように咲夜の目の前に人影が飛び込んできた。

「はっ！」

ためらいなく、咲夜は手にしたナイフを横になぎ払った。狙ったのは、その手に扇のように広げられた、何枚かの紙切れ。

「……」

ふっと、人影が笑った気がした。
なぜかそれが恐ろしく、咲夜の背筋に鳥肌が立った。

「くっ」

ナイフが紙切れを削り取る直前で、咲夜は左足をぐっと踏み込んで横に跳んだ。無理な体勢に足首が悲鳴を上げる。それでも何とか進路を変え、咲夜は背中から机に跳び込んだ。

「つつ」

受身を取りながら机の上をごろごろと転がって、顔だけを相手に向ける。

ち、という舌打ちの音がした。その音に、咲夜ははっと目を見張る。

相手の手にあっただはずの紙切れが、いつの間にか人影を取り囲むように宙に浮いていた。それぞれの紙を結ぶように光の帯が伸び絡まって、輝く網目を形づくっている。それはまるで蜘蛛の巣のようで、とっさに避けなければ蜘蛛の糸に捕まっていただろう。

「結果？」

咲夜はつぶやいた。人影がため息をつく。それと同時に、宙に配された紙が光を失って力なく地面に落ちた。

「外しちゃったわね」

最後の紙が落ちるのに合わせて、返事があった。その声は咲夜に

とって聞き覚えのあるもので。

「って、霊夢？」

その声に、人影は顔を上げた。

「あ、咲夜だったの」

興味なさそうな口調。

「それで、咲夜はこんなところで何やってたの？」

「目立つ建物の方が、お嬢様たちと合流しやすいかと思って。霊夢は？」

「一晩の宿を見つけて入って見たら、いきなりナイフを投げられたわ」

「……ごめん」

「で、どうするの？続きをやるなら私は構わないわよ」

霊夢の言葉が、二人の間の空気を張り詰めさせた。地面に落ちた紙切れがうつすらと光を取り戻し始める。咲夜は懷に手を入れた。ナイフの柄を探り当てる。手になじんだ、紅魔館のナイフ。

——紅魔館。

ナイフに触れた時、咲夜の脳裏を紅魔館のメンバーの顔がよぎった。主のレミリア。その妹フランドール。レミリアの友人のパチュリィ。

そして、今はもう死んでしまった、紅美鈴。

鐘の音と一緒に聞こえてきた声。美鈴の死を告げた声。その声を聞いた時の自分の気持ち。信じられなくて、悲しくて、腹立たしくて、そして受け入れられなかった。

——今、自分と霊夢が戦って、どちらかが死んだなら。

霊夢が死んだとしたら、レミリアは悲しむだろう。そしてまた、怒るだろう。そんなレミリアを、咲夜は見たくなかった。

そしてまた、咲夜は自分が死ぬつもりもなかった。

——お嬢様と会うまで、死ぬわけにはいかない。

そこまで考えて、咲夜はゆっくりと手を離した。何も持たない手を上げ、霊夢に掌を向ける。

「……やらないわ。いきなりごめんなさい」

「そう」

地面に落ちた光がまた消え、霊夢が咲夜を見据えて笑った。

）
）
）

【博麗 霊夢】

現在地：D - 3

前登場話：《7・天狗が見ていた》

次登場話：《36・メイド、巫女、死神》

【十六夜 咲夜】

現在地：D - 3

前登場話：《22・一日目 夜》

次登場話：《36・メイド、巫女、死神》

24・紅と白／銀と金（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

24・紅と白／銀と金

夢を見ながら、彼女は笑っていた。笑いながら、彼女は泣いていた。涙は流れない。

けだるそうに身じろぎをして、彼女の目がゆっくりと開く。大きな瞳が洞窟の灯りに映えてきらきらと紅く輝き、傍らにいる人影を捉えた。ほわ、とあくびを一つ。

「あなた、まだいたの？」

右手を口元に当てながら、彼女はつぶやいた。

「うん」

答えたのは、同じくらいの歳に見える少女だった。流れるような蜂蜜色の髪に見とれたのか、彼女は一瞬口をつぐんだ。

「……ふうん。ま、いいけど」

わずかな沈黙の後、どうしても良さそうにそう言っと、彼女はふいと少女から目を逸らした。同時に、背中にたたまれた翼がはためく蝙蝠のそれに似た漆黒の翼は、広がると彼女の体よりも大きかった。その鋭い輪郭と濃い色は、柔らかく淡い彼女のそれまでの雰囲気とはまるで調和しておらず、それが逆に、全体として彼女にどこか禍々しい美しさを与えていた。

翼が、洞穴内の空気をかき混ぜる。最初はゆっくりと小さな動きで。徐々に大きく激しく。

やがて、彼女の小さな体がふわりと浮いた。そのままひんやりとした洞穴の空気をいとおしむように二度、三度と羽ばたくと、彼女はすっかり目が覚めたようにくるりと首を回した。こきん、とかわいらしい音が洞穴に反響する。

「よし、行こうかしら」

きゅっと拳を握り不敵に微笑んでそう言っと、彼女はそのまま飛んでいこうとする。

自分のそばにいた少女を置いて。

「え？　ちよっと、待ってっ」

あわてたのは蜂蜜色の髪の少女。ずっと待っていたのに置いていかれてはたまらないとばかりに、少女は飛び出すと両手を広げて彼女の前に立ちふさがった。

「何？」

いらだったように、彼女はばさばさと翼を振るう。その刺々しい様子に似つかわしくない柔らかく甘い香りが、風に乗って少女の元に届いた。

「あ、えつと。その……」

口調に気圧されて、一瞬口をつぐみそうになる。それでも、今を逃すと後はないとばかりに、少女は震える声を肺の中の空気と一緒に押し出した。

「私も一緒に、連れてってくださいっ」

「イヤ」

「……」

しばしの沈黙。

ぽかんと開いた口に数拍遅れて、少女の瞳にじわりと涙がにじむ。
「ど、どうしてですか？」

「足手まといだもの」

きっぱりと言うその言葉には迷いも情けも無く、声はただひたすらに冷たかった。

「足手まとい……」

「ええ」

ふう、とため息をついて、彼女は地面に降り立った。腕を組んで彼女は少女に容赦の無い言葉を投げる。

「私についてきたところで、あなたに何ができるかしら？　あの程度の妖怪に食べられかけてたあなたが」

少女は、自分が襲われたときのことを思い返した。目の前の彼女に助けてもらわなければ間違はなく死んでいたことを思い出して、

少女の体は思わず震える。

「それは……」

「それに」

彼女は答えを待つことさえしない。

「あなた、翼を傷つけてるでしょう？ 戦うこともできない、逃げることもできない。そんなのについてこられても迷惑だわ」

そう言っただけで今度こそ飛び立とうと翼をはためかせると、彼女はふいと目を逸らして付け加えるようにつぶやいた。

「だから、ここにいなさい」

先ほどまでと比べると小さな声は、翼の音に遮られる。少女に届いたのかどうか分からないが、彼女は構わない。

一際力強く翼を打つと、彼女はもう少女の方を見やりもせず、真っ直ぐに洞穴の外に飛んでいった。

「あ……」

翼の羽ばたきで舞い上がった土ぼこりが収まった頃、ぽつりと一人残された蜂蜜色の髪の少女は、ただ一人その場にたたずんで、ぽたりと涙をこぼした。

夜の帳が下りた草原を、風に乗って先ほどの彼女が飛んでいく。時には翼を羽ばたかせて高度を上げ、時には風に身を任せたまま滑空し、彼女は気ままに空を飛んでいた。

見下ろした先にはさらさらと揺れる青い草。ところどころに立つ木が、道しるべのように点々と彼女の先に続いている。

見上げた先には真円に少しだけ足りない月。それを取り囲むように輝く星たちが、彼女を見守るかのようにたたずんでいる。

「気持ちいいわね」

自分の肌の上で踊る月の光にうっとり目を細めながら、彼女はつぶやいた。

「あら」

その目が、何かを捉えて面白そうに輝く。音も無く空を滑り、目に留まった木のとっぺんに近づくと、彼女は空中で器用に姿勢を制御し、制動をかけて降り立った。がさり、と葉ずれの音がして、彼女の乗った枝がしなる。

それを気にも留めず、揺れる枝の上に器用に座り込むと、足を組んで彼女は視線を下に向けた。
そこには、二人の少女がいた。

【レミリア・スカーレット 現在地：C - 5】（前登場話：14・紅白黒）

【リリーホワイト 現在地：B - 4】（前登場話：14・紅白黒）

・
・
・

「何で、こんなことになってしまったんだろう……」

ため息が一つ、静かな夜に零れ落ちた。

今夜の宿に、と決めた森の中の広場で、妖夢はあまり友好的でなさそうな相手と向かい合っていた。

「友好的じゃないっていうより、我を忘れてる、か」

「うつつ」

妖夢の声に答えるようにうなり声を上げたのは、真っ黒な服に身を包んだ金髪の少女、ルーミア。

血走った目に理性の光は無く、ただ目の前の妖夢に襲い掛かることしか頭に無いように見える。

「うああっ」

高く吼えると、ルーミアは妖夢に飛び掛った。直線的な、単純な動きで。

「はあ……」

もう一つため息をついて、妖夢はすらりと刀を抜き放った。わず

かに反った刀身が、月光を反射して妖しく輝く。その光を受けて、妖夢の銀髪が白くきらめいた。

ルーミアの動きは妖夢が思っていたよりも速かったらしい。顔を上げた妖夢の鼻先には、既にルーミアの腕が迫っていた。

しかしそれにまるで動じず、とんと地面を蹴ると妖夢は左に跳んだ。ルーミアの腕が妖夢の体すれすれをかすめて通り過ぎ、目標を失ったその体がたたらを踏む。

小さな体が姿勢を崩すのと、跳んだ妖夢の左足が地面に着いたのとが、ほぼ同時。倒れないように必死に踏ん張りながら相手の方に目をやり、ルーミアは見た。妖夢のから空きの背中がぶれたかと思うと、突然何かが閃いたのを。

そして、ごぎ、という嫌な音がした。
ふう、というため息が、夜に響いた。

どれだけ経っただろう。

わずかに周りが明るくなったように感じて、妖夢は目を覚ました。背を預けている岩のごつごつとした感触が心地よい。

周囲に気を張り詰めていたため熟睡はできなかったが、それでも体に少しばかり力が戻ってきたのを感じる。

ふと目をやると、ルーミアは妖夢が眠る前とまったく変わらない様子で横たわっていた。

ため息を一つ。

「何で、こんなことになってしまったんだろう……」

岩から背を離して立ち上がりながら、妖夢はつぶやいた。刀は既に鞘に納められており、妖しい光は漏れていない。その視線の先には、先ほどからぴくりとも動かない黒衣の少女が横たわっている。

見上げた先には、徐々に白み始めた空。真上にあつたはずの月は、既に視界からは消えていた。どうやら夜明けが近いらしい。

もう一つため息をついて、妖夢はうんと伸びをした。

そのままルーミアの傍らに寄り、その体を優しく揺する。

「おゝい」

それに合わせてルーミアの体が揺れ、うう、といううめき声が漏れた。

「うゝん、っ、いた、た、たた」

しかめながらもぱちりと開いた目には先ほどのような凶暴な光は無く、浮かんでいるのは戸惑いと苦痛だけだった。

「うん、起きたか」

それを見た妖夢も、ほっと息をつく。

「安心しろ、峰打ちだ」

安心させようと声をかけた妖夢だったが、その言葉に痛みが強まったのか、ううう、とルーミアが涙目になる。

「痛い……」

「すまない。あんまり手加減しなかった」

特にすまなさそうでもなく、妖夢は謝った。

「ずいぶんと混乱していたようだ、何があったんだ？」

その言葉を聞いて、ルーミアの体がびくりと震えた。

「あれは、あれは……」

顔が青ざめている。

「紅い、吸血鬼が、……レミリア、スカーレット、が」

ぽつりぽつりとつぶやき、つぶやいた自分の言葉に恐怖したように体を抱いて、ルーミアはしゃべった。

「レミリア・スカーレット？ ……紅魔館のか。あいつが、お前を殺そうとしたのか？」

妖夢がその名前を言うのにびくりとしながらも、ルーミアはこくこくと首を縦に振った。

「確かに、吸血鬼は危険だな……」

腕を組んで、妖夢は目を閉じ、黙り込んだ。

しばらくの後、目を開くと妖夢は口を開いた。

「よし、そこに案内してくれないか」

その言葉に、ルーミアは飛び上がらんばかりに驚いて。

「吸血鬼は倒しておこう。幽々子様に危害が及ぶと良くない」
それに続いた言葉に、大げさに飛び退って妖夢から離れた。

「や、やだ！」

妖夢に斬りつけられたところが痛んだのか顔をしかめ、それでも
よたよたと後退しながら、ルーミアは妖夢から逃げていく。

「あ、待て！ 一人で動き回ると危険だ」

自分のことは棚に上げて、妖夢は逃げたルーミアを追いかけた。

だが、ルーミアの逃げ足は思いのほか速い。見失わないように駆け足になりながら、妖夢はまた一つため息をついた。

「何で、こんなことになってしまったんだろう……」

幽々子様に一刻も早く会いたい。

危険な吸血鬼も倒しに行かなければならない。

どちらにしても、今の少女は貴重な情報源だ。

それに加えて、せっかく冷静になった相手がまた恐慌状態に陥ってしまったのは、自分のせいだ。

放っておくのは少しばかり良心がとがめた。

もっと上手く立ち回れなかったものか、と、今になって妖夢は反省した。

彼女は、真っ直ぐで、忠にも情にも篤く、少しばかり向こう見ずだった。

闇雲に動き回る相手に追いつくのは、移動先の予測が立てづらいのもあって、彼女が思っていたよりも難しかった。

それでも、銀髪の少女が金髪の少女に追いつくのに、それほど時間がかからなかった。

……そして、その場所で。

半人半霊の庭師と宵闇の妖怪は、出会ってはならないものに出会ってしまう。

【魂魄 妖夢 現在地：A - 4】（前登場話：12・ある一つの出

会いと別れ)

【ルーミア

現在地：A - 4】

(前登場話：14

・紅白黒)

25・三人寄らば（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残酷な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

25・三人寄らば

夜に溶け込む大きな桜の、静かな森の満開の下。

夜雀の骸を見下ろし立った一人の少女のその後ろに、静かに歩み寄る影一つ。

「あら、見ていたの」

振り返りもせず少女は語る。

「とか何とか言って。気づいてたんでしょ？ 最初から」

平坦な口調で答える影は、その手に光を携えて。太陽に似たまばゆい光に亡霊少女は目をすがめ、片手を挙げて光を避けた。

「まあ剣呑。そんなのしまつてちょうだいな。私が溶けて、消えてしまつ」

芝居がかったしぐさと言葉に、影だった少女はため息ついて。

「もしもあなたが私なら、そんな言葉に素直に従う？ どうせあなたは私も殺す気」

何を思うか、にっこり笑った。

「ね、西行寺のお嬢さん。殺されるのは別にいいけど、大人しく、っていうのはちょっと癪だわ」

その微笑みは、どこか病的で不健康。

「だから、覚悟なさい。光、火傷、浄化、成仏、あなたにとっては恐ろしいでしょう？ 忘れられないとおき、あなたに味わわせてあげる」

その手の光が輝きを増す。茫とした目を細めて眺め、幽々子はふらりと視線を逸らした。

「……月がきれいね、パチュリーさん」

「……？」

うつとりとした口調でつぶやく幽々子に、パチュリーはそつと眉をひそめた。それに気づくか気づかないのか、空を見上げて幽々子は続けた。

「知ってるかしら？ 今は遠くのあの月も、はるか太古の大昔には、私たちの、この世界のものだった」

「月は月だわ。他の誰のものでもない」

パチュリーの返事は冷たくつれない。

「そんな訳のわからない話で、私の興味を引けると思って？」

「いつからかしら？ 月が、離れていったのは。そのことさえも、私たちが忘れてしまったのは」

要領を得ない幽々子の言葉に、パチュリーは苛立ったように後ろに下がる。

そんなパチュリーに、まるで初めて気づいたように、幽々子は目をやり微笑んだ。

それはまるで桜が散るよう。桜の下に居るといわれる鬼のよう。幽玄にして美しく、それでいてなお妖しく怖い。

パチュリーの体に、人知れず一筋震えが走る。

けれどそれも一瞬のこと。すぐに幽々子はひらりひらりと手を振って、暢気にかからから笑い上げた。

「あ、勘違いしないで、パチュリーさん。あなたを殺す気なんてないわ」

「足元にその子がいるのに、そんな言葉を信じろって？」

そこに眠るは夜雀の怪。いつか桜が降り積もり、根元に沈むその日まで、ただ一人待つ孤独の身。

「あら、本当よ。私はあなたが大切なもの」

「またまた」

「まあ正確には、あなたの頭脳なんだけど」

「やっぱり」

「それでもまあ、あなたの頭脳だってあなたでしょ？」

悪びれずに笑う亡霊少女は、生命力にあふれている。

「簡単に言えばね、私はあなたの力が欲しい」

「イヤよ」

「つれないわねえ」

幽々子は笑みを崩さない。パチュリーは険しい顔のまま。

「私はあなたが気に入ってるの。あの紅い吸血鬼より、あなたのことを高く評価しているわ」

「あなたに、レミイの何が分かるというの」

パチュリーはまるで耳を貸さない。幽々子も答えを予期していたか、あっさり次の言葉を紡ぐ。

「じゃあ、こういうのはどうかしら。あなたが私に協力するなら、私はあなたの仲間を傷つけない。約束するわ。」

あなたがうんと言うそれだけで、殺人鬼が一人怖くなる。悪い話じゃないでしょう」

自分のことを「殺人鬼」だと、何のためらいもなく言い捨てる。それに少しの嫌悪感を抱きながらも、思わぬ言葉にパチュリーの動きは止まった。

「どういうつもり？」

「それだけ私はあなたを仲間にしたいのよ。レミアとフランドールの吸血鬼姉妹、その従者の十六夜咲夜。あなたが守りたい人が、私を敵に回したせいで殺される。そんなことになったら、あなただって死んでも死にきれないでしょう？」

紅美鈴のことは、その……残念だったけど」

美鈴のことに言い及び、幽々子は少し口ごもった。その様子は演技のように見えない。

出された名前を耳にして、パチュリーの胸がどきりと鳴った。その脳裏を、家族同然の四人がよぎる。

——会いたい。

そんな思いを、パチュリーは慌てて振り払った。今は目の前のこととを考えなければ。

「私にはレミイや妹様をあなたがどうこうできるとは思えないけどね。……それで、何が狙いなの？」

「言ったとおりよ。私はあなたの力が欲しい」

「分からないわね。どうしてそこまでこだわるの？ 私程度の力なんて、あなたには必要ないでしょう」

幽々子は苦笑し、諭すように問いかけた。

「じゃあ聞くけれど、あなたは一体、力とは何だと思っているの？」

「……力は、力。魔法だったり、スペルカードだったり。それが何？」

「これは私の友人が、昔言っていたことだけど」

一拍空けて、幽々子は悲しげに、しかしきっぱりと言った。

「力とはつまり、知恵のことよ」

「……あなたは、私の知恵が欲しいと？」

「大正解」

言い切った天真爛漫な笑顔は、まるで穢れ無い少女のよう。

「この首輪」

笑ったままで、ほっそりとした指が首を指す。そこに光るは鈍い銀色。

「不思議よね。何で出来てるのかしら。これがある限り、私たちは映姫に逆らえない」

「そうかしらね」

その時二人が考えたのは、全員が集められた場所で、首を吹き飛ばされた青年のことか。

「あなた」

幽々子はパチュリーを見た。

「これ、外せない？」

「無理」

「そう」

幽々子は、特に期待していなかったらしい。

「まあいいわ。おいおい教えてもらうから」

「力を貸すとは、言っていないわよ」

「教えてくれなきゃ、いたずらに死者が増えるだけ。五人殺せばいいんだから」

わずかな時間の逡巡の末、パチュリーはしかし首を振る。

「……あなたは信用できないわ。冥界の管理人であるあなたが、閻魔の仲間じゃないとは思えない」

パチュリーは警戒を解かぬまま、両手の光を幽々子に向けた。その光を気にもとめずに、苦い顔で幽々子は言った。

「私は、人を死に誘う」

「理解できない」

「そうね。言い訳するつもりは無いわ。……たとえそれが、私が私であるその前から運命付けられたこととしても」

「？」

幽々子の言葉の後半は独り言のようにつぶやかれ、パチュリーには届かなかった。しかし幽々子は言い直さない。

「目的があるから。映姫に会いたいから。そのためには、手段なんて選ばない。殺しやすそうな子から殺していく」

「弱いものいじめの発想ね」

吐き捨てるように言うパチュリーに、幽々子は動じず笑いかけた。

「それでもいいわ。あなたに何と言われようと、私は構わない。あなたが協力してくれないなら、あなたも殺す。あなたの大事な友人も、その妹も。メイドも」

迷い無い言葉が、パチュリーを襲う。

殺されても構わない、そんな覚悟で出てきたはずが、恐ろしいと感じるのは、皆の名前を出されたからか。

「でも」

パチュリーの物思いを遮るように、幽々子は続けた。

「あなたが私の味方になるなら、私はあなたを殺さない。あなたの仲間も殺さない。」

もしも仲間に出会えた時に、あなたが私と別れたいと、そう言うならば、その時は私から離れる十分な時間をあげる。約束するわ。

私は約束を破るつもりは無い。それを信じるかどうかはあなた次第。

……さあ、私の言うことはこれで全部。私は決めた。次はあなたが決める番」

しばし、沈黙。

「……分かったわ」

沈黙の後、パチュリーはぽつりとつぶやいた。

思えば、紅魔館の皆の名前を幽々子が口にした時に、二人の静かな戦いは既に決着していたのかもしれない。

パチュリーの手の、太陽の光が、一度だけ強く輝いて、徐々に弱まって消えていく。

それを見送っている幽々子に、パチュリーは顔を向けた。

「でも、一つだけ聞かせて」

「なあに？」

「あなたは、どうして閻魔に会いたいの？ 会って一体どうするつもり？」

その質問に、幽々子は初めて答えに詰まった。

「それは、言えない」

そして浮かんだ微笑みは、どうしても寂しげだった。

「それに、言ってもきくと、今のあなたは信じない」

「そう」

パチュリーも、それ以上追求しない。興味なさそうに目を逸らし、話は終わりと歩き出す。

そのパチュリーにわずかばかり感謝するような目を向けて、それから幽々子は頭上を見上げた。

大きな木の立派な枝が、今は黒く見える葉を、花を、二人の上に差しかけていた。

「そのあなたも、良かったらどう？」

気楽な口調で、幽々子がその木に声をかける。
その声に反応してがさりと葉から音がした。木が揺れる。

「！」

驚いたように立ち止まり、振り返ったパチュリーを見て、幽々子はおかしそうに笑った。

まるでその言葉を予想していたように、あっさりとそれは現れた。
最初に覗いたのは、逆さまの顔。

それからいったん引っ込むと、それはほんと飛び出して地面に降り立った。

大きな黒い翼。太ももが覗く短いスカート。その手に握ったペンと手帳。

「あやや、ばれてましたか。私もまだまだですねえ」

ぺろりと舌を出していたずらっぽく微笑んだのは、鴉天狗の新聞記者、射命丸文だった。

「……ずっと、見てたの？」

驚きと不機嫌さが混じった声音でつぶやくパチュリーとは対照的に、幽々子は面白そうに微笑んだまもう一度声をかけた。

「あなたも良ければ、私たちと一緒に来ない？」

何を考えているのか分からない亡霊少女のその言葉に、天狗も特に悩みもせずに、あっけらかんとうなずいた。

「いいですよ、面白そうですし。

紅魔館と白玉楼、幻想郷の大勢力が今、共闘する！……いい記事が書けそうです」

「捏造しないで。紅魔館が手を組むわけじゃないわ。あくまで私個人の話。それに、別に共闘するとも言っていないわよ」

むっとした顔でパチュリーが反論する。そんなパチュリーにかまいもせず、文は手帳を開いた。

「ま、細かいことはいいいじゃないですか」

さらさらと何事か書きつけてはたと手帳を閉じると、文はぱちりと片目を閉じた。

「こういうことは、話題性が大事ですから」

呆れたようなため息は、すぐに虚空に消えていった。

「それじゃあ、決まりね。行きましょうか」

締めくくると幽々子は言うど、すっ、とその手を差し出した。パチュリーは、しかしその手を取らず、幽々子にぶいと背中を向ける。肩をすくめて笑う幽々子を、文が面白そうに観察していた。

夜が更けていく。

）
）
）
）
）

【西行寺 幽々子】

現在地：F - 3

前登場話：《22・1日目 夜》

次登場話：《》

【パチュリー・ノーレッジ】

現在地：F - 3

前登場話：《22・1日目 夜》

次登場話：《》

【射命丸 文】

現在地：F - 3

前登場話：《7・天狗が見ていた》

次登場話：《》

26・神の守るもの、式神の守るもの（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残酷な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

26・神の守るもの、式神の守るもの

小さなため息が諏訪子の口から漏れて、夜空に漂っていきました。見つめる先にあったのは、膝を抱えてうずくまった橙の姿。さつきから顔を伏せたまま、ぴくりとも動きません。

八雲紫の死を告げる声がうらさびしい鐘の音に乗って聞こえてきてから、橙はずっとあの調子です。

それまで元気いっぱいには跳ね回っていたとは思えないぐらい、今の橙は元気がありませんでした。

——無理ないよね。

何度か話しかけようとしてそのたびに思い直し、諏訪子はそっと橙から離れました。

帽子のてっぺんについた二つの目玉も、それがいいとうなずいたようです。諏訪子は帽子をちょっと乱暴に引き下げて、目深にかぶりしました。

・
・
・

どれぐらいの時間が経ったでしょうか。

昼でも夜でもない時間はあつという間に過ぎ去って、今はもう月明かりが静かに二人を照らすだけになっていました。

「静かだね……」

さらさらいうせせらぎに耳を澄ませながら、川岸に座った諏訪子は一人ぼつりとつぶやきました。

「虫の音も、鳥の鳴き声も、聞こえない」

目は、ずっと橙だけを見ています。

ずいぶん前から動かない橙。その橙を見つめる諏訪子もまた、少し前から身動き一つしていません。

そのまま、またいくらかの時間が過ぎて。

突然、静寂を破るように、はっと橙が顔を上げました。

「！」

諏訪子も、目を見張ります。

「藍さま……」

どこかぼんやりとした様子でつぶやく橙の言葉が、諏訪子にはしっかりと聞こえました。

「そうだ！ 藍さまは？」

すぐにその声に、焦ったような色がつきます。

諏訪子は立ち上がって、橙のところに走り出しました。

「藍さまを見つけないと。こんなところで、時間をムダにしちゃ……」

「橙」

諏訪子の呼びかけにも、落ち着きを取り戻す様子はありません。

「諏訪子！ 急いで行こう！ 早く藍さまを、藍さまを……」

「橙、落ち着いて」

「落ち着けないよ！ 早く見つけなきゃ、藍さままで……」

「居場所も分らないのに？」

「それでも、こんなところでじっとしてるよりは」

「死んじゃうよ」

橙の言葉を遮るように投げかけられた言葉は、諏訪子らしくない冷たいものでした。

「っ……！」

「もし紫さんを殺した相手に出会ったら、橙はきつと殺される」

きつぱりと言い切ると、諏訪子はまっすぐに橙を見つめて、お願いするような口調で続けました。

「だから、落ち着いて？ 慎重に行動……」

「うるさい……」

やけっぱちのような叫びに、諏訪子は口をつぐみました。

橙の虹彩は細く細くすばまって、体はぶるぶると震えていました。そしてそんな大声を出してしまった自分に驚いたようにしょんぼり

とうつぶくと、もう一度、ぽつりとつぶやきました。

「……うるさい」

一瞬苦しい表情になった後、橙はぶんぶんと首を振りしました。

「とにかく！ 行きたくないならいいよ。諏訪子になんて、もう頼まない。私一人で行くもん」

きっぱり言うと、橙は諏訪子の横をすり抜けて歩いて行こうとします。

だから、橙は見えていませんでした。

諏訪子が傷ついたような顔でうなだれたのを。その細い肩がふるふると震えていたのを。そして、体の横にだらりと伸びた腕の先で、きゅっと拳が握られたのを。

「橙」

もう話はおしまいと大股で歩き出していた橙は、そのたった一言に足を止められました。

「何！」

そして、呼び止められていらだったのか、それとも急いでいるはずなのに足を止めてしまった自分が許せなかったのか、怒ったように振り返りました。

諏訪子が、橙の目の前にいました。

そして、何も言わず、ぎゅっと橙を抱きしめました。

「え？」

突然のことに驚いて、目を白黒させる橙。けれど、それも少しの間だけで、すぐにばたばたと暴れ始めました。

「何、何するの！ 離してよ！ 私、急いでる……」

「橙、聞いて」

けれど、思いのほか強い諏訪子の口調に、びくりとしてその動きは止まります。

抱きしめる腕にぎゅっと力を込めて、諏訪子はぽつりとつぶやきました。

「あなたのご主人様は、きっと私が見つけてみせる」

静かな、けれど強い意思の込もった言葉。

「紫さんを殺した奴も、私が必ず探し出してみせる」

頬が触れ合いました。橙は、そこに一筋の濡れた感触を見つけました。

「あ……」

「だから、慌てないで。落ち着いて、一緒に行こう？」

静かな口調は優しい言葉に響きをかえ、やがて諏訪子の腕から力

が抜けました。

そのままそつと上げた手が、橙の髪をゆつくりと撫でます。それは優しく、心地よい感触で。

「諏訪、子……」

言いかけた言葉に途中で詰まり、橙は黙り込みました。

ひつ、と、しゃくり上げる音がして、諏訪子の服がきゅっと握られました。

そのまましばらく経って、橙はそつと諏訪子の体を離しました。諏訪子の頬にはもう涙はなく、穏やかな眼差しと浅いえくぼが橙を見つめていました。

「諏訪子」

「うん」

涙で潤んだ瞳で諏訪子を見つめ、橙はきつぱりと告げました。

「……余計なお世話。自分で何とかできるもん」

「え……？」

諏訪子の戸惑ったような声。

それを聞いていたずらっぽく笑うと、橙は手の甲でぐいと目元を拭って続けました。

「でも、気持ち嬉しい。ありがと、諏訪子。」

……あと、心配かけてごめんなさい」

後半は恥ずかしかったのか、小さい声になっていました。
ほっとしたような諏訪子のため息に、頭の上で二つの目玉が苦笑
したようでした。

・
・
・

月の下、二人は歩き続けました。

静かな夜。風が草原を駆け抜けていく音と、強く弱く流れてくる
川のせせらぎだけが、絶え間なく聞こえています。

「……みんな、どうしてるのかな」

静けさが逆に気になったのか、辺りをうかがうようにして橙がつ
ぶやきました。

「夜が得意なのばかりじゃないからね。休んでる人が多いんじゃないかな？」

そんな橙の様子には気づかないふりをして、諏訪子は、だからこ
そ、と続けます。

「誰かに見つからずに移動するには、夜の方が安全なのかもね」

安心させるような口調でしたが、それは橙を安心させるためのも
のだったのか、それとも諏訪子自身を安心させるためのものだった
のか。

落ち着いたとはいえ、橙はやはり平常心ではいられないようだし

た。

本当ならなるべく動かない方が、二人にとっては安全だったはず
です。けれど、どうしてもじっとしてられない様子の橙を見かね
て、諏訪子はしぶしぶ動くことにしたのでした。

もつとも、諏訪子も橙も夜目は利く方なので、活動にはあまり支
障はありません。橙が落ち着いた今、夜のうちに行動範囲を広げて、
誰か——できれば藍——を探すのは、悪い選択ではないように思え
ました。

突然。

そんな物思いを破るように、聞き慣れない音が届きました。何か
が破裂するような音です。

びくり、と二人の体が揺れました。

「この音……！」

諏訪子の顔に緊張が走り、橙の耳がピクピクと動きました。
ぱっと目をやった先、遠くの森の向こうから、白い光が漏れてい
ました。

二人して、顔を見合わせます。

「ね、諏訪子。これって……」

「誰かが戦ってる、ね」

橙の言葉の後を、諏訪子がうなずいて受けました。

「止めなきゃ！」

その答えを予想していたように、橙が飛び上がり、走り出そうとしました。

「待って！」

けれど、諏訪子の押し殺した声が橙を静止します。苛立ったように、橙は早口で反論しました。

「どうして！ 早く行かないと、また誰かが、こ、殺される、かもしれないんだよ！」

言いながら振り返った橙は、予想もしていなかった厳しい表情に出会って、口をつぐみました。

「橙、焦らないで」

静かな口調。けれど、その目は真剣そのものでした。

「な、何……？」

「いい？ 橙。誰かと誰かが戦ってる。それってつまり、殺そうとしてる人がいるってことだよ。」

その人は強いかもしれない。あなたや、私よりも」

「だからって……」

何を考えているのか、橙は苦しそうに、悲しそうに、胸を押さえ反論しました。

「だからって、嫌だよ！ 誰かが殺されるかもしれないのに、見て

見ぬふりするなんて！」

「だったら、私が見に行く」

「え？」

諏訪子の言葉に、橙がきょとんと目を丸くします。

「本当は、離れたくないけど。

橙、あなたはここで隠れていて。絶対に出てこないで」

言いながら、諏訪子は手近な岩陰を指差しました。窪地になっているそこは隠れ場所にもってこいで、誰かが潜んでいてもちよつと見ただけでは分からないでしょう。

「私が見てくる。何とかできそうなら止めるよ。でも、止められないかもしれない」

「そんな……」

「私には、すべての人を守る力はないんだよ」

悲しげに声をひそめて、諏訪子は言いました。

「そんなの」

嫌だ、と言おうとした橙の言葉は、諏訪子の有無を言わさない口調に遮られました。

「お願い」

「……分かった」

少しの沈黙の後、橙はしぶしぶうなずきました。
うん、と笑う諏訪子。

「ありがとう。すぐに戻るから、動かないでね」

諏訪子はそう言うと、体を低くして音が聞こえた方に走って行きました。

・
・
・

諏訪子を見送って、橙は言葉通り岩陰に隠れました。

自分の荒い息の音が、不安な気持ちを強めます。一つ深呼吸をして気分を落ち着けようとしたが、さっき聞こえて来た音と光が頭の中をぐるぐる回って、結局橙はおとなしくしていられませんでした。

岩陰からひよいと身を覗かせ、諏訪子が走っていった方向に目をやります。

「一体、誰が……？」

その声に答える者はありません。ただ時間だけが過ぎていきます。いつからかは分かりませんが、あの時の音も光も、もう聞こえませんし、見えませんでした。

「藍さま、無事かな……」

気を紛らわせるために藍のことを考えると、なおいっそう不安が

募ります。

「諏訪子、助けられないかも、って言ってた」

一人になると余計なことまで考えてしまい、橙の頭を離れません。

「……もし、あそこにいるのが藍さまだったら」

——藍さままで、死んじゃったら。

ぞくり、と橙の背中を寒気が走りました。

何の根拠も無いのに、不安はどんどん大きくなっていきます。

藍のことを考えてどうしようかと迷い、諏訪子との約束を思い出していやいやダメだと思い直し。

それを何回か繰り返して、橙はとうとう一歩外に出ました。

「少しだけなら、いいよね……？」

一歩踏み出してしまうと、もう止まりません。

橙は、諏訪子の行った先に向かい、走り出しました。

耳元を駆け抜けるひんやりとした夜の風に目を細め、橙は一目散に走り続けます。

何の危険とも出会わないまま、橙は静かな夜を駆けました。

森がだんだん大きくなります。前方に小さく見えるだけだった森は、いつの間にか橙を取り囲むように左手にも広がっていました。

「もう少し……」

前の森に入るまであと少しというところに来たとき。

がさり、と、橙の左手の森が揺れました。

「！」

驚いて急ブレーキをかけますが、勢いが乗った体は簡単には止まりません。

「誰！」

ざりざりと地面を滑りながら、橙は鋭い言葉を投げつけました。

「……」

返事はありません。

その代わりに森が揺れて、人影がゆっくりと姿を現しました。

橙が息を呑む音が、静かな夜に大きく響きました。

）
）
）
）

【橙】

現在地：C - 4

前登場話：《19・猫と蛙と》

次登場話：《》

【洩矢 諏訪子】

現在地：C - 5

前登場話：《19・猫と蛙と》
次登場話：《》

27・紅の夜(1) (前書き)

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残酷な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

27・紅の夜（1）

夜の闇に、二つの影が浮かんでいる。

満月に少しだけ足りない明るい月に照らされて、影はその輪郭を静かに輝かせていた。

「あなた、ただの人間じゃないですね」

片方が口を開く。

「そういうお前こそ。何者だ？」

「聞いているのは私です。答えなさい、あなたは何者です」

その答えにぴしやりと叩きつけるように、最初の影は言葉を放った。

威圧的で自信に満ちたその口調の裏では、しかし、細かに拳が震え、瞳が揺れている。

その態度にむっとした様子で、それでも素直にもう一つの影は口を開いた。

「ずいぶんと喧嘩腰な奴だな。……まあいいか。私は藤原妹紅。蓬莱人だ」

「蓬莱人……？」

「ああ。さ、私は答えたぞ。こんどはお前の番。
お前は何者だ？ お前こそ、ただの人間じゃないんだろう？」

わずかばかりぶつきらばうに、藤原妹紅と名乗った方の影が揺れた。

それに答えて、凜とした声で、少女は告げる。

「私は、東風谷早苗。この世に奇跡をもたらす、現人神の末裔です」

そして、震える拳を押し隠すように、ぴしりと胸を張った。

「へえ、現人神か。初めて見たよ」

感心したように妹紅が腕を組む。

そんな妹紅に、早苗は少し自信を取り戻したのか、指を突きつけて言った。

「蓬莱人がどういうものか私には分かりませんが、私と私の神に従うのなら、この場は見逃しましょう」

「ん？」

いぶかしげな様子の妹紅。それに気づいたのか気づかないのか、早苗は続ける。

「皆が疑心暗鬼になり、互いに敵対している今、信じられるのは神だけです。神に従い、従わないものを倒す。そうしなければ、生き残ることなどできません」

「……」

「そもそも、こんな状況になったのは、幻想郷の皆の信仰心が足りないからです。今からでも遅くはありません。八坂さまと諏訪子様

の下に急ぎ、悪を滅していただくのです！」

「……」

徐々に調子が上がってきたのか、滔々としゃべり続ける早苗を胡乱げに眺めやり、妹紅はため息をついた。わざとらしく立ったその大きな音に、早苗はびくりと震えて黙り込む。それを目にして妹紅はもう一つため息をつき、静かに口を開いた。

「まるで、見てきたみたいない言い方だな」

その声は静かで、けれど怒りをまとうて熱を持っていた。

「誰が、疑心暗鬼になって、敵対してるだって？ 誰のせいでこうなったって？」

妹紅が口を開くたび、二人の間の空気が渦を巻く。

「あんたの言ってることは正しいかもしれない。けど、あたしはそんな考え方は嫌いだ。確かに、何人かはもう死んでる。……あたしだって、一人殺されているのを見つけた」

妹紅がぐつと唇を噛むと、空気が更に熱を帯びた。

「だけど！」

吐き出すようなその言葉と同時に、妹紅の背中から炎が上がる。赤い、赤い炎。天高く輝く月よりもはるかに明るい炎の翼が、その背から生えていた。

呆然と見開かれた早苗の瞳を、燃え盛る炎が焼く。

早苗の目に映りこんだ炎を見て、妹紅は我に返ったようにふと力を抜いた。

途端に炎は消えて、夜が静かな暗さを取り戻す。

「皆が皆、誰かを殺そうとしてるわけじゃない」

空気の暖かさだけが炎の名残を感じさせる中、妹紅は静かに言葉を続ける。

「信仰心が足りないからこんなことになったわけじゃない。あんただって、この場に巻き込まれてる」

その空気も、木の葉と共に舞い上がって星空に消えていく。

「誰かに頼るのも一つの方法だけど、それだけが方法じゃない」

そして、妹紅は顔を上げた。早苗は一步も動かない。

「悪いけど、あんたと一緒には行けない。元気でな。あんたの神様に会ったらよろしく言っておいてくれ」

そう言って、妹紅はくると背を向けた。炎の翼の無いその背中
は、ひどく無防備だった。

「……そうですか」

ぶるぶると震えながら、早苗はつぶやいた。その声が届いたのかどうか、妹紅は足を止めず、早苗から遠ざかっていく。

かつと、早苗が目を見開いた。

「止まれっ！」

早苗が一喝すると、ごう、と音を立てて一陣の風が吹き抜けた。

先ほど妹紅の炎で生まれた風とは真逆の、冷たい風。

その風が周りの木々をあたり、その枝葉を逆立てる。背中に吹き付ける冷たい風に妹紅は歩みを止め、振り返った。

「何だ？ もう話すことはないぞ」

「私には、あります」

にこりと笑ったその顔に浮かぶのは、怒りと使命感。

「あなたは、今ここで倒さなければなりません。八坂様と諏訪子様に従わない者は、いずれ災いをもたらします」

「何だつて？」

「悪く思わないでください。今のような状況では、統一した意思の下で行動するのが最善。異なった考えを持つ者ほど危険な存在はありません」

きつと引き結んだ唇に迷いはなく、その瞳は先ほどの風よりもずっと冷たく鋭かった。

すつ、と息を吸い、早苗は澄んだ声で歌うように唱えた。

「『客星の明るい夜』」

その両手と頭上に、ぼう、と明かりが灯った。斜め上に差し伸べられた早苗の両手の上にそれぞれ一つ、早苗の頭上に、ひときわ大きく輝く光が一つ。合計三つの光の球が。

それは頭上の月を何倍にも明るくしたように白く、まぶしく、円かった。思わず息を呑む妹紅の視線の先で、早苗の両手の上の光がゆっくりと横に移動を始め、早苗から離れていった。

妹紅の頬を、一筋の汗が伝う。

「おいおい、何の冗談だ？ こいつは……」

「冗談ではありません」

ぴしりと言い放つ早苗の顔に、迷いは無い。

「さあ、しっかりとその目に刻みなさい」

横に移動していた二つの光が、早苗から十歩ほどのところでぴたりとその動きを止めた。

「奇跡を起こす、神の力を！」

それは、星が生まれるとしたらちょうどこんな様子だろうと思わせるものだった。

二つの光球がひときわまばゆく輝く。とつさに目の前にかざした右手の隙間から、光が線条に姿を変えて飛んでくるのを、妹紅は見た。

「！――」

瞬き一つほどの間に、光の線条が妹紅に迫った。

すべてを貫こうと牙を剥いて飛来する光線を、妹紅はとっさに体を捻り、地面に体を倒してかわす。

無理な動きに、ケガした胸がぎしりと痛み、妹紅の口から思わずうめき声が漏れた。

「何だ、あいつ……」

毒づきながら立ち上がった妹紅の背後で、じゅつ、と何かが焦げるような音がした。

恐る恐る振り返った視線の先では、太い木の幹に、握り拳よりも少し小さい程度の穴が開いていていた。穴の周りは黒く炭化しているが、向こう側は見通せない。貫通してはいないらしい。

「どうですか？ この力。私だからこそ使いこなせる力です。あなたがどれだけ頑丈な蓬萊人だろうと、これをまともに受ければただではすみませんよ」

早苗の得意気な笑いに、妹紅は唇を噛む。

「……蓬萊人つてのは、頑丈な人間のことじゃないんだけどな」

聞こえないくらいの声でつぶやくと、まるでそれに答えるように光球がまばゆく光り、先ほどと同じ光の線条が飛んできた。

「ち」

舌打ちしながら、妹紅は身を翻して木の裏に隠れる。木の幹に押し当てた背中越しに、じゅ、と先ほどと同じ音が響き、少し遅れて

焦げ臭い臭いとわずかばかりの熱が漂ってきた。

妹紅はもう一つ舌打ちをして考えた。威力は大きそうだ。受ければ死にはしないとしても、戦いを続けることは無理だろう。そうなたら、どっちみち死は決まったようなものだ。動きが直線的なのがせめてもの救いだ、一撃たりとも受けてはいけないというのは厳しい。

「先手必勝、か」

どのみち、この木の裏でいつまでも早苗の攻撃を防ぎ続けられるわけではない。

それに、夜中にこんな明るい光の球が浮いていれば、あまり戦いが長引くと誰かがやってくるかもしれない。その中には好戦的な者がいないとも限らないわけで……。

「いや」

そこまで考えて、妹紅は息を呑んだ。

「もしかして、それが狙いか」

八坂様と、諏訪子様。

先ほどの言葉を思い返す。

この明るい光は、二人に自分の居場所を知らせるためのものでは。

「逃げるが勝ちだな」

さすがに三対一などになってしまつては、勝てる気がしない。

だが。

「逃がしませんよ」

まるでそのつぶやきを聞いていたかのように、早苗の声がした。同時に、妹紅の背後の明るさが更に増す。

「！」

不審に思つて横目を使つた妹紅は、目を疑つた。

三つの光の球のうちの一つ、早苗の頭上に浮かんでいた球そのものが、妹紅めがけて飛んできていた。

「おいおい」

戸惑いながら、妹紅は木の陰から飛び出して駆け出した。

動きは光の線条に比べて遅い。

が、その光の球が触れた瞬間、木の幹の半分がごっそりと削られていた。木が砕ける小気味良い音と、物の焦げる鼻をつく臭いが漂ってくる。

更に、木をえぐつただけでは飽き足らず、光の球は軌道を変えて、逃げた妹紅を追ってきた。

「待ってくれよ……」

立ち止まるわけにもいかず、妹紅は走り続けた。

その間にも、早苗の左右の光の球は線条を吐き出し続けている。

「つつ……」

光の線が妹紅の腕をかすめて飛んでいく。

後ろから追ってくる光の球と、左右から飛んでくる光の線条。ゆつくりとしかし正確に妹紅を追尾する光球と、正確さには欠けるものの速度と数でもって妹紅を貫こうとする光の刃。両方に同時に意識を配るのはやはり難しい。

「それはどこまでもあなたを追いかけます。諦めなさい」

早苗の声に、妹紅はもう一度舌打ちをした。その間にも光は妹紅を狙って飛び交っている。

「これが、私の奇跡の力。信仰なき者を打ち倒す、現人神の力です」

その声を聞いて。

「……何か、腹立つな」

逃げていた妹紅は、立ち止まった。

きつと引き結んだ唇。炎のように赤く輝く瞳。光に照らされて白く輝く髪。

光の球が向かってくる。更に、それを追いかけるように光の線条が両脇から迫ってくる。

どれもその軌道上に、妹紅を捉えている。

「私をあんまりなめるなよ」

にやりと不敵に笑った妹紅を飲み込もうと、三つの光が襲い来る。

「終わりです」

早苗の言葉に、三つの光が一点に収束する。

妹紅を中心に目を覆うようなまばゆい光が炸裂して、夜を白く染めた。

そしてその一瞬前、妹紅は懷から何かを取り出して、何事か叫んでいた。

「……終わりましたね」

片手を目の前にかざしながらつぶやいた早苗の視線の先で、光が弱まっていく。徐々に視界がはつきりしてくるが、確認もせずに早苗はくるりと踵を返した。

「待て」

その早苗の背中に、声がかけられた。

「今度は、あたしがお前を呼び止める番だ」

「！」

思いもしなかった声に、早苗はあわてて振り返る。

その視線の先に、妹紅が立っていた。
無傷。

妹紅を取り囲むように、数え切れないほどの青と紫の二色の札が宙を舞っていた。

あるものは時計回りに、あるものは反時計回りに。
数え切れないほどの札が繭のように妹紅を包み、彼女を守る盾に

なっていた。

「そんな、あなた一体、何を……」

うめくような早苗の声に、妹紅は札を見回して言った。

「『滅罪寺院傷』って言つてな」

妹紅が腕を振ると、途端に札が力を失って地面に落ちた。そのまま、地面に溶けるようにかき消えていく。

「簡単に言えば、結界だ」

妹紅にも、その周りの大地や木々にも、傷一つ無い。

無傷の妹紅のその背には、赤く輝く炎の翼。

につ、と妹紅が笑った。

「次は、こっちからいくぞ」

そして、ぎゅっと右手を握る。

胸のケガが痛んだのかわずかに顔をしかめて、妹紅は駆け出した。一直線に、早苗の下へと。

「む、迎え撃ちなさいっ！」

動揺した声で、早苗が叫ぶ。それに応えて、早苗の左右の光の球から光の線条が放たれた。

「まだそんなものであたしと戦うつもりか？」

妹紅はうつすらと笑うと、握った右手を開いた。

「『火の鳥』——」

「ごう、と背中^がの翼^がが勢いを強める。早苗とはまた違った明るさ。赤く燃え上がる、命のまぶしさ。

炎の翼は妹紅の右手に集まって、大きな鳥の形をとった。神々しく気高い、三羽の火の鳥の形を。

「——『鳳翼天翔』！」

「あつ……」

それで、終わりだった。

何かを言いかけた早苗の下に、三羽の鳥は炎の尾を引いて真っ直ぐに飛んだ。

二羽は早苗の左右に飛んで、妹紅を狙う光線もろとも光の球を飲み込んだ。

一羽は、呆然と立ち尽くす早苗のところへ。そのまま赤い口を開けて早苗を飲み込もうとするが、その直前にふと首を傾げ、気が変わったかのように真上に進路を変更して、暗い星空に上っていった。火の鳥が撒く炎のしぶきが、妹紅と早苗に降り注ぐ。早苗の髪がわずかに焦げて、あまり心地よくはない香りが漂った。

とん、と早苗が両膝をつく音が、妙に大きく響いた。

「あ、あ、あ……」

うめき声は言葉にならず、その目だけが怯えたように妹紅を見ていた。

そこに、妹紅が歩み寄る。

妹紅は、胸を押さえながら早苗のところに歩み寄り、言った。

「お前。信仰がどうこう言ってたな」

返事は無い。

「お前の言ってたことは一つの考え方だとは思う。私だって、皆で団結すべきだと思ってる。だけど……」

言つて、妹紅はちらりと後ろを振り返った。そこには、光の線条から妹紅を守り、光の球にその身を削られた木が、物悲しげに立っていた。

「神様つてのはどこにでもいるものなんだろう？ それなのにあんなことしたお前を、あたしはまだ信用できないよ」

静かな口調。いつの間にか、妹紅の目からは先ほどの爛々とした光は消えていた。

優しく、諭すように妹紅は言葉を紡ぐ。

「神様を頼るのだって、悪くないさ。けど、細部をおろそかにしちゃ、お前の言う信仰とやらも十分な力を出せないんじゃないか？」

「う、うっ……」

ほう、とため息をついて、妹紅は早苗を見下ろした。

「そら、行きな。誰かが来る前に。危険な奴が来る前に」

その声にびくりと震えた早苗は、目に涙を浮かべて一瞬の間妹紅を見つめると、立ち上がって何歩か後ずさり、後ろを向いて一目散に逃げていった。

「やれやれ」

かぶりを振って妹紅は空を見上げた。先ほどのまぶしい光も今はなく、静かな夜が戻っていた。

「私もお人よしかね」

そう、ため息と一緒につぶやいた瞬間。

「ほんと、お人よしね」

くすくす、くすくすと。

妹紅の見上げた先。妹紅より空に近い場所から、楽しそうに笑う声がした。

くくくくく

【藤原 妹紅】

現在地：C - 5

前登場話：《15・不死鳥》

次登場話：《》

【東風谷 早苗】

現在地：C - 5

前登場話：《22・1日目 夜》

次登場話：《》

28・厄神の見たもの（前書き）

この小説は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残酷な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

28・厄神の見たもの

「——だから、きちんと説明しないとイケないのよ」

「……うん、分かった」

何も遮るものの無い夜の草原を、二つの人影が進んでいく。

「本当に分かったのかしら」

不安げに言ったのは、緑色の長い髪をした少女、鍵山雛。頭のとっぺんと顎の下で、揃いのレースの赤いリボンが髪を留めている。

「……ほんとだよ」

不満げに言ったのは、刀と盾を背負った少女、犬走栞。水しぶきを思わせる白い髪が滝を流れ落ちるように揺れて、そこから狼を思わせる耳が覗いている。

二人は今、一夜の宿を求めて歩き回っていた。歩き回りながら、雛は栞にお説教をしていた。

いわく、栞はもつと言葉で相手とコミュニケーションをとるべきである。

いわく、栞は簡単に人を信用しすぎるきらいがある。簡単に人についていたりしてはいけない。

そのすべてに、栞は素直にうなずいていた。

基本的に、栞は聞き分けがいい。それはいいのだが、聞き分けが良すぎてあまり手応えが無い。表情にもほとんど変化が無く、返事も一言で済む。あまり張り合いがないせいでお説教はすぐに終わっ

てしまった。まるで椛には感情なんてないみたいだ、と、雛は少しだけ思ってしまった。

まだ、ちょうど良い寝場所は見つからない。

「……別に私は、野宿でも平気だよ」

雛の困った内心を読んだように、椛が声を上げた。雛が目をやると、ぱた、ぱた、と、赤いスカートから伸びたふさふさの尻尾が空を叩いている。

「野宿って言っても、こんな見晴らしのいいところで休むわけにもいけないでしょう？ どこか屋根のあるところ、あとできるだけ人目につかないところを探さない」と

「……そっか」

「椛って、本当にマイペースね」

呆れたような雛の声。

「……ごめん」

ほとんど表情は変わらないまま、耳が少し垂れて尻尾が元氣無さげにぱたりと揺れる。

「前言撤回」

こっそりと、雛はつぶやいた。感情が無いみたい、などと考えてしまった自分を少しだけ恥ずかしく思う。表情や声の調子は確かに

平坦だが、尻尾と耳は驚くほどはつきりと椀の心を伝えてくれる。
実はものすごく分かりやすい子なのかもしれない、と、雛は苦笑が
二割ほど混じった笑みを浮かべた。ごまかすように、ごほん一つ
咳払い。

「うっん、いいことよ。それに知らなかったなら仕方ないわ。これ
から覚えていけばいい」

「……ありがとう」

そう答えると、椀はそつと雛に寄り添った。雛が見やると、困っ
たように顔をうつむけてしまう。

きゅつと、雛の手が握られた。

「……」

言葉で答える代わりに、雛もぎゅつとその手を握り返す。冷たい
小さな手。その先で、つやのある柔らかな尻尾が、ぱたぱたと揺れ
ていた。

・
・
・

椀と雛から少しだけ離れた森の中で、魔理沙は頭の後ろで手を組
んで、のんびりと歩いていた。その視線の先では、氷精チルノが先
に立って歩みを進めている。葉の少ない木々ばかりなおかげで、森
の中なのに頭上の月が良く見える。月の光に照らされて、チルノの
背中から生えた氷の六枚羽がきらきらと輝いた。

「ねえ、魔理沙」

「なんだよ」

そのチルノが急に振り返ったので、魔理沙は少しばかり驚きながら答えた。チルノはいたずらっぽく魔理沙を流し見て、幼い声で面白そうに聞き募る。

「魔理沙って、強い？」

「ああ、強いぜ」

「どのくらい？」

「そうだなあ……」

考え考え見上げた目が、木々の間を縫って夜空に浮かぶ月を捉えた。にやりと笑って、魔理沙はつばつきの黒いとんがり帽子を目深に引き下げた。

「あの月だって撃ち落とせるくらい、かな」

「ほんと！？」

目を輝かせながらチルノが駆け寄ってくる。魔理沙の胸あたりまでしかない小さな体全体からわくわくした雰囲気漂わせているので、次に出てくる言葉が簡単に想像できる。

「ね、やってみせてよ」

「……」

まったく予想通りで、魔理沙は思わず笑ってしまった。

「何さ」

「いや、何でもない」

慌てて真面目な顔を作り直して答える魔理沙を、チルノは腕を組みながら横目で見やった。

「まああたいにはかなわないだろうけどさ。でもあたい親分だし。子分の力はちゃんと見とかないといけないし」

ちらちらと魔理沙の方を見ているチルノの目は、その柔らかそうな髪よりも少しだけ深い青で、期待に埋め尽くされていた。

「まあ待て」

見上げるチルノに胸の前で両手を振って、魔理沙は厳かな顔を作った。

・
・
・

更に少しの間歩き続けて、やがて薙と栴は森の中に分け入った。森と言ってもそれほど深くはなく、月の光も差し込んできている。木と木の間を歩いていくと、そのうちに二人はそびえ立つ崖に行き当たった。

「あら、あそこ」

雛の指差した先に、ほら穴がぽっかりと口を開けていた。

「……入ってみる？」

「そうね。でも、ちょっと待って」

先に行こうとした椀を手で制して、雛は注意深く辺りを見渡した。何かがいるような気配は無い。

慎重に身を屈めて、雛は一人ほら穴の入口まで歩みを進めた。一歩踏み込むと中は真っ暗で、月明かりもまるで届かない。

「特に畏なんかもない、よね」

つぶやいて、雛は椀を振り返り手招きした。ずっと雛の動きを目で追っていた椀が、待ってましたとばかりに駆けってくる。

微笑ましさに思わず頬を緩めてしまい、雛はあわてて顔を引き締めた。

「とりあえず、ここで休ませてもらいましょうか。多分、大丈夫だとは思っただけど……」

「……見てくる、中」

雛の言葉に、椀が雛を追い越してほら穴の中に入っていこうとする。

「あ、待ちなさい、椀！」

制止しようと、雛が椀に向かって手を伸ばした瞬間。

——ひゅ。

風を斬る音がして、何かが背後から雛の頬をかすめた。

「——！」

とつさに半回転して避けるが、雛の頬に一筋、鋭い一直線の傷が走った。

「な、何！？」

振り向いて思わず声を出し、しまったと慌てて口をふさぐ。

暗いほら穴の中に、雛の声がこだました。

何？なに？に。い……。

ほら穴は深く広がったらしい。雛の声はそこかしこで反響し、不気味な不協和音を奏でて消えていった。

「——！」

そのこだまが消えきるよりもわずかに前に、また銀光が閃いた。ぱつと身を伏せてそれを避ける。

目で追おうとするが、光は既に通り過ぎていて捉えることができない。

「もう、何か分からなきゃ戦いようもないわ」

伏せたまま歯を食いしばって、雛は身構えた。暗闇に目を凝らし、飛んできたものの正体を見極めようとする。

また、一閃。

「来た！」

ぎりぎりまで粘ってから横に転がって逃げる、つもりだったか。

しゃん。

涼しげな音がして、また別の光が走った。

続いて、金属同士がぶつかる甲高い音。

きいん、と澄んだ音を響かせて、雛の前に立ったのは。

「
椀」

「……雛に、手を出さないで」

雛の前に立ちふさがった椀は、ほら穴の奥に向かっていつもと変わらない静かな口調で呼びかけた。けれどその耳はぺたりと後ろに寝ており、ふさふさの尻尾は膨らんで逆立っている。

その手には抜き放たれた刀が握られており、暗いほら穴の中ではんやりと不思議に輝いていた。

「椀、ありがとう」

思わず口をついて出てくる言葉に、椀は心なしか赤くなった。

「……ううん、それより」

横目でちらりと雛を見て、椀は視線を前方に戻した。

「分かってる」

あの一瞬、椛が刀で弾いてくれたおかげで確かに見えた。

「あなたも私の仲間かしら？」

それが逃げ込んだ岩陰に声をかけながら、雛は椛をかばうように一歩前に出た。椛が不安げに見つめてくるが、安心させるように微笑んで、意識を岩陰に戻す。

「あなた、付喪神か何か？」

あの一瞬確かに見えた、それは。

雛が言った途端、岩陰から先ほどの銀光がまたやってきた。

だが、正体も、現れる場所も分かっていたいれば、対処するのは難しくない。

雛はくるりと身を翻して避け、むんずとそれを捕まえた。

「……人形？」

椛が困ったような声を上げる。

あの一瞬見えたもの。今雛が手につかんでいるそれは、小さな人形だった。その手に握りしめているのは、同じく小さいながらも凝った彫刻が施された両刃の剣。先ほどの銀光は、この剣だったらしい。

「……！……！」

人形は雛に首根っこをつかまれたまま、じたばた、じたばたと動いていたが、雛がひょいと剣を取り上げると、観念したようにうな

だれてしまう。

「あなた、一体何なの？ どうして私たちを狙ったの？」

雛がそう人形に問いかけた時。

「出て行って」

ほら穴の奥から、声がした。

「あなたたちが誰か知らないけど、そこからそれ以上入ってこないで。もし入って来るのなら、私の軍隊すべてであなたたちを倒すわよ」

冷たい声。

「……大丈夫？」

椀が寄ってきて、雛の頬にそっと手を触れた。にじむ血に、眉をひそめる。椀の手についた自分の血を見た途端、雛の頬が痛み出した。

「ええ、大丈夫。それよりあっち、どうしようか？」

雛の言葉に、椀は興味無さそうに目を細めた。

「……別に、行かなくていい。ここでも夜は過ごせるよ」

「うん。そうね。そうなんだけど……」

口ごもる雛に、椀は怪訝そうな目を向けた。その顔を見て、雛は決意したようにうなずく。

「分かったわ。椀はここにいて」

「……雛？」

「ちょっと行ってくる」

そう言つて、雛はほら穴の奥に目を向けた。月明かりも届かず、どこまで続いているのかも分からない。けれど、少なくとも先ほどの声はそこまで深くから聞こえてきたものではなかった。

歩き出そうとしたとき、雛の腕が引つ張られる。振り返ると、椀が腕をつかんでいた。

「……ダメ」

珍しく、椀がきっぱりと言った。赤みがかったその目はいつもどおり何を考えているのか分からないくらいぼうつとしていたが、それでも椀が心配していることは分かった。耳が、警戒するように後ろに寝ている。

「ごめんね、椀」

そつとその頭を撫でると、椀の耳がくすぐったそうにぴくぴくと震え、目が細まった。

「でも、私は厄神だから」

きっぱりとした口調に、椀の耳が垂れる。

「あの人は問答無用だったけど、多分本気で私たちを殺すつもりは無かったわ。ただ威嚇しただけ」

「……それが、どうしたの？」

「多分だけど、あの人は本当は争いたくないんだと思う。だから、あんなふうに警告してきた。あの人がどれくらいの力を持っているのか知らないけど、少なくとも、どんどん殺して回ろう、って感じはしないわ。あんなふうに警告したら、自分の存在がばれるだけでいいことないもの」

「……でも、雛にケガさせた。それに、来たら容赦しないって」

「大丈夫。だから、私一人で行くの。戦うつもりはないって、そう言うために。……お願い、椀」

しばらくの間、沈黙が落ちる。

「……分かった」

その後、しゅしゅと言った風に椀はうなずいた。

「……雛を、信じる」

そう言って、その場で膝を抱えてしゃがみこむ。

「……気をつけてね」

「ええ。大丈夫、すぐに戻るわ」

そうして、雖は一人、闇の中に足を踏み入れた。

・
・
・

真面目な顔で、魔理沙は言う。

「あのな。月を撃ち落としちゃったら、みんな困ると思わないか？」

その言葉に、チルノは首を捻った。眉間にシワが寄っている。

「何で？」

「何でって……そりゃ、夜が暗くなるし、兎も住む場所がなくなるしな」

「うーん。そうなのかなあ」

いささか釈然としない、といったふうに、チルノはつぶやいた。

「じゃ、月じゃなくていいや」

「……そういうつもりで言ったんじゃないんだが」

ぱりぱりと頬をかきながら、魔理沙はつぶやいた。あんまり目立つことはしたくないなあと考えて、すぐに、ま、いいか、と考え直す。

そのまま黒い魔女服に右手を突っ込んで、魔理沙は八角形をしたそれを取り出した。

「何それ」

「こいつは八卦炉って言ってな。まあ、私の頼れる相棒かな。これがあれば『マスタースパーク』っていう、すごい威力の魔法が使えるんだ。けど、魔法力を全部使い切っちゃうから、今回は使わない」

そう言って、魔理沙は八卦炉を持っていない左手をぐっと伸ばした。ぴたりと岩山に狙いをつけて、手を開く。

掌に、魔法の力が集まるのが分かった。

「……ま、岩の二・三枚を打ち抜くくらいかな」

興味津々といった風に、後ろからチルノが覗き込んでいた。

・
・
・

「止まりなさい」

いくらか歩かないうちに響いた声に、雛はぴたりと足を止めた。素直に言葉に従い、両手を上に上げてみせる。

「こんばんは」

できるだけ優しく聞こえるように、ゆっくりと雛は声を出した。

「私は警告したわよね。入ってくるな、って」

「ええ」

「どうして来たの？ 死にたい？」

通路は雛の少し先で右に折れている。声の主はその先にいるらしい。姿が見えないまま、声だけが聞こえてくる。

その声は敵意をむき出しにしている、言葉も乱暴だった。

「だって、あなたが」

けれど、どこかしら怯えているような震えを、その中にはらんでいた。

「大切にしてる人形を、私たちのところに置きっぱなしにしたんだもの」

「……」

言って、雛は上げていた右手を懐に入れる。闇の中で、見えない誰かが緊張して身構えるのが分かった。

「さ。ご主人様のところへ、帰って」

取り出されたのは、異国の雰囲気を漂わせる一体の人形だった。

先ほど雛と椀を襲ったものだ。

金色の真っ直ぐな長髪に結ばれた、赤い大きなリボン。幼さを感じさせるデフォルメされた顔。胸にかけられたエプロン。

「生地は古いみたいだけど、ずいぶん丁寧に扱ってるみたいだったから」

ところどころほつれては縫い直した跡が見える。

「……」

「ほら」

そう言つて雛が手を離すと、人形は一人で空中に浮き、そのままふわふわとほら穴の奥に入つていった。

「……」

沈黙。

「……上海」

しばしの沈黙のあと、押し殺したような声が響いた。

「ごめんね、上海」

ため息をついてやれやれと肩をすくめ、雛は無言で来た道を振り返った。

「待つて！」

歩き出そうとした雛に、奥の誰かが大きな声をあげた。

「あなた、どうして？」

「あら？ それにはもう答えたわよ？」

何でも無さそうに雛は言う。

「答えになってない！　どうして、こんなことをしたの？　あなたたちを襲った私に」

「そうね。それは……」

もったいをつけて、雛はいたずらっぽく答えた。

「私が厄神だから、かな？」

「厄神？」

「そう。ひらたく言えば、不幸をもらって幸せをプレゼントする。それが私、鍵山雛」

「鍵山、雛」

「あなたの厄も預かれたみたいで、私も嬉しいわ。それじゃあ、あなたも気をつけてね」

それから、と雛は続けた。

「大事な友達をあんなことに使うのは、できたらやめておいた方がいいと思うわよ」

「……」

奥からは、返事はない。特に期待していたわけではないのか、雛もそのまま歩き出した。

「待つて！」

今度はためらったのか、歩き出して少ししてから曲がり角の奥から声がした。

「なあに？」

暗闇から、声の主が姿を現した。

ややプラチナブロンドに近い金髪に、それを留める赤いカチューシャ。服の色と同じ水色の瞳が、ためらいがちに伏せられる。戸惑ったような声で、現れた少女は言った。

「……あ、ありがとう」

その声に雛は振り向いて、にっこりと笑った。

「どういたしまして」

「私はアリス。もし何か困ったことがあったら言って。力になるわ」

「ありがとう。それじゃあ、もし私があの子を残して死んだ時には、私の代わりにあの子を守ってあげてくれるかしら」

突拍子もない申し出に、アリスが体を硬くする。それに対して雛はにっこりと笑う。

「冗談よ？　ただ、ちょっと危なっかしいから、あの子」

「あの子って、一緒にいた子のこと？」

「ええ。……もし良ければ、あなたも一緒に来る？」

「ううん。私はここにいるわ。会いたい人がいるの」

「そう。……それじゃ、気をつけてね」

「あなたも」

二人の目が、一瞬だけ合った。

「……気をつけて」

後ろから声がして雛が振り向くと、いつのまにか桜がやってきていた。

「……雛、遅い」

表情をあまり変えないまま言う桜に、雛とアリスが同時に笑った。

・
・
・

チルノが息を呑むのが、気配で分かった。

目を閉じたまま、魔理沙は精神を集中する。

魔法力が、縋り合わされた糸のように、突き出した手の先で絡み合っていく。

まだまだ威力は上げられたが、早々に打ち止めにして魔理沙は目を開いた。

「……はあっ！」

我知らず気合いの声が上がる。

掌に集まった魔力が一気に弾け、どんどんと加速する。

それはちょうどレーザーのように尾を引き、真っ直ぐに魔理沙の狙った崖にぶつかった。

せいぜい岩を少しばかり貫く程度の威力の、見た目ばかり派手な魔法。

魔理沙の視線の先で、魔法のレーザーが岩に炸裂した。

・
・
・

二人と一人の横の岩壁に、ぴしりという音が響いた。

「……？」

椀の耳がピンと立つ。

「伏せて！」

多分、雛とアリス、二人が叫んだのがほぼ同時だった。

そしてその一瞬後、横の岩壁を貫いて光の奔流が炸裂し、一瞬で三人の視界を覆い尽くした。

・
・
・

「いや、悪い悪い」

「あんだ、全っ然反省してないでしょ」

まるで悪びれない様子の魔理沙に、アリスが苦々しそうに文句を言った。泥だらけ、ほこりまみれで、せっかくの洗練された都会風の装いが台無しになっている。

「や、でもさ。私だってあんなところにほら穴があるって知らなかったから。ましてやそこにアリスがいるなんてな」

頭をかきながらつぶやく魔理沙は、反省した素振りもなく楽しげに笑っている。

その腕をつかんで、アリスは怒ったようにぐいっと引き寄せた。

「な、何だよ」

うろたえたように身を引く魔理沙の手から、アリスは八卦炉を奪い取った。

「これは私が預かるわ。まったく、あんたが八卦炉持ったらろくなことになるんだから」

「え」

ぶつぶつと言うアリスは、なぜか少しだけ楽しそうだった。

「わ、ひょっとして、またあたいに子分ができた？」

「誰よあんた」

「あゝ、話すと長くなる、ってほどでもないんだが」

わいわいきゃあきゃあと騒ぐ三人を見て、雛はそっと柵の手を引っ張った。

「……ん」

こくりとうなずいて、椀もついてくる。

少しだけ歩いたところで、椀がつぶやいた。

「……良かったね。待ってた人に、会えて」

「ええ」

嬉しそうに、雛も答える。

多分、あの三人にはもう厄神の力はいらない。

だから、二人は歩き出した。夜の闇の中へ、もう一度。

）
）
）
）
）

【鍵山 雛】

現在地：C - 2

前登場話：《1 2 ・ある一つの出会いと別れ》

次登場話：《3 4 ・その背負うもの》

【犬走 椀】

現在地：C - 2

前登場話：《1 2 ・ある一つの出会いと別れ》

次登場話：《3 4 ・その背負うもの》

【霧雨 魔理沙】

現在地：C - 2

前登場話：《11・おやぶんこぶん》

次登場話：《33・魔理沙とアリスとチルノと》

【チルノ】

現在地：C - 2

前登場話：《11・おやぶんこぶん》

次登場話：《33・魔理沙とアリスとチルノと》

【アリス・マーガトロイド】

現在地：C - 2

前登場話：《22・1日目 夜》

次登場話：《33・魔理沙とアリスとチルノと》

29・星空（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

夜。視界を埋め尽くす暗い空には雲ひとつ無い。どこから数えればいいのか判断に迷うくらいにたくさんの星が、一面不規則に散らばっている。

「あっちに固まっていっぱい光ってるのは盃。あっちのいちばん明るい星が『天の中心』で、そのすぐ脇にあるのが桜だよ」

視界の端ですいと腕が伸びて、そのうちのいくつかを指差した。

正直言っでどこを指差しているのか良く分からなかったが、言われた辺りをぼんやりと見てみる。話によれば星の集まりが水をたたえた盃なり桜の花びらなりに見える、らしい。

しばらくの間目を凝らしてから諦めて、頭の後ろで手を組むにとりはそのまま倒れ込むように後ろに寝転がった。組んだ手に触れる草の感触と地面の柔らかさが心地よい。

「ずいぶん詳しいんだな」

顔だけ向けてそう言つと、膝を抱えて座っていた大妖精が、少し恥ずかしそうに微笑んだ。

「好きなの。こうやって星空を眺めるの」

そのままにとりを追いかけるように、大妖精もとさりと地面に寝転がった。背中が痛まないかにとりはひやひやしたが、扱いにはさすがに慣れているのか、大妖精は羽を下敷きにしても平気な顔をしている。

そのまま、大妖精は片手を顔の上に持ってきて、目を細めた。

「どうしてるかなあ……。チルノちゃん」

「チルノちゃんと一緒に、見てたのか」

「そう。ふふ、チルノちゃんったら、何度教えてあげても次の日になつたら忘れてるんだもん。夜空を見上げるたび、毎晩一から教え直しになるんだよ」

弾むような口調で、大妖精は本当に楽しそうに話す。そんな様子が、にとりには少しうらやましかった。それが原因だったのだろうか。

「……こんな風に星空を見上げるのなんて、何年ぶりだろ」

我知らず、にとりの口からつぶやきが漏れた。色が違うとか大きさが違うとかは良く分からないけれど、ぼんやりと見上げているだけでもきれいだ。

大妖精はにとりの言葉が聞こえたのか聞こえなかったのか、黙ったまま空を見上げたままにいる。

「私、機械が好きでさ」

「うん、知ってるよ。初めて会った時から不思議な機械を使ってたもんね」

ふふ、とおかしそうに笑って、大妖精がにとりの方を向いた。

「光学迷彩スーツのこと？ あれは本当は機械とはちょっと違ってさ……」

と、思わず詳しく話してしまいそうになって、にとりは慌てて自重した。

「……っと。じゃなくて、あたしって機械いじりが生きがいだからさ。気に入った機械に出会ったり、面白い発明を思いついたりしたら、もう一日中工房に閉じこもっちゃうんだ。朝も昼も夜も関係無し。で、一回こもっちゃうと、一週間ぐらい平気で出てこない」

つついしやべってしまふ。大妖精は口を挟まずに話を聞いてくれていた。顔がこちらを向いているのが分かる。けれど、にとりは夜の空に目を向けたまま、ぽつぽつと口が開くまましゃべり続けた。

「そんな生活に慣れてくるとき、それが当たり前になっちゃうんだ。工房こそ私の世界。外の世界はあくまでイレギュラー、ってね」

にとりがいったん言葉をきると、二人の間に沈黙が下りた。どこからか、水の流れる音が聞こえてくる。

「外もいいもんだね。こんなに綺麗な世界があるなんて、長いこと忘れてたよ。機械は機械で綺麗だけどね」

「うん、良かった。そう言ってもらえると、何だか私が嬉しくなっちゃうよ」

顔を横に倒すと、にこにこ笑っている大妖精と目が合った。その時初めて、にとりは自分が誰かと一緒に過ごすのもずいぶん久しぶりだったことに気づいた。

「……こういうのも、悪くないね」

「ふふ」

大妖精とチルノは、いつもこうして地面に寝っ転がって、二人して満天の星空を眺めていたんだろうか。

微笑ましいような、少しだけうらやましいような気持ちにとらわれて。

「……ねえ」

「なあに？」

つい、言葉が口について出てしまった。

「チルノちゃんって、どんな子なんだ？」

どうして突然そんな話になったのか分からなかったのだろう。大妖精は、ぱちくりと目を瞬いた。

けれど、すぐに嬉しそうな顔に戻る。

「そうだね。えっと、長くなっても大丈夫？」

「いいよ。時間はたっぷりあるんだから。それこそ一晩中でも」

「良かった。じゃあね、私とチルノちゃんが初めて会った時のことを話すね——」

遠くから聞こえてくる川のせせらぎを伴奏に、大妖精の声が夜空に響く。にとりの相槌が、それにアクセントをつけた。

世界に二人だけしかないような広い夜が、いつ終わるともなく
しんしんと降り積もり、更けていく。

）
）
）
）
）

【大妖精】

現在地：E - 4

前登場話：《17・一人、二人》

次登場話：《》

【河城 にとり】

現在地：E - 4

前登場話：《17・一人、二人》

次登場話：《》

30・ハート・ハート（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

30・ハート・ハート

森の中。月明かりも入ってこない闇の道。淀んだ空気。足音は柔らかな地面に吸収されて、ほとんど聞こえない。

——なぜ、あいつは、あんな行動をとったんだろうか。

先ほどから頭に張り付いて離れない疑問。

——なぜ、あいつは、最期に貫かれる瞬間、満足したように笑っていたんだろうか。

考えても、答えが出ない疑問。

——なぜ、あいつは、最期の力でもってあたしを攻撃しなかったのだろうか。

心に刺さって抜けない疑問。

「……バカバカしい」

無理やりに忘れようと、こめかみに指を当てる。

あたしは勝ったのだ。

誰に？ 八雲紫に。

本当に？ 本当だ。

「最後まで生き残った者が勝者。あたしは生き、あいつは死んだ」

分かりきったことをつぶやいても、心は晴れない。

それは多分、一対一では敗れていたということも、紫の不可解な行動もあつてのことだろう。

「気に入らないね」

歩きながら、唇を噛む。

最期の瞬間の紫の笑みが、頭に張り付いて離れない。胡散臭い妖怪だとは思っていたが、どうにもつかみどころが無い。まるで、こちらが負けたような気分になる。

「いや」

首を振って考え直した。

——あたしは、あいつに負けたんだ。

ほんの数秒前と真逆のことを、同じように大真面目に考える。

認めたくは無い。だが、それが事実だ。それを認めなければ前には進めない。

あたしは負けた。

紫が死に、あたしが生きている。

それは別に、あたしが紫に勝ったことを意味しない。ただ永琳が手を出した結果だ。

あたしは負けたんだ。

気づかぬうちに唇を噛み締めていたことに気づき、力を緩める。

じわり、と、口の中に血の味が広がった。

いいだろう、認めてやる。あたしは負けた。じゃあ、それからど

うするか。

「まずはやっぱり、あいつか」

声に出すと、自分が何をすべきかがはっきりと分かる。

紫を殺したのは誰か？ あたしと紫を戦わせ、最後に一番良いところを持って行ったのは誰か。

永琳だ。

あたしよりも紫が恐ろしいと断言し、実際、紫は始末してもあたしには目もくれなかった。

永琳を倒すのは、良い考えのように思える。

なぜなら、あいつは、少なくとも紫の裏をかいいたのだから。

ある部分において、紫を上回っているのかもしれない。

ならば、その永琳を自分が倒せば、自分が最強だということを知らしめることができるかもしれない。

だが、それだけでは満足できない自分も、同時に存在する。

「……なぜ、あいつは」

考えが堂々巡りに戻る。

あたしは信仰を受ける存在だ。信仰に対して報いることはあるが、それもまた信仰を得るためのもの。手段と目的を混同させるつもりはない。

そして、それでも今までは問題なかった。あたしを信仰してくれる者たちにとっても、あたしが死んでしまったならば、それは結局自らに跳ね返るのだから。

けれど、紫は。

あいつは、迷い無く自分の身を投げて、弱い者たちを守った。
なぜそんなことをしたのか。

知りたい。

自分が認めた相手の、自分には理解のできない行動。

あの八雲紫が、何の考えもなくあんな行動をとるとは思えない。
その理由を、突きとめたい。

どうすれば、と考えた時、方法は一つしか思い浮かばなかった。

「後追いみたいで癪だけど」

きつと、一人でいるだけだと、紫の心は分からない。

仲間が必要だ。

誰でもいい。早苗や諏訪子であれば話が早いが。

そこまで考えたところで、森の切れ間から漏れ聞こえてくる足音が耳に入った。

「……誰だ」

低い声で呼びかける。

ちょうどいい。

がさりと音を立てて、森と草原の境界を踏み越えた。

【八坂 神奈子】

現在地：C - 4

前登場話：《20・三ツ八の戦い》

次登場話：《》

〃
〃
〃

八雲藍は走っていた。明るい月の下、ただ一人体を屈めて。

「なぜ、だろう」

体には、力が満ちている。

どこまでも駆けていける。

紫を殺した相手の首を、腕の一振りではねられそうな気がする。

けれどそれは、おかしい。

藍は紫の武神。紫が死んでしまつては、藍も遅かれ早かれ消滅することになる。

力だつて、失われることこそあれ、今のようにみなぎるようなこととはないはずだ。

「どういうことだ」

藍に考えつくのは一つだけだつた。

「紫様は、死んでいない……？」

声に出してつぶやいてから、藍はぶんぶんとかぶりを振つた。

そんなはずは無い。信じたくは無いが、この世界のどこにも、自分の主人の力を感じることはできない。

あの閻魔が言っていたことに偽りがあるとも思えない。

何か、からくりがあるのか。それとも、自分の思い違いなのか。

あるいは、紫に何かの意図があつたのか。

分からないまま、藍は、言い知れぬ悪寒に掻き立てられて走り続けた。

【八雲 藍】

現在地：E - 3

前登場話：《22・1日目 夜》

次登場話：《》

〵
〵
〵

八意永琳は、神奈子と別れてから少しの間歩き、それから手近な木の上に身を移した。

「今日はこの辺りで休もうかしら」

つぶやきが、森の中にこだました。疲れたような声。

「上手くいったわ。思いがけないくらい、上手く」

自分に言い聞かせるようなその声は、紫や神奈子に対して発したもののよりも弱々しい。

「さて、あとは……」

目を閉じて考えるのは一体何のことか。

「吸血鬼に亡霊に神、それに、巫女」

手で胸を押さえて、永琳は独り言をつぶやいた。

「望むところだわ。全員、殺してあげる」

その目が細く開いて、満月に少しだけ足りない月を見る。

「――姫のためなら、それぐらい何でもない」

その耳が、誰かの足音を捉えた。

「……」

気だるげな様子で、永琳は身を起こした。
その様子とは裏腹に、目は鋭く輝いていた。

【八意 永琳】

現在地：A - 4

前登場話：《20・三ツ八の戦い》

次登場話：《》

くくく

「てゐ？」

こえをかけると、思ったとおりちかくのくさむらからてゐが出てきた。

「あ、てゐだ」

につこりわらいかけると、てゐもわらいかえしてくれる。
てゐはわたしが何してもこたえてくれる。だからわたしは、てゐ

が大すきだ。

「ほらてゐ、のんびりしてないで、行こうよ」

そう言つてわたしはあるき出そうとしたけど、てゐはそんなわたしのまえにさつと立った。

「危ないよ、フラン。気をつけて」

「……へ？」

どういうこと？

「ほら、変な奴がいてフランがケガしたら良くないから、私が先に行くよ。フランは、後からついてきて」

「あ……うん」

わたしのことをしんぱいしてくれたんだ。でも、そうだよ。いつだって、てゐはそうなもの。

おねえさまとは、ちがうもの。ちゃんと、わたしの、ことを、見て、くれるんだもの。

「友だちでしょ？」

てゐがそう言つて、にっこりわらつ。ともだち。

なんだろう。あつたかい。

「ありがと、てゐ」

おれいを言う。

でも、なんだろう？ もっとあったかいことばが、あったようなもっとわたしがほしいことばが、あったような。

「ううん。こっちこそ、さっきはレミリアの手先の虫から助けてくれてありがとう」

てゐが言った。

なんだろう。

心が、ざらつとした。

ああ、またおねえさまだ。って。
にくい。

ききたくないなまえ。わたしをとじこめて。てゐをおそって。
どうしてそんなひどいことをするの？ ねえ。どうして？

わたしだけだったらまだいい。でも、てゐにまで手を出すなんてゆるせない。ゆるせない。ゆるせない。

ゆるせない。

「ん？ あいつらは……」

てゐのこえがした。

そのこえにわたしはかおを上げた。いつのまにか、うつむいてしまってたみたい。

「……だれ？」

てゐにきいてみる。だれだろう？

だれでもいいか。ころすんだし。

でも、おねえさまだけは。おねえさまとそのなかまだけは。

どうしようかな。

どうやって、ころしてあげようかな。

ぜったいににがさないから。まってるね。

ふふ。

【フランドール・スカーレット】

現在地：B - 1

前登場話：《18・なくしもの》

次登場話：《32・遺志を継ぐもの》

【因幡 てゐ】

現在地：B - 1

前登場話：《18・なくしもの》

次登場話：《》

3 1・紅の夜(2) (前書き)

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

31・紅の夜(2)

「ほんと、お人よしね」

くすくす、くすくすと。

妹紅の見上げた先。妹紅より空に近い場所から、楽しそうに笑う声がした。

「誰だ」

穏やかだった顔を引き締めて、妹紅はまた一つ舌打ちする。
さつきから舌打ちしてばかりだ、と、妹紅はどうでもいいことを
妙に冷静に考えていた。

「面白い人間。あなたみたいなのは嫌いじゃないわ」

くすくす、くすくす。

「……出てこい」

妹紅はつぶやくと同時に、手を掲げた。

「隠れるつもりなんて無いわよ」

透き通るような声。その声は頭上から響いてくるせいもあり、
ながら天使のようだった。

だが、夜の闇から下りてきたのは天使ではなく。

「……吸血鬼？」

現れたそいつの背に広がっていたのは、光り輝く柔らかな羽毛ではなく、光を吸い尽くしたような漆黒の羽だった。

「そ」

ぱた、ぱた、ぱた、と蝙蝠のような羽を動かして、あどけない少女の姿をした吸血鬼は地面に降り立った。

人間でいえば十歳やそこら。ひらひらとした薄桃色のドレスで体を包み、そこからきゃしゃな手足が伸びている。

羽が最後に一度ぱさりとはためき、吸血鬼の足が地面に触れた。巻き起こった風に、ふわふわとした海色の髪がなびいてぶくりとした頬を撫でる。吸血鬼の少女がくすぐったそうに笑うと、頬にきゅつとえくぼができた。

「ね、あなた」

えくぼを刻んだ笑顔のままで、少女は楽しそうに妹紅に話しかけた。

「何だ」

「ずつつと見てたけど、どうして殺さなかったの？」

「私は殺人鬼じゃないからな」

妹紅はぎゅっと胸をつかみながら、一歩後ずさって答えた。その額にはうつすらと汗が浮いている。

「あんたは、何しに来た？」

「誰か殺そうかな、と思って」

小さな唇に人差し指を当てて、少女は笑う。唇の間からちろりと覗いた舌は真っ赤で、奇妙に妖艶だった。

「……ったく」

一瞬顔をこわばらせた妹紅は、しかし、次の瞬間にはその表情を消して、わしわしと頭をかいた。

「次から次へと、何でこんなのはっかりやってくるんだ。幻想郷はこんな奴らしいのか」

「あなたには分からないかもしれないけどね、人間」

少女はうつとりと目を細めた。

「私らは妖怪。妖怪は人間を襲うのが仕事」

「さっきの奴は人間らしいが」

「……」

「あと、私はまあ確かに人間だけど、蓬莱人だよ」

「……」

二人の間に沈黙が降りる。

「と、とにかくっ」

少女の頬が、心なしか赤い。妹紅はため息をついた。

「で？ あんたは何者なんだ」

「私？」

少女の虹彩がすばまった。先ほどのうろたえはどこへやら、その瞳は冷たく落ち着いている。

「私はねえ……。ふふ」

嬉しそうに、とても嬉しそうに髪をかきあげて、少女は笑う。その手の奥から、嬉しそうな紅い目が妹紅を見つめていた。ぞくり、と、妹紅の背筋に寒気が走った。

「覚えておきなさい、私は、夜の王」

そう言って手をきゅっと握ると、小さな夜の王はぐいと体勢を低くした。

「——レミリア・スカーレット」

その言葉に合わせて、彼女は地面をとんと蹴った。さして力をこめたようにも見えなかったレミリアの体は、しかしまるで矢が風を切って飛ぶように、真っ直ぐ、そしてあっという間に妹紅に迫った。

「速いってば」

それを予想していたのか、妹紅は忌々しそうに吐き捨てると、後ろに跳んで距離をとりながら、握った手を開いた。

その手に炎が立ち上り、たちまち火の鳥の姿を形づくる。

レミリアは既に妹紅の目の前まで来ている。

「鳳翼天翔！」

妹紅が叫ぶ。

その声に応えるように火の鳥が大きく口を開けた。細く、高い音が、まるで鳴き声のように夜の闇を震わせる。

妹紅がその手を振るうと、火の鳥がレミリア目がけて飛び出した。至近距離からの攻撃。いかにレミリアの動きが素早くても、避けられる距離と速度ではない。

火の鳥の大きく開けた口が、レミリアを飲み込んだ。

直撃。

ごっごうと唸りながら、火の鳥は姿を崩し、朱い炎の塊に姿を変えた。吸血鬼の少女の姿をかき消すほどの勢いで、炎が天高く燃え盛る。

「……」

しかし、妹紅の表情は険しいまま。すぐに一步、二歩と退いて、再び手の中に炎を生み出した。

妹紅の見つめる視線の先で、朱い炎は更に勢いを強め、朱から赤へ、赤から紅へ、その色をかえていく。目を射すような、深い紅。

——鳳翼天翔の火の鳥は、こんな色ではない。

「紅い炎……」

妹紅はつぶやくと、きつとそれをにらみつけた。

「鳳翼天翔！」

もう一羽、火の鳥が生まれ出た。

その朱い火の鳥と妹紅の目の前で、紅い炎がひととき強く燃え上がり、そして弾けた。

あどけない少女が立っている。そして、その少女の周りには、静かで妖しい紅色の霧が立ち込めていた。

「行け」

妹紅はそれを目にして眉をひそめると、もう一度腕を振った。火の鳥が、待っていたと言わんばかりにレミリアめがけて飛び出していく。

「同じ技なんて、通用しないわよ」

自分に向かってくる火の鳥に向かってそつと目を細めると、レミリアは左の掌を火の鳥に向けた。迫り来る朱い火の鳥に触れ、レミリアの左手が炎に包まれる。その感触を一瞬楽しむように笑った後で、

「そら！」

レミリアは、握った右の拳を振り抜いた。

ぼん、ともった音がする。

形を持たないはずの火の鳥が、あっさりと引き裂かれた。
振動が空気を揺らし、鋭い音が火の鳥の断末魔のように響く。

「つて、あら？」

ぱんぱんと手をはたいてにつこりと笑ったレミリアは、視線の先に妹紅がいないことに気づいてげげんな顔をした。

「困だったのね」

つまらなさそうにつぶやいたレミリアの、背後の空高く。

「『不滅』……」

その背に炎の翼を広げて、妹紅は飛んでいた。

「……『フェニックスの尾』！」

炎の翼が震え、より一層大きく燃え上がる。

「撃て！」

妹紅の声に合わせて、炎の翼が揺れた。波打つようなその動きはまるで鳥の羽ばたきのようで、寄せては返すたび煌々と輝く炎の塊が火の粉のように撒き散らされていった。

振り落とされたいくつもの炎の塊は、まるで意思をもっているかのようにスピードを上げて地面に向かう。

目指す先は、地面に立ち、妹紅に背を向けたままのレミリア。

妹紅は見た。

レミリアが振り返るのを。

そして、振り返ったレミリアが楽しそうに笑っているのを。
きゅっと曲げられた唇から覗く八重歯が、炎を映してきらりと輝いた。

「『ブラド・ツエペシュの呪い』！」

嬉々として歌い上げたその声に、レミリアが身にまとった紅い霧が、その手に集まって凝り固まる。

そこに生まれたのは一振りのナイフ。霧の名残を血のように滴らせる、紅いナイフだった。

「楽しそうじゃない」

そういうと、レミリアは伸びをした。
ばさりと音を立てて背中の中が開く。

その羽ばたきで空に舞い上がりながら、レミリアは炎の塊に自分から向かっていった。

時間にすれば、妹紅が一つ息を呑む程度の間。
その短時間に、たった一振りのナイフで、レミリアは行く手をさえぎる炎をすべて切り裂き、妹紅の目の前に迫っていた。

「く」

舌打ちして、妹紅は身を翻す。

それに合わせて向きを変えた背中の中、炎の翼が、レミリアを撫でた。
予想していなかったのか、レミリアはまともに炎を浴びた。

「きゃっ」

妙に可愛らしい声に驚きながらも、ひとまず相手のナイフをかわせたことに安堵しながら、妹紅は距離をとる。

だが、その瞬間。

「あ、そっちは……」

ぎらり、と光るものがあつた。

「ぐっ……」

何なのか、とっさには分からなかった。

けれど、それは正確に妹紅の心臓を狙っていて、何とか身をよじった妹紅の腕を掠めてあさつての方向へ飛んでいった。

「っっ」

無理な動きをしたせいで胸に激しい痛みが走り、妹紅は思わずうめいて体勢を崩した。必死で踏みとどまり、先ほど飛んできたものの正体を見極めようとしたところで。

「ダメよ、注意を逸らしちゃ」

耳元で、声がした。

首筋が粟立つような気配に横目を使った妹紅は、すぐそばにナイフを構えたレミリアがいるのを見た。

やられる――。

覚悟を決めて目をつぶる。

……。

だが、その瞬間はいつまで経っても訪れない。

「……？」

恐る恐る妹紅が目を開くと、ちょうどレミリアが、手にしたナイフをぽいと投げ捨てるところだった。

レミリアの手から離れたナイフは、地面に着く前に紅い血のような雫になり、それから更に紅い霧になって消えていった。

「やめよ」

つまらなさそうにレミリアは言い、思いもしない言葉に妹紅は耳を疑った。

「どういうことだ？」

「全力じゃない奴とやっても面白くないわ」

「全力じゃない？」

妹紅はぼかんと口を開けた。

「そうよ。あなた、怪我してるんでしょう？」

ずっと妹紅の胸を示すレミリアの指は、炎を浴びたとは思えないくらい白くて滑らかだった。

「あ、いや、これは……」

胸の傷。ことあるごとにうずき、最初の出来事を思い出させてくれるケガ。妹紅がこの『ゲーム』で戦う原動力の一つとなっているケガ。

「確かあの時あの閻魔に逆らったのは、あなただけ。その時の傷でしょ？」

「まあ、そうだ」

「本調子じゃない相手を全力で叩き潰すなんて、誇り高き吸血鬼のすることじゃないわ」

「……そうか」

「あなたみたいに面白い人間は嫌いじゃない。人間の癖に不老不死を手に入れ、炎を操り、妖術まで使う……。本当、面白い」

「……」

「名前は？」

「ん？」

「ん、じゃなくて。名前。あなたの。覚えておいてあげるわ」

「……妹紅。妹に紅、で妹紅。藤原妹紅だ」

それを聞いた瞬間、レミリアの顔に何とも言えない不思議な表情

が浮かんだ。

「……」

けれどそれもわずかな時間のことです、すぐにレミリアはまた人懐っこそうな表情で笑った。

「いい名前じゃない」

「そいつはどうも」

「覚えとくわ、妹紅。傷が治ったらまたやりましょう。もちろん、その時は全力でね」

「いいのか？ 今、私を殺さなくて。後悔するかもしれないぞ」

「ふふ。威勢がいいわね。ますます気に入ったわ」

顔だけ振り返ってにやりと笑う様は、可憐でいてどこか妖艶で、小さくても夜の王としての風格をまとうていた。

「……なあ、私からも一つ聞いていいか」

さっきから気になっていたことを、妹紅は聞いてみることにした。

「何？」

「さっきのあれは、何なんだ？ 妙なところから飛んできたみたいだったが……」

完全に自分の予想していない方角から飛んできた銀光。強がりのようだが、あれさえなければ勝負はまだ分からなかったかもしれない、と妹紅は思っている。

「ああ、あれ」

レミリアは得意気に笑った。

「面白いでしょう？ サーヴァントフライヤーって呼んでるわ。私の使い魔みたいなものなんだけど、ある範囲に入った奴をさっきみたいに攻撃するの」

「なるほど、だからか」

納得したようにうなずく妹紅に、レミリアは決まり悪そうに頬をかいた。

「本当は、あなたとの遊びを別の奴に邪魔されないように設置してたんだけどね」

あんなの使って勝っても、何だかズルしたみたいじゃない、と、聞こえないようにつぶやく。

ふるふると頭を振って、レミリアはまじめな顔になった。そして、妹紅とは別の方向を向いて、大きな声を出した。

「まあ、そういうわけだから、あんたもそこから入ったら、死ぬわよ」

「！」

レミリアと妹紅の視線の先で、草むららがさりと大きく揺れる。

「……」

沈黙。

「出てきなさい」

レミリアの、命令するような口調。

「出てきたほうがいいぞ。もうばれてる」

妹紅の、諭すように優しい口調。

「……はい」

観念したのか、消え入りそうな声でそう言っておずおずと出てきたのは、いつだったかレミリアの眠るほら穴に入り込んできた蜂蜜色の髪の少女だった。

「……あなた」

呆れたようなレミリアの声。

「誰だ？」

それを聞いた妹紅の、怪訝そうな声。

「飛べもしないのに、わざわざ追いかけてきたの？」

「う、うん……」

妹紅を無視して、レミリアは話しかけた。

「言っただけよ、私はあなたを連れて行くつもりはない。さっさとほら穴に戻りなさい」

「おい」

「で、でも……」

「でもないわ。私がそうしるって言うてるんだから、従うの」

「なあ」

「う、うう……」

「だいたい、翼も無しに外を出歩いて、変なものに出くわしたらどうするつもりだったんだか」

「おい！」

突然の大声に、レミリアと蜂蜜色の髪の少女はびくり、と体を硬直させた。同時にレミリアの翼がぴんと伸びる。

「な、何よ」

妹紅を見やりながら、レミリアは決まり悪そうに言った。少しばかり顔が赤い。

「なあ、部外者の私がこんなことを言うのもどうかとは思っけど」
前置きして、妹紅は話し始めた。

「その子……名前、なんて言っただっけ？」

「リ、リリーホワイトです」

上ずった声で蜂蜜色の髪の少女が答える。安心させるように笑って、妹紅はレミリアに話しかけた。

「リリーがわざわざ追いかけてきたのに、お前さんはそれを無視するの？」

「そうよ。わざわざなんて知らないわ。その子が勝手にやったことなんだから」

そっぽを向いて、レミリアは答えた。つんと鼻先を上げ、興味無さそうに瞳を閉じる。

「そうか」

妹紅は大げさにため息をつく、何やら嫌な笑みを浮かべてレミリアを流し見た。

「ケガして自分を頼ってきたか弱い妖怪を見捨てて危険なのっばらに放置するのは、誇り高い吸血鬼のすることなのかな？」

「~~~~~!」

レミリアが、声にならない叫びをあげた。もう誰が見てもはつきり分かるぐらい、頬が赤くなっている。

「いや、高貴な吸血鬼さまは下々の者なんてどうだっていいんだなあ。何か、幻滅だ」

「……」

ぶるぶると小さな拳が震えている。少しばかり呼吸も荒い。二度、三度と深呼吸をし、何か言おうとしてやめ、ようやくレミリアは口を開いた。

「……分かったわよ」

「え？」

「連れてくわ。それでいいんでしょう？」

無然として言い捨てるレミリア。
途端、妹紅がにっこりと笑ってリリーを振り返った。

「だってさ。良かったな、リリー」

「う、うんっ」

ほけ、としていたリリーの顔が、理解できたのかぱあっと輝いた。

「あ、あと、私は一応、妖怪じゃなくて妖精で……」

と、訂正しようとしたリリーの言葉は、怒ったようなレミリアの

言葉にかき消された。

「ほらっ！ 行くわよ。こんなところさっさと離れないと。また何か変なの来るわ」

顔も見ずぶつきらばつに言い捨てて、レミリアはどすどすと大まかに歩き始める。が、途中で足を止めると、妹紅を振り向いて一言投げ捨てた。

「覚えときなさいよ！」

「あゝはいはい、早く行け」

妹紅はどうでも良さそうにあさつての方向を向き、手だけひらひらと二人に振った。

決して空を飛ばずに一定のスピードで歩いていく吸血鬼と、少し距離をあけながらも離れすぎないようについていく妖精と。

二人の影が見えなくなつてから、妹紅は、ぽつりとつぶやいた。

「紅い悪魔、レミリア・スカーレット、ね。
強いな。……早く慧音を見つけないとな」

くくく

「はあゝ、良かった」

二人の戦いが終わるのを見て、岩陰に隠れた諏訪子はため息をついた。

「殺す気は無さそうで安心したよ」

物音を聞きつけ、橙を置いてやってきた諏訪子が見たのは、戦っているレミリアと妹紅の姿だった。

途中から見ていただけだが、どうやら吸血鬼の方には殺すつもりはなく、ただ「遊んで」いただけらしい。

いざとなったら仲裁に入ろうとも思っていたのだが、結局その必要はなかったようだ。

知らぬ間に握っていた手を開くと、掌の汗が風になでられた。

「でも、吸血鬼もすごいけど、その吸血鬼と手負いの状態であそこまで戦える人間っていうのもすごいよね」

人間、という言葉で諏訪子はある一人の少女を思い出す。

「早苗だったら……無理だろうなあ」

そして、もう一度ため息をついた。

「そつえば、何となく早苗の気配がする気がするね」

それは何か根拠あつてのものではなく、単なる直感。早苗と長い時間を共に過ごしてきた諏訪子の勘だった。もし近くににいるのなら、探せば会えるかもしれない。

考え込む諏訪子の目の前で、二人と一人が別れて歩いていった。

「うーん」

少しの間悩んだが、吸血鬼の後をついていく妖精の少女の姿を見て、諏訪子は決めた。

「どっちにしても、橙を一人にしとくわけにはいかないよね」

・
・
・

そして。

戻った諏訪子が見たのは、血まみれで地面に倒れた橙だった。
待っていると言ったのに。

橙が倒れていたのは、二人が別れた場所からはずいぶん離れていた。どちらかというと、諏訪子がいた場所に近い。

「橙！」

駆け寄って、抱き起こす。

「どうして！ 隠れてなさいって言ったのに！」

橙の口からは、大量の血が流れている。

「橙！ しっかり、橙！」

叫ぶような諏訪子の声に橙のまぶたが震え、わずかに開いた。

「橙！」

「藍、さま……」

唸るような声。途切れ途切れの、何かが詰まったような声。
目は開いても、もはや諏訪子のことは見えていないようだった。

「か、な……」

ごぼ、と音がして、橙の唇からまた一筋、血がこぼれた。開いた目はすぐに閉じ、全身から力が抜ける。

「橙！」

ほんの少し前には、元気に動き回っていたはずなのに。ぎゅっと抱きしめた手には、まだぬくもりが伝わってくるのに。橙の目は、もう開かなかった。

「……！」

声もなく橙を抱きしめたまま、諏訪子はうずくまった。それからしばらく経って。

「これ、は、」

何かに気づいたかのように、諏訪子の目が大きく開いた。

「この、気配は」

うわ言のように、呆然と諏訪子はつぶやいた。

——橙の体にまといついているこの気配は、間違いない。

——自分が、この気配を間違えるはずがない。

——だってそれは。

「神奈子……」

ぎり、と唇を噛んで。

諏訪子は、立ち上がった。

）
）
）

【橙】 死亡

前登場話：《26・神の守るもの、式神の守るもの》

次登場話：《》

【レミリア・スカーレット】

現在地：C - 5

前登場話：《24・紅と白／銀と金》

次登場話：《》

【リリーホワイト】

現在地：C - 5

前登場話：《24・紅と白／銀と金》

次登場話：《》

【藤原 妹紅】

現在地：C - 5

前登場話：《27・紅の夜》

次登場話：《》

【洩矢 諏訪子】

現在地：C - 5

前登場話：《26・神の守るもの、式神の守るもの》

次登場話：《》

【残り 28人】

32・遺志を継ぐもの（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

32・遺志を継ぐもの

「大丈夫か、穰子」

人目につかないようになると、物影に隠れて走りながら、慧音は隣を走る穰子に声をかけた。

「は、はいっ。大丈夫、ですっ」

夜目にも真つ青な顔だが、それでも穰子は気丈に返事をする。

「そうか。疲れてるだろうけど、もう少し先まで行こう。とにかくできるだけ遠くまで」

「はいっ」

息を荒らげつつ穰子がうなずいた。それを確認してから、慧音も目の前の悪路に集中する。

岩陰に、森の中。人目につきにくい道を選んでどれぐらい走ってきただろう？ 慧音自身も疲労は既にピークに達していた。肉体的に疲れきっているだけではない。

「……」

慧音の脳裏に、鐘の音と共に響いた声が甦る。八雲紫の死を告げる、冷たい声が。

——絶対に、また会いましょうね。

別れ際に穰子が言った言葉に、紫は返事をしなかった。最初から自分が犠牲になって時間を稼ぐつもりだったのか。

自分たちが、紫を殺したのか。

ぶんぶんと頭を振って、慧音は余計なことを考えまいとした。相手は紫を倒せるほどの妖怪だ。もし出会ってしまったら自分たちなどひとたまりも無い。逃げなければ。できるだけ遠くへ。

知らず知らずのうちにスピードを上げてしまっていたことに気づき、慧音は隣に行く穰子にちらと目をやった。

思いのほか体力はあるらしい。弱音も吐かず黙々とついてきている。相変わらず真っ青な顔だが、それでも紫の死を聞いたときに比べるとかなりマシにはなっていた。

自らを犠牲にしてまで自分たちを助けてくれた紫の遺志をムダにしないためにも、自分たちは簡単に死ぬわけにはいかない。

紫の遺志と言えば。

「博麗霊夢に、レミリア・スカーレット、か」

目の前の危険からひとまず逃げ切れたとして、その後で自分たちに立ちふさがる新たな難題。

隣を走る穰子もよろよろと顔を上げて、慧音を見た。それで初めて、慧音は知らず知らずのうちに自分が声を出していたことに気がついた。

「見つかるでしょうか……？」

穰子が走り続けながら不安そうにつぶやいた。そのことに慧音は思わず感心する。

この子はきちんと紫との約束を果たすつもりでいる。巫女はとも

かく吸血鬼などとは関わるだけ危険だというのに。紫の言葉を無視するという考えは、穰子にはまるで無いようだった。

「……見つけなきゃな」

だから慧音もそれに応えた。博麗霊夢とレミリア・スカーレット。この二人を見つけたところでどうなるのかは分からないが、何もせずにいることはできない。

「約束、ですもんね」

慧音の心を読んだようなタイミングで穰子が口にする。こくりとうなずくその瞳には、強い意思の光が戻っていた。

頼もしく思いながら、それでも慧音は不安を拭い去ることができない。

「けど、穰子。できれば、探すのは博麗霊夢からにしよう。吸血鬼は、やはり恐ろしい」

震える体をぎゅっと押さえつけながら、慧音は囁いた。夜の王と異名をとる吸血鬼。ただでさえ高い身体能力を持つ上に、好戦的、残酷と、出会いたくない要素ばかりを集めたような存在だ。慧音と穰子の二人だけで何とかできるような相手ではない。

「そう、ですね。私もです」

私、神様なのに、と穰子は寂しげに笑った。
それきり、二人は黙って走り続けた。

「今日は、ここで休もう」

ふうとため息をついて慧音が指差したのは、森の中に姿を現した洞穴だった。外からはそこまで見つけやすい位置ではない。二人が見つけたのは単なる偶然だった。

周りに注意を払いながら、二人はそろそろと歩き出した。誰か先客がいるかもしれない。

ゆっくりと進んで、洞穴の前に二人は立った。周囲が森に囲まれているため、光はほとんど差し込まない。入口から覗いても、中は真っ暗で何も見えなかった。

「大丈夫、ですよ」

不安そうに穰子が言うのにうなずいて、慧音は一步踏み込んだ。暗い。目が慣れるまでにはもう少しかかりそうだ。

……誰か、いる？

わずかに空気が流れているような気がした。誰かが息をしているような。

警戒しながらも、穰子の手を引いてもう一步踏み込んだ時。

「こんばんは」

背後から、静かな声がした。

「！」

慧音は弾かれたように振り向いた。一呼吸遅れて穰子も体を返す。そこに立っていたのは。

「お前は……」

紅い、血のように紅い服を着た。色とりどりの宝石をぶら下げたような、奇妙な翼の。

「あなた、は」

金色の髪、吸血鬼だった。

「こんばんは」

少女は繰り返す。屈託の無いその笑顔は、無邪気で天使のよう。けど、だけど。

「ああ、こ、こんばんは」

絞り出すように挨拶を返すと、少女はにっこりと唇を曲げて笑った。上下の唇の間から、血のように赤いものが覗く。

慧音はぎゅっと穰子の手を握った。穰子が弱々しく握り返してくる。

まるで気配を感じなかった。あれだけ警戒しながらここまで来たのに。少女は洞穴の入口に立っている。

……逃げ道を、塞がれた。

内心で舌打ちをしながら、そんな様子は見せないように気をつける。

「君は……どうしてこんなところに？」

何か言わなければいけないと思ったが、焦る頭は上手く回転してくれない。結局、口から出たのはそんな意味の無い質問だった。

それに少女は答えず、小首を傾げる。その姿は可憐で弱々しい少女にしか見えないけれど。

彼女は間違いなく吸血鬼。紫が言っていたレミリア・スカーレットではなく確かその妹だが、どちらにせよ自分たちの手に負える相手ではない。敵に回したらレミリアを味方につけるのにも支障が出るし、そもそもこの場を生きてしのげる自信も無い。

「一人、なのか？」

考えながらも声をかける。何となく、しゃべり続けなければいけないような気がした。

「一人。わたし、一人」

一人、という言葉が引がかかったのか、少女はしきりに繰り返している。

「……一人？ ううん。わたし、一人じゃないよ。ふふ。一人じゃない」

顔を上げて笑いかける少女の様子は、それまでと変わらない。しかし、なぜか背筋が寒くなって、慧音は穰子の手を握ったまま一歩下がった。

「ねえ、にげないで」

それを目にとめ、少女も笑ったまま一步踏み出す。距離が、少し縮まった。

「ひ……」

穰子も、言い知れない恐ろしさを感じているらしい。慧音の隣で、空気を吸い込む音が大きく響いた。

「大丈夫」

安心させようと手に力をこめると、穰子がこちらを向いた。視線だけ動かして、穰子にうなずいてみせる。

大丈夫。

思いが通じたのか、穰子は蒼白な顔のままこくりとうなずいて、吸血鬼の少女に向き直った。

どうして。

紫も穰子も、赤の他人のことをこんなに簡単に信じるんだろう？ 大丈夫なはずが無い。吸血鬼に出会って無傷で済んだなんて話、聞いたことが無い。

そう思いながらも、それでも、あがくように会話を続けようとする。話し続けなければいけない。

「き、君に言うのも筋違いかも知れないけど、聞いてもいいか？」

「なあに？ いいよ。おはなし、しましょ」

くふふ、と笑って、少女はうなずいた。楽しそうな笑顔。おかしそうな笑顔。

慧音の考えを邪魔するかのように、頭の中で何かが警鐘を鳴らしていた。多分それは、目の前にいる少女が危険だと。前でも、後ろでもいい、とにかくこの場から離れないといけないと、そうわめいていた。

けれど、慧音は動かなかった。動けなかった。言わなければならぬ気がした。聞かなければいけないように思った。

多分、恐怖と、焦りと、疑念。それが、慧音の判断力を狂わせていた。

「君の姉さんの、レミリア・スカーレット。居場所を知らないか？」

レミリア・スカーレット。

慧音の口から出たのは、自分たちが探している吸血鬼の名前。博麗の巫女を見つけてから探そうと、二人で話していたのに。

れみりあ・すかーれっと。

「……おねえさま？　だよね？　どうして？　あなたが、おねえさまをさがすの？　おねえさまをさがして殺すつもり？」

慧音の口から出たその名前に、少女の表情が変わったように見えた。

少女は今も無邪気に笑っている。口調はむしろ今までよりも楽しそうにさえ聞こえる。

けれど、殺すつもり？　と聞いてなお屈託無く笑う少女に、慧音は底知れない恐怖を感じた。

つないだ穰子の手が震えている。いや、震えているのは自分の手かもしれない。分からない。

「いや」

喉が干上がるのを感じながら、慧音は言葉を絞り出した。

「殺したりなんかしない。彼女は、私たちにとって大切な存在なんだ」

「たいせつな、そんざい」

「ああ」

「それって、なに？」

小首を傾げる姿は、あどけない少女のもの。

「おねえちゃんたちは、おねえさまのみかた、ってこと？」

上目遣いでそう尋ねてきた少女の顔は笑っていたけれど、どこか泣きそうにも見えた。

「ああ」

慧音は力強くうなずいた。とにかく、彼女を敵に回すのはまずい。自分たちが味方だということを、まずは分かってもらわないと――。

「そう、なんだ」

慧音の思考を遮るように、紅い服の吸血鬼は言い落とした。
乾いた口調。感情が抜け去ったような声に、慧音は心臓をわしづかみにされるように感じた。

「おねえさまの、みかた、なんだ」

つぶやいた声には、親しさも、悲しそうな響きも無い。ただ機械のように平坦だった。

顔を伏せてつぶやく少女の、その表情はうかがい知れない。

「あ、あ、ああ」

からからに乾いた慧音の口から声は出ず、ただこくりとうなずくのが精一杯だった。

そして、慧音がうなずいた瞬間。

吸血鬼の少女の周りから、音と色が、消えたように感じた。

「じゃあ」

ぴたり、と少女の動きが止まる。

一瞬の、完全な静寂。

「死んじゃえ」

その静けさを破ったのは、冷たい冷たい言葉で。

「え………？」

その言葉の意味が、慧音には理解できなかった。

いや、多分、理解はしていた。それでも、体が動かなかった。

呆然と立ったまま、慧音は見た。

顔を上げた少女が、笑っているのを。口を開けて天を仰ぎ、両手を広げて哄笑しているのを。開いた口は血のように紅く、とても嬉しそうに笑っているのに、どこか言いようもなく悲しそうで、慧音はただ立ち尽くしていた。

——ひゅい、と風を斬るような音がして。

我に返った時には、少女の顔が慧音の目の前にあった。

「バイバイ」

ぼそり、とつぶやく声。

視界の端で、何かが閃いたような気がした。直後、雷光のような勢いで視界を横切ったのは、金色の髪の吸血鬼の、その細くて柔らかそうな腕。それが、どうしようもないスピードと破壊力でもって振り下ろされる。

そして、その腕は貫いた。

「え……？」

「あれ？」

二つの驚きの声が、まったく同じタイミングで夜空にこぼれた。はねた血が、慧音の頬にひとしずくの染みをつくった。

くくくくく

【フランドール・スカーレット】

現在地：B - 1

前登場話：《30・ハート・ハート》

次登場話：《34・その背負うもの》

【上白沢 慧音】

現在地：B - 1

前登場話：《16・信じるということ》

次登場話：《34・その背負うもの》

【秋 穰子】

現在地：B - 1

前登場話：《16・信じるということ》

次登場話：《34・その背負うもの》

33・魔理沙とアリスとチルノと（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご了解のうえをお願いいたします。

33・魔理沙とアリスとチルノと

はあ、と。

アリスのついたため息の音が、静けさを取り戻した夜の空気を揺らした。

「ほんと、何してくれるのよ。魔理沙……」

「悪かったってば。ついやりすぎちゃった」

それに対して、魔理沙は相変わらず悪びれない。

「何だか、今さらながら腹が立ってきたわ。あんないい宿、そうそう見つからないもの。このままじゃ今夜は野宿じゃない」

「ま、そういうのもたまにはいいだろ」

「良くない！」

同じやり取りを先ほどから何度も繰り返しながら、魔理沙とアリスは先に進んでいく。その二人の後ろを、背中に氷の羽根をはやした少女が小走りについていていた。

「ねえ」

ついていきながら、少女は前に行く二人に声をかけた。

「それより八卦炉を返してくれよ。大事なんだよ、あれ」

「ダメ。自業自得なんだから、諦めなさい」

「ねえってば」

二人は相変わらず同じようなやり取りを繰り返している。少女の言葉は耳に入っていない。無視されていることに気を悪くしたのか、少女は頬を膨らませた。が、頬の空気はすぐにしゅるしゅると抜けて、代わりにいたずらっぽい笑いがその顔に浮かんだ。

「せーの」

小声でつぶやいて走り出す。十分に助走をつけ、前に行く二人との距離が縮まったところで。

魔理沙の帽子の下から覗く、金色の髪。更にそこから下に伸びている、思いのほか華奢な首。

帽子をつかむように手を伸ばし、首を挟むように足を広げて、少女は跳んだ。

「だいたい、アリスだって……」

魔理沙は、最後まで言い終われなかった。

多分何が起きたのかも分からなかったのではないだろうか。

後ろから襲いかかった氷翼の少女に、その華奢な首は耐えられず。

一瞬だけ少女を肩車するような格好になった後、少女の勢いに負けて、魔理沙は前のめりに倒れた。

・
・
・

「なあ、チルノ」

額に濡れた布を当てて地面に仰向けになった魔理沙が、ぼんやりとつぶやいた。

「……ごめんなさい」

魔理沙の傍らに正座したチルノが、しょんぼりと答えた。

「いいんだけどさ。わけは大体分かったし」

額の布をいじりながら魔理沙は苦笑した。途端、チルノの顔がぱつと輝く。

「ほんと？　許してくれる？」

「いや、まあ。……ああ」

変わり身の早さに少しばかり呆れながら魔理沙はうなずき、顔に当てた手を通して夜空を見上げた。

「しかしまあ、いい夜だな」

明るく輝く月が魔理沙とチルノの頭上に張り付いている。まぶしそうに目を細めた魔理沙の顔に、ちょうど見計らったように影が落ちた。

「気がついた？」

「お、アリス」

両膝に手をついて覗き込んでいたのはアリス。その髪が魔理沙の鼻先で揺れて一瞬だけ二人の目が合い、すぐにアリスが目を逸らした。

「良かった。何ともないみたいね。ま、頑丈なあんたのことだから別に心配はしてなかったけど」

憎たらしい口調でも、やはりほっとしたらしい。アリスは嬉しそうに笑っていた。それに応えてにやりと笑い返した魔理沙の服を、チルノが引っ張った。

「ねえ、魔理沙。さっきから気になってたんだけどさ」

うん？ と目だけで聞き返した魔理沙に、チルノが続ける。

「こいつ何？ 魔理沙の知り合い？」

「こいつ……」

あまりの言い草に絶句したアリスを面白そうに眺めながら、魔理沙はうなずいた。

「ああ、まあな」

平然と答えた魔理沙に抗議するように、アリスが声を上げた。眉がぴくぴくと震えている。

「魔理沙。誰よ、その子」

「あたいはチルノだ。氷の妖精で、魔理沙の親分だよ」

「はあ？」

質問に答えたのは魔理沙ではなくチルノ。それに対して、アリスは訳が分からないといった風に間の抜けた声をあげた。

「あんた、魔理沙の友だちでしょ？　だったらあんたもあたいの子分だね」

いつの間にかすっかり元気を取り戻したチルノが、大威張りでアリスに尋ねる。

「いや、違うから」

しらっとした様子で、アリスは返した。何なのよ、という顔で魔理沙に目をやると、魔理沙は何を思っているのかにやにやしている。

「まあ、そういうわけだ」

「どういうわけよ。全然分からないわよ。第一、氷の妖精なんて大した力も持っていないでしょうに。何で私がそんなの子分にならなきゃいけないのよ」

「ん？」

その言葉を耳にした途端、それまで偉そうにそっくり返っていたチルノが、ぱちくりと目を瞬かせて、魔理沙を振り返った。

「ねえ。魔理沙」

「何だよ」

「あたい、ひょっとしてバカにされてる？」

「ああ、良く分かったな。偉いぞ、チルノ」

うまく流せば良いものを、魔理沙も煽る。

「ちょっと、魔理沙」

「いら」

魔理沙に文句を言ってやろうと詰め寄ったアリスに、チルノの声
が飛んだ。アリスが目をやると、チルノが腰に両手を当てて仁王立
ちになっていた。

「……何よ」

「親分をバカにするな。子分のクセに」

「だからね……」

「それにさ」

アリスの反論に耳も貸さずに、チルノは続ける。

「魔理沙はあたいの子分だよ。乱暴したりしたら、絶対に許さない
から」

「……」

アリスは何とも言えない顔でチルノを見た。どこから指摘したものが迷っているようにも見える。アリスのその沈黙に耐えられなかったのか、すぐにチルノは怒ったように続けた。

「……何さ。何なのさ。いいよ。ケンカなら相手になるよ。あたいは最強なんだから、アリスなんかには負けないよ。ね、魔理沙」

「ああ、そうだな」

また苦笑しながら、魔理沙は返事をした。文句の一つでも言おうとしたらしいアリスと目が合った瞬間、ぱちりと片目を閉じる。

「……」

今度は魔理沙に対して何か言いたそうな顔を向けて、アリスはしばらく唇を震わせた。そのまま目を伏せたり拳を握ったりしてから。

「……はあ」

諦めて、アリスはため息をついた。

「分かったわよ。なつたげる、子分」

「ほんと!?!」

ぱつと顔を輝かせるチルノ。その変わり身の早さに、アリスはぽかんと口を開けてしまった。

「……結局、子分が欲しかっただけ?」

聞こえないようにつぶやいて、アリスは両手を広げて上に挙げ、大げさに「お手上げ」のポーズをとってみせた。

「わーい！ 魔理沙、子分が増えたよ」

「ああ、良かったな」

けれど、チルノは嬉しそうに魔理沙に話しかけ、魔理沙も楽しそうにそれに応えている。

「まったく、もう」

アリスが軽く舌打ちすると、その音が聞こえたのか魔理沙が振り向いて、もう一度ぱちりとウインクをしてみせた。

はあ、と。

アリスのついたため息が、夜の空気を揺らした。

くくくくく

【霧雨 魔理沙】

現在地：C - 2

前登場話：《28・厄神の見たもの》

次登場話：《》

【アリス・マーガトロイド】

現在地：C - 2

前登場話：《28・厄神の見たもの》

次登場話：《》

【チルノ】

現在地：C - 2

前登場話：《28・厄神の見たもの》

次登場話：《》

34・その背負うもの(1)(前書き)

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご了解のうえをお願いいたします。

34・その背負うもの(1)

「あれ、おかしいなあ」

きょとんとしたフランドールの声が、暗い夜に染み出した。その腕からぱたりぱたりと血が伝い、地面に黒く広がっていく。

「あ……」

呻くような慧音の声は、苦痛ではなくうろたえたような響きを帯びていた。宙を泳いだ視線がやがて焦点を結び、やがてその口が開く。

そこから漏れた声とその少し後ろに立った穰子の声が、期せずして重なった。

「あなたは……」

「山の、天狗さん？」

そこには、椛が、寝かせた耳を震わせながら立っていた。正面に構えた鉄の盾はフランドールによって紙細工のように貫かれている。そして、壊されたのは盾だけではなく。

「……痛い」

盾に守られていたはずの椛の華奢な二の腕もまた、勢い余ったフランドールの腕に深く切り裂かれていた。あふれ出る血が、ぱたりぱたりと地面を濡らす。

「そっちのおねえちゃんをころすつもりだったのに」

フランドールが慧音を見て首を傾げる。その動きが腕にも伝わったのか、椀が顔をしかめた。血がはねて三人の頬に散る。

「っていつか、おねえちゃん、だれ？」

慧音から椀に目を移し、フランドールは無邪気に笑いかけた。ちんまりとした舌が小作りな唇からちろりと覗き、口の周りをぺろりとなめる。

「……」

椀は齒を食いしばったまま、答えない。

「まあいいや」

フランドールが、ずるりと腕を引き戻す。椀が苦痛に低い声をあげた。

「もういいかい」

嬉しそくに笑いながら、フランドールが拳を作る。その手についた赤い血が月光に輝いていた。

「……逃げて」

震えだす体を抑えながら、椀は目だけを動かして慧音に言った。

「あ、あ」

だが、慧音は動けない。

「……」

困ったように栞の耳が寝る。

「ほらほら、いくよ」

しかし、その弱気な様子もフランドールの楽しそうな声にあっけなく吹き飛ばされ、栞の尻尾がぴんと逆立った。貫かれてもう役に立たない盾はぽとりと落とし、たんと地面を蹴って、栞は先手必勝とばかりに自分からフランドールに飛び掛かった。左腕はだらりと垂らしたまま、右手に握った剣を振りかざす。銀光が、フランドールの手と足を狙って宙を舞った。

「わ」

鋭い太刀筋に驚いたような声を出しながらも、フランドールは楽しそうに笑っていた。

「いいよ、あそびましょ」

「……遊ばない」

栞は無表情のまま剣を振るった。月光に閃く刃が一度、二度、三度と、その軌跡を夜の空気に刻み込む。しかしそのどれも、フランドールの髪の毛一つ切り落とすことができない。何でも無さそうにすべての攻撃を避けきって、フランドールはにっこりと笑った。

「たのしいね」

「……楽しくない」

無邪気に笑うフランドールと、無表情な椛。楽しそうなフランドールとは裏腹に、椛の額には玉のような汗が浮かんでいた。そのうちの一粒がゆるりと流れ落ち、いくつかの玉汗を取り込んで椛の頬を伝う。

「逃げなきゃ！ 早く、慧音さん、しつかりして！」

椛の背後で、ようやく我に帰った穰子が、慧音を引っ張っていた。引きずられるようにして、慧音がフランドールと椛から離れていく。その音を聞き取った椛の耳がわずかに立った。安心したように。

だが、それが、ごく短い時間とはいえ隙を生んだのかもしれない。フランドールが、にいつと笑った。

「ほら」

フランドールの右手が、すいつと無造作に伸びる。何でもない動作のはずが、それは目にも留まらぬ速さで椛の胸を射抜こうとした。

「！」

とつさに軸足に全体重をかけて体を捻る。過大な負荷に腱がぎしりと軋みながらも、何とか椛の体はフランドールの腕の真正面からは外れる。それでも完全にかわすことはできず、布と、それ以外の何かを引き裂く音が、鈍い湿り気を帯びて空中に吐き出された。

「あうっ……」

びっくりと椀の体かのけぞり、すぐに頭ががくりとうなだれた。胸に近いわき腹が、フランドールの腕にえぐられていた。決して浅くはない。先ほどよりも粘り気のある血が、先ほどよりも大量にあふれていた。足元が水たまりのようになる。それでも椀はふらく足を踏ん張って、フランドールから距離をとった。頭が、腕が、足が、よろめいている。

「……雛」

襲い来る目まいにうつむいて、椀はつぶやいた。

「……もう、無理、だよ」

「なあんだ。もうおわり？」

そのつぶやきに応えたのは、つまらなそうなフランドールの声だった。

そして、小作りの唇がにやりと歪んだ。

「じゃ、バイバイ」

くくく

魔理沙とチルノとアリス、三人と別れて、雛と椀は歩いていた。その気配に最初に気づいたのは、雛より目も耳も感覚も良い椀だった。

ただ、そのすぐ後に雛も感じ取った。

禍々しい。憎々しい。物悲しい。うら寂しい。呪わしい。白。

言葉にするとすればそんな風な気配に、二人はすくみ上がった。今まで出会った誰よりも強い、負の思い。

怒りだけではない。悲しみだけでもない。喜びがないわけではない。面白がっていないなどとは言えない。単純なようで様々に入り混じったその気配は、どれもが笑ってしまうほど大きな振れ幅でもって、素直に真っ直ぐに、垂れ流されていた。

何かが誰かを殺そうとしている。

——止めなければ。

考えるよりも先に、雛は桜に目をやっていた。
なぜ？

分らない。

もしも、どうしようもない仮定の話として。

雛が桜を見なければ、何人かの運命は変わっていたかもしれない。
あるいは、雛が桜を見た場合でも、桜が雛と目を合わせなければ、
また道は違っていたかもしれない。その良し悪しはおくとしても
けれど。

雛は一瞬の思考さえも飛び越えて桜を見て。

桜はそれよりも更に早く、その透き通った瞳を雛に向けていた。

月光を浴びて冴え冴えと輝くその瞳は、雛が言葉を発するよりも
前から、既にその言いたいことを理解していた。

「……行ってくる」

——私の方が速いから。

その目は、そう言っていた。

——雛はきっと、止めたいと思っているから。

多分この瞬間に、二人の行く先は決まった。

風のように駆けて行った椀を追って、雛は走った。

走りながら、雛は何かを考えていた。

厄神としての自分のことか。厄神でない自分のことか。自分が面倒を見なければならぬ存在である椀のことか。自分についてきてくれ、今は自分の前を走っている椀のことか。

いずれにせよ夜は傾き続け、雛は足を速めて、残された時間はぎりぎり減っていった。

そしてやがてたどり着いたのはゴールか、目的地か、終焉か。

椀は。

そこで雛が見た椀は。

血まみれで、吸血鬼の振り上げた手に呑みこまれようとしていた。

雛は、何とかしたいと思った。

自分の近くの、けれど遠くにいる椀を、助けたいと思った。

思いは雛の中で膨れ上がり、無数の火の球を形づくった。

そして、自分の中の火球に押し出されるようにして、雛はそのスペルの名前を口にした。

）
）
）

「『大鐘婆の火』！」

じつ、と。

フランドールと雛の間に、火柱が上がった。

火柱を形づくっているのは、数え切れないほどの量の微細な火の玉。あるものは時計回りに、あるものは反時計回りに、十重二十重

に渦を巻き、螺旋を描きながら空に上り、相互に折り重なっている。

「わ」

椀を叩き潰そうとしていたフランドールが、腕を振り上げたその姿勢のまま、驚いたように目を見開いた。

「！」

火柱が空をかき混ぜる。ゆつくりと、徐々に速度を上げて、離れていった。その進む先にいた穢子が、慧音の手を引いたままぎゅっと目をつぶる。

「熱く、ない？」

慧音がうわごとのようにつぶやき、虚ろな目がわずかに光を取り戻した。

椀が、傾くように体ごと振り返った。

「……ひ、な」

絞り出すような声にこもっていたのは、喜びか、恨めしさか。

火柱はそんな椀に見向きもせず、ちろちろと揺らめきながら進んでいく。そして、なぜだかとても嬉しそうに、その一部をフランドールに伸ばした。

「え？」

きょとんとした声。

それにわずかに遅れて、炎が吹き上がった。

吹き上がった炎は嬉々として、伸ばしたままになっていたフラン
ドールの腕に燃え広がる。

伸ばした手から、その先ではためく赤い服に。

赤い服から、それに包まれた小さな体に。

小さな体から、その背に伸びた色とりどりの宝石をぶらさげたよ
うな翼に。

瞬くほどの間に炎はフランドールの体を走り、その全身を包み込
んだ。包み込んで、一個の巨大な火の玉にその姿を変えた。その姿
を変えて、夜の闇を明々と照らし出した。

空気が烧ける音がする。夜の冷たさと静けさを切り裂く匂いがす
る。

「あ、ああっ」

うめくような声が、火の玉の中から漏れた。

「あつい。あついよお」

うめきは叫び声になって、炎を襲う。けれど、炎はその勢いを減
じない。

「くるしい……」

叫びはやがて勢いを失い、炎の唸りにかき消されて聞こえなくな
った。

「……」

後にはただ火の球が燃えているだけ。ただそれだけ。それだけで、
それもすぐに終わる。そのはずだった。

雛がほつと息をつき、糸が切れたように椀の体が崩れ落ちかけ、ぎりぎりで踏み留まった。

二人が目を合わせて、何かをしゃべろうとしたその瞬間。

「『レーヴァテイン』」

なぜかその声は、雛にも椀にもはつきりと聞こえた。

一閃、紅色の光が走る。

遅れて、強い風が巻き起こった。物理的な風ではなく、心を凍らせるような風が火の球の中心から発せられ、その寒々しい圧力に椀は霞む目を細めた。

ただ一閃。

たった一閃で、巨大な火の球はあっけなく吹き飛ばされた。千々に乱れて空を舞う火球が、わずかばかり名残惜しそうな素振りを見せた後、かき消える。
椀が目を見開いた。

「危ない！ 椀！」

切羽詰まった雛の声が飛ぶ。

「あははは、はは、ははは」

それに、感情の抑制を失った哄笑が重なる。

その声の主は、火の球に飲み込まれたはずのフランドール。服の一部は燃え落ち、輝く金髪もわずかに焦げている。その金髪から覗

く瞳が、苦痛と憎しみをまとって嬉しそうに爛々と輝いていた。
その手には紅色に輝く光の刃が握られていて、フランドールが無
造作に振るうたび、悲鳴のような音を立てて夜が切り取られていっ
た。

「あつかった」

楽しそうに笑って、フランドールが跳躍する。ひよいとなぎ払っ
た紅色の魔剣が、とっさに構えた椀の剣をまるでバターでも切り裂
くかのように斬り飛ばし、更に返す刀が椀の心臓を狙ってぎらりと
輝いた。

「くるしかった」

ひよいと突き出された魔剣が、椀の命を刈り取るうとする。迫る
魔剣に、けれど椀は固まったまま動けない。瞳に恐怖が映って揺れ
た。椀の胸に、魔剣が届く。

「椀！」

魔剣が椀の肌を貫く直前に、雛が跳んだ。その勢いのままに椀を
突き飛ばす。突然横から飛び込んだ邪魔者に魔剣はわずかに軌道を
逸らされて、結局、邪魔者の左腕をかすめることしかできなかった。
じゅ、と、肌が裂け、焼ける音がした。

「っ……っ」

「……！」

雛の喉からうめき声が漏れ、突き飛ばされた椀が息を呑んだ。雛

は苦痛に顔を歪め、椛は驚きと悲しみと感謝とに、顔をくしゃくしゃにした。

「あれ、まただ」

その上に響く、不満げな声。

「なんで、ちゃんとあたらないんだろ」

口を尖らせたフランドールが、苛立ったようにその翼をばたばたと揺らしていた。

「……」

耳が垂れ、泣きそうな目をした椛が、かすれた声で問いかける。

「……雛、大丈夫？」

「お揃いね、左腕」

額に脂汗を浮かべながら、雛は、にっこりと笑って言った。

「……」

椛は沈黙し、雛も微笑んだまま口を閉じた。

左腕をえぐられた二人が、互いの瞳を覗き込んだ。それだけでもう十分で、それぞれの言いたいことはもう伝わっていた。

「……雛」

「何？」

「……何でもない」

「そう」

くくく

椀は。

剣を折られ、左腕とわき腹に深い傷を負った状態で、なお。

そつと、雛をかばって前に出た。その瞳には、もう怯えも迷いも無い。

立っているのがやつとの体は、それでも切れることなく静かにたたずんでいた。

「椀の、バカ」

雛は。

椀がそうするだろうと、瞳を覗き込んだ時にもう分かっていた。

そしてもちろん、それを黙って見てはいられなかった。

この世界に飛ばされて初めて会った時のことを思い出す。

多分あの時、出会ってしまった時点で。

あるいは雛が道を引き返し、椀と再会してしまった時点で。

いつか椀がこんな目に遭うことは決まっていたのかもしれない。

そして多分、雛はそれを分かっていた。心のどこか、はつきりとは探し出せない場所で、それでも確かに知っていた。

今の状況を無事切り抜けられたら、いくらでも謝ろう。

巻き込んでしまったことを。争いに関わらせ、傷つけてしまったことを。

そして、それよりもずっとたくさん、ありがとうと言おう。

自分の後ろをついてきてくれたことを。自分の前を走ってくれたことを。そして、自分の隣を歩いてくれたことを。

だから、今はただ。

何とかしたいと思った。

柩を助けたいと思った。

そのために、力が欲しいと思った。

くくく

雛の左腕、フランドールの魔剣にえぐられた傷口から、黒い霧のようなものが立ち上った。霧は後から後から湧きあがり、集まって徐々に大きくなり、こごり、濃縮され、微となり細となって、雛の左腕を覆い尽くしていく。どれほどもしないうちに、雛の左肩から左手の指先までがすべて黒い霧に覆われ、真っ黒な闇に呑みこまれた。

「……雛？」

柩の声がする。返事はしない。

——これが、自分の精一杯。

黒い霧が、雛の左腕ごと、巨大な錐のような形を取る。

「……行け」

そして、雛はつぶやいた。

「『ペインフロー』」

声と共に闇が弾け、雛は夜よりもなお黒い尾を引く一条の槍となつて飛んだ。槍となり空を裂いて飛び、その軌道の上にいた吸血鬼の小さな体を、真正面から貫き、吹き飛ばした。

）
）
）

【鍵山 雛】

現在地：B - 1
前登場話：《28・厄神の見たもの》
次登場話：《》

【犬走 椋】

現在地：B - 1
前登場話：《28・厄神の見たもの》
次登場話：《》

【フランドール・スカーレット】

現在地：B - 1
前登場話：《32・遺志を継ぐもの》
次登場話：《》

【上白沢 慧音】

現在地：B - 1

前登場話：《32・遺志を継ぐもの》
次登場話：《》

【秋 穰子】

現在地：B - 1

前登場話：《32・遺志を継ぐもの》
次登場話：《》

35・難題『一時休戦』（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

35・難題『一時休戦』

「月が、きれい」

空を見上げて独り言。梢の先に見え隠れする月は明るくて、背中とお尻は痛い。ずっと同じ姿勢なんだから当たり前か。

だって今の私は、木の上にいるから。鳥みたいに巣を作って、そこにちよこんと収まって。最初は居心地が良かったけれど、さすがに長いこといるのは辛い。何か気分転換に——と思つて、私は月に目を留めた。

改めて見ると、満月に少しだけ足りない月は何とも愛嬌のある姿をしている。彫りの深い、陰のある、丸っこい顔立ち。私はそんな顔は嫌いじゃない。

とは言つても、この月はどうせ「偽者」だ。いつか永琳がやつたみたいな、偽者の月。古い昔の月の記憶を持ってきたのかどうかは分からないけど。

月が偽者なら、大地も偽者。森も偽者。川も偽者。ここに出てくる私だって、前に出会った二人組だって、みんなみんな——。

なんて。

くだらない考えに、自分で吹き出してしまふ。

その動きが伝わってか、頭の上で葉が揺れた。背中とお尻の先にある木は、どっしりとして揺れてるようには思えなかったのに。

木に上がってから、ずいぶん経った。もう夜も半ば過ぎ。少しずつ夜明けが近づいている。

寝ようか起きようか迷って結局眠れないうちに、もうこんな時間になつてしまった。

今まで特にも何も無かったし、多分これから何も無いだろう。
そんなことをぼんやりと考えて何となく気が緩んだ途端、どこか
で何かががさりと揺れた。

「！」

慌てて背を立てて、辺りを見回す。木の幹が、反動でゆさゆさ揺れた。

けれど、どこを見ても何も無い。不自然な草や木々の揺らぎも無いし、妙な音もそれきりしない。

いや。

耳を澄ませば、わずかに音が聞こえているのが分かる。まだ視界に入らないどこか。ギリギリ耳に届く程度の大きさ。誰かが下草を踏み分けながら行くような。

——誰か、来た。

声に出さずにつぶやいて、私は気配のした方に意識を向けた。音は、少しずつ大きくなってきているみたい。誰かが近づいてきているのは分かるけど、それが誰なのかは分からない。知り合いだったら声をかけようかな、なんて日和見なことを考えていたら、どんどん音は大きくなって、あっさりとそいつは姿を現した。

「え？」

見間違いかと思った。

だってそれは、ずいぶん長いこと考えてた相手の姿だったから。もちろん、考えてたのはただケガしてたから心配だっただけで、

本当は永琳とかに会えた方が私としては嬉しかったんだけど。それでも、知り合いに会うことができたのは、素直に嬉しい。

そう、姿を現したのは、私と同じ蓬萊人、藤原妹紅だった。

「あ……」

嬉しいはずなんだけれど。

妹紅は、やっぱり辛そうにしていた。胸を痛めてたんだから当然なのかもしれないけれど、それだけでも無さそうに見える。

全身ボロボロだ。

何やったんだか。

「もこ」

控えめな大きさに、声をかける。向こうからは見えづらいだろうから、驚かせてしまうかもしれない。

「あれ？ 輝夜？」

案の定妹紅はきよろきよと左右を見回し、もしかしてと思って後ろを振り返り、最後に上を向いてようやく私に気づいた。目が合う。

「久しぶり」

ひらひらと手を振ってみる。身を乗り出すと、足の下で枝が少しなった。

「一人か？」

「うん。妖精と河童の二人組には会ったけど、私は一人旅」

「淋しいヤツ」

白い歯を見せて笑いながら言う妹紅に、ちょっとイラつとした。

「あんただって一緒じゃない。それにボロボロになっちゃって。どうせ誰かを怒らせたんでしょ。コミュニケーション能力無いのはどつちよ」

「いや、別にそんなことまで言っていない……。それに、どっちかって言うと気に入られた、のかな。それはそれで困るけど」

「ふうん」

良く分からない。けどそれよりも、今は先に知りたいことがあった。

「もこ。胸、大丈夫？」

「お前に心配されるほどぺったんこじゃない」

「あのね」

「ごめん」

「……で？ 折れてない？ けっこう、嫌な音がした気がするけど」

妹紅が吹っ飛ばされたあの光景を思い出すと、ぞわりと鳥肌が立

った。けど、妹紅はそんな私の気持ちも知らず。

「お前に心配されるほど弱くないさ」

「殴っちゃおっかな。ケガしたところ」

「ごめん」

「いいけどさ。どっちみち、知ったところで私じゃ治療もできないし。……永琳がいればなあ」

言ってもどうしようもないと分かってるのに、ついつい口にしてしまう。案の定、妹紅はイヤそうな顔をした。
けど、それはどうも私が思ってたこととは違ってたみたいで。

「……なあ、輝夜」

「何？」

「永琳って、この殺し合いに乗ってる、なんてことは無いよな？」

「あるわけないでしょ」

考えるまでも無く即答。こんな殺し合いに乗るなんて、バカみたい。永琳がそんなことするはずがない。

「そう、だよな。ごめん」

三回目、また謝った妹紅は、けどさっきまでより難しそうな顔をしていた。

「も」

「ん？」

私の言葉に、我に返ったように妹紅が私を見る。

「何か、あったの」

「いや。何でもない」

「教えて」

「……」

永琳や永遠亭の兎たちのことなら、私は聞かなきゃいけない。それがどんなことでも。だって、私はあの子たちの姫なんだから。妹紅はため息をついた。

「分かったよ」

「うん」

「けど、全部私の憶測。ちょっと思いついただけだ。そのことだけは先に言っとくぞ」

無言のまま、こくりとうなずく。そんなことは分かってる。それでもやっぱり嫌な予感がした。

「一人、殺されてるのを見たんだ」

「え？」

「いや、殺されてるのが永琳だったわけじゃない」

「そんなこと、分かってるわよ」

「紅魔館の門番、だったと思う、多分。話したことも無いから、うる覚えだけど」

「うん」

「その子、多分、何かの毒か、薬を盛られてた。痺れ薬か何か、そんなの」

「……」

「永琳なら、そういう薬を作るのなんて簡単だろ？」

「……永琳でも、何も無いところから薬は作れないわ」

薬を作れるかどうか、ということには答えなかった。答えるまでも無いもの。

妹紅もこくりとうなづく。

「だから、聞いてみたんだ。……もしかしたら誰かがそんな薬をたまたま持ってたのかもしれないしな。そっちの方が、悠長に薬を作ってたなんてのよりはずっと現実的だ」

……そうかな。

そんな薬を持つてる人が、一体幻想郷にどれだけいるんだろう。けど、それを否定したら、それこそ永琳が殺し合いに乗ってると思えることになる。

「まあお前がそう言うなら、きっとやったのは永琳とは別人だ。ごめんな、変なこと言って」

実際のところ、永琳が何を考えているのか、時々良く分からないことはある。でも、私が信じなかったら一体誰が永琳を信じてくれるだろう。

「もこ。永琳はそんな人じゃないよ」

「悪かった」

ぺこりと頭を下げて、すぐに妹紅は痛そうに顔をしかめた。胸の前で、きゅっと手を握っている。

「……やっぱり、痛いんじゃない」

脂汗を浮かべながら、妹紅はにやりと笑って言った。

「言葉が汚くなってきてるぞ、お姫サマ」

「永琳みたいなことを言うのね」

笑いながら、妹紅の胸に目をやる。

「肩、貸そつか？」

「いや、大丈夫。輝夜は今夜はもうここにいるんだろ？」

そんな強がりに、はあ、とため息をつく。

「いいわよ。ついてったげる」

「やめとけ。夜に動くヤツだっているんだぞ。戦いたがってるヤツに会っちまったら危険だ」

「だからさ……」

またイラッとした。どうして普段は平気で殺し合いするクセに、こんな時には私を気遣うんだろ。

……そんな妹紅を放っておくことなんて、できるわけないじゃない。

「一緒に行こうって言うてるの。淋しいヤツなんでしょ？ だってら連れてってよ」

「……」

多分妹紅も、さっき私が考えたのと同じことを考えてるんだろうな、と思った。

ぽかんと開いたその口に、それこそ永琳の薬が何か突っ込んでやりたくなる。

待つても埒が明かないので、私はするすると木を降りた。長い時間私を受け入れてくれた木に感謝して、そっとその幹に手を触れる。

温かい。

そして、私だって生きている。

「ほら、行くよ」

言つて、私は妹紅の手を取つた。

「お、おい」

うるたえたような妹紅の聲が、耳に心地いい。

「どこか、横になれて、屋根があつて、人目につかないところを探さなきゃね」

「……あるのか、そんなところが」

「さあ」

肩をすくめる。けど、見つければいいじゃない。
大丈夫。見つけてみせる。

一つ拳を握り、私は妹紅の手を引いて歩き出した。

）
）
）

【蓬萊山 輝夜】

現在地：D - 5

前登場話：《17・一人、二人》

次登場話：《》

【藤原 妹紅】

現在地：D - 5

前登場話：《31・紅の夜（2）》

次登場話：

36・メイド、巫女、死神（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

36・メイド、巫女、死神

「これからどうするつもり？」

「決まってるじゃない。あの閻魔を倒しに行くのよ」

「どうやって？」

「さあね。まだ決めてないわ。けどまあ、歩いてればそのうち行き当たるでしょ」

「あなたらしいというか、何というか……」

「そういうあんたこそ、これからどうするのよ」

「決まってるじゃない。お嬢様に会いに行くのよ」

「どうやって？」

「お嬢様は夜がお好き。だから夜に空を見上げれば、飛翔するお嬢様にお会いできるかもしれない。あるいは、お嬢様は光が好きではないから、どこか陽の光を遮れるところにいらっしゃるかもしれないわね」

「あなたらしいというか、何というか……」

「で、霊夢」

「何？」

「気づいてるんでしょう？」

「そりゃね。どうする？」

「話し合いで解決できる相手じゃなさそうよ」

「……そうみたいね」

「準備して」

「分かったわよ。あゝあ、あんたといい、私の邪魔をするやつばかり。もうちょっと何とかならないのかしら」

「愚痴は終わったら聞くから」

くくく

「人間の、気配がするね」

教会を見上げて、小町はぽつりとつぶやいた。背負った大鎌がきらりと光る。

両開きの扉の向こうから感じる気配は二つ。どちらも強い。

「さあて、どうしたもんかね」

つまらなそうに目を細めた小町の鼻先で、気配が二つに分かれて移動した。相手も既に気づいているらしい。小町の顔が、すっと色

を失う。

移動先は——ドアの真横。ちょうど、ドアから入った小町が挟み撃ちを受けるような位置。

「バレてるじゃないか」

一瞬だけその目が陰しく光り、すぐに苦笑に戻る。

「やれやれ、二対一じゃ、さすがにちょっとキツイかな。あの兎でも引つ張ってくりや良かった」

誰に言うでもなく、小町はつぶやいた。

「しかし、どうするか。とりあえず正面からは無理だし、どつか別のところから行くか」

と、そこまで言つて、唇を引き上げる。そのまま、目にも留まらぬ速さで鎌を構えなおすと、地面を蹴って走り出した。

「——なんて考えるのは、雑魚だけさね！」

ぶん、と振り回した鎌が、教会の重厚な扉をたった一振りで粉碎する。ごうん、と音を立てて巨大な扉が崩れ落ちた。

瓦礫が立ち込め、一瞬で辺りに煙幕が張られる。それに紛れて、小町は教会の中に入り込んだ。

まず狙うは——右！

振りぬいた鎌が、人影を貫いた。
が、それはただの残像で、狙うべき相手は既にその場を離れてい

た。相手を見極めようとわずかに勢いを緩めた小町に、上空からナイフの群れが降ってきた。

速い。そして、多い。

急制動をかけようかどうかどうしようか一瞬だけ迷って、すぐに小町は判断を下した。

躊躇無く大鎌を投げ捨てる。そのまま、飛び込むようにして前転し、その場から離れる。

回転して起き上がる背中の後ろで、降ってきたナイフが床に当たって甲高い音を立てた。そちらには目もくれず、放り投げた大鎌が地面に落ちるすれすれではっしと握りとめる。

「そら！」

受け止めた大鎌を、くるくると回転した勢いそのままに片手で振り回す。転がりながら想定した相手の着地点を、闇色の巨大な刃がなぎ払った。

「くっ……」

メイドの格好をした相手が、焦ったように声を上げた。着地と同時に襲い来る大鎌に、メイド少女は慌てて上体を逸らす。大鎌は一步踏み込みが足りなかったか、胸元を浅く切り裂くに留まった。それでも、着地の反動と緊急回避の動きに、その体勢が大きく崩れる。

「……」

それを見逃さず、無言のままで追い討ちをかけようとした小町は、けれど、すぐにはっと飛び退った。

一瞬前まで小町がいた場所に、光の柱が立ち上る。

ち、という舌打ちの音がした。

「不意討ちたあ、やるじゃないか」

音のした方に首だけで振り返り、小町は不敵に微笑む。その声に
応えて、暗がりの中からもう一人が姿を現した。

「一発でしとめるつもりだったんだけど」

その声の主は、巫女だった。

博麗の巫女。

もちろん、小町とて忘れていたわけではない。教会の外で感じた
気配の、もう一つ。

「命拾いしたね」

つぶやいて二人から距離をとる。

「貸し一つね」

「はいはい。今度紅茶でも淹れてあげるから」

目をやった先では、巫女が掌を差し出し、メイド少女が不機嫌そ
うに肩をすくめていた。

「まったく、物騒なヤツね」

「死神なもんでね。これもお仕事さ」

「だってさ。どうする?」

巫女の問いかけに、メイドが答える。

「私は、どっちでもいいけど」

「咲夜、あんたねえ……」

「そういうあなたはどうかのよ、霊夢」

「私も、どっちでもいいわよ」

巫女も、そっくり同じ動作で肩をすくめる。それから、二人揃って小町の方を向いた。

「で、あなたはどうするの？」

二人の声が重なる。冷たい響き。

小町は交互に二人を見比べた。四つの瞳が自分を見つめている。既に分かっている答えを待つ者のまなざし。

小町は、笑ったまま両手を広げた。

「もちろん」

大鎌が揺れる。

「やるに決まってるだろう？」

やっぱりか、と、二人がため息をつく。しかし一瞬後には、二人して険しい表情に戻って、散開した。

「行くよ！」

小町は地面を蹴って駆け出した。狙いは先ほどと同じ、銀髪のメイド。

だが、相手も既に予想していたらしい。メイドは一步下がると、ちょうど霊夢との間に小町が入るように誘導した。そのまま、どこから取り出した大量のナイフを空中高くに放り投げる。

「？」

不審に思い立ち止まった小町の視線の先で、ナイフが空中にぴたりと静止した。

とつさに小町は大鎌を正面で構え、横に跳ぶ。

「『殺人ドール』」

それとほぼ同時に、メイド少女が声を上げた。その声に反応して、空中で静止した何本ものナイフが、じわりと震え。

それから銀光を引いて、飛来した。

ひゅん、ひゅん、ひゅん、と、風を斬る音が室内に響く。

横に跳んだ小町を追って、大量のナイフが飛び、あるものは薄く小町の服を切り裂き、あるものは完全にかわされ、あるものは小町の構えた大鎌に弾かれた。

いったいどこにこれだけのナイフを隠していたのかと思うほどの数は多く、小町といえど完全に避けきることはできなかった。しかしそのすべてがかすり傷程度でしかない。ぎりぎりで避けきりながら、小町は更に反撃の機会もうかがっていた。

ナイフの群れの隙間。数が多いといっても、密度の薄いところが存在する。そこを縫っていけば、メイド少女のところにたどり着くのは可能だ。一撃決めることができれば終わりだが。

「……罨」

小町は鼻白んだ。ナイフの粗密は小町を誘導するためのもの。それに乗るのは簡単だが……と考えながら、小町はちらりと視線を外した。

——博麗の巫女の気配が、痛いほど肌に突き刺さる。

多分、自分がナイフの群れをかくぐってメイドの懷に潜り込む瞬間を狙っている。

最初は、結界を操る巫女が後方支援、ナイフを使うメイドが直接戦闘を行うのかと思っていたが、そうではなかった。

メイドが引きつけ、巫女が捕らえる。

小町が最初からメイドを狙うと分かっていたとは思えないから、打ち合わせをするまでもなく役割分担ができているのだろっ。やはり、侮れない。

——先に、巫女を倒すか。

一瞬で判断を切り替え、小町はちらりと背後の巫女に気を向けた。虎視眈々と、自分に隙が生まれる瞬間を狙っている。迷っていれば、それが即、隙につながる。

小町はとっさに地面のナイフを拾い上げた。起き上がる動きのその流れのままに、すくい上げるようにそのナイフをメイドに向かって投げつける。

「！」

メイドはあっさりとかわすが、それでもわずかに体勢が崩れる。それを見逃さずに小町は加速し、メイドを切り裂こうと肉薄した——ように見せかけて。

「はッ！」

背後で攻撃の気配を強めた巫女に対し、小町は躊躇無く手にした大鎌を投げつけた。

「な……」

巫女の表情に驚きが走る。体を翻すが、飛んでいく大鎌は巫女装束をざつくりと切り裂いた。

「つつ……」

苦痛に、巫女がうめきを上げる。

顔を歪める巫女に、小町は一瞬ですがりついた。そのまま、右手を一閃する。手に持ったのは、先ほど拾っておいたメイドのナイフ。鋭利な刃が、とっさに突き出した巫女の掌を切り裂いて――。

「な、に？」

小町は驚きの声を上げた。
切れない。

改めて手元を見直す。

「紙の、札？」

巫女の手には何かの護符が張り付いていた。霊力のこもった符が、小町のナイフを止めたのか。

一瞬、動きを止めた小町の眼前で。

「『夢想妙珠』」

巫女の体から、七色の光が立ち上った。光は珠の形を取って巫女の周囲を浮遊したと思うと、一斉に小町に向かって飛来した。

「!」

「ごう、と炸裂音がして、辺りをもうもうとした砂煙が覆う。

「……」

厳しい顔の巫女の視線の先で、やがて煙が収まって。

「……やるじゃないか」

側頭部からじわりと血を流し、小町はにやりと笑った。傍らに落ちた大鎌を拾い上げ、再び距離をとりながらすいと構える。

「……」

巫女とメイドの表情が、再び険しくなった。

「」

【博麗 霊夢】

現在地：D - 3

前登場話：《23・人間同士》

次登場話：《》

【十六夜 咲夜】

現在地：D - 3

前登場話：《23・人間同士》

次登場話：《》

【小野塚 小町】

現在地：D - 3

前登場話：《22・1日目 夜》

次登場話：《》

37・神殺しの神（1）（前書き）

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

37・神殺しの神（1）

神奈子は、ただ一人歩いていた。
一歩、一歩、足を前に運ぶ。ただ動くだけの歩み。
その顔には、疲れたような色がにじんでいる。

……なぜ。

考えるのは、つい先ほど起きたこと。
いや、神奈子自身が起こしたこと。

なぜ、あんなことを。

思考力の低下した頭で堂々巡りの考えを続けながら、神奈子は歩き続けた。

歩きながら、神奈子はまたしても、先ほどのことを思い出した――
|。

）
）
）

がさり、と音を立てて、神奈子は森と草原の境界を踏み越えた。

「あ……」

途端に、困ったような声が神奈子を出迎える。

「ん」

そこにいたのは、猫だった。赤い服を着、緑色の帽子をかぶった猫。猫は神奈子の姿を見ると、戸惑ったように声を上げた。

「藍さまじゃ、ない？ 紫さまの匂いがするのに……」

その言葉に、神奈子はすぐに猫の正体に思い当たった。

「……お前、八雲紫の式神か」

猫はびくりと震え、それから警戒をあらわにした声で返事した。

「違うよ」

ほう？ と首を傾げた神奈子に、言い訳するように猫が言い募る。

「私は、紫さまの式神の藍さまの式神だ。だから、紫様の式の式。紫様の式じゃない」

「式の式、ねえ」

強力な式神は、それ自身式神を扱うだけの力を持つという。話に聞いたことはあったし、幻想郷に存在することも知っていたが、実際に会おうのは初めてだった。

仲間が欲しい。

そう思っていたところに現れたのが、まさか八雲紫の関係者とは。少し予想外だったが、これは面白いと考え直す。

自分の方が八雲紫よりも優れた主であると示すのに、ちょうどいい。

「ねえ、お姉さん。ひょっとして、紫さまに会ってた？」

「何だって？」

考えこんだ神奈子に向かい、猫が問いかけた。思わず顔を上げて尋ね返すと、猫は取り繕うように、慌てて弁解した。

「いや、その、あなたの体から、紫さまの気配がするから。だから、どこかで会ったのかな、って」

その言葉に、神奈子の心に何かが湧き上がった。

「お前」

「何？」

「名は、何という」

「橙。紫さまと藍さまからいただいた、大切な名前。あなたは？」

胸を張って答える橙の質問に、神奈子は答えない。

「橙。あたしと一緒に来い」

「え？」

「聞こえなかったか。一緒に来い」

二度、神奈子は繰り返した。橙は、突然の申し出に怒り出すことも無く、真剣に顔を伏せて考えていたが、すぐにきつと顔を上げた。

「ごめん、行けない」

「なぜ」

「藍さまを探さなきゃ。それに、す……」

何かを言いかけた橙の言葉を、神奈子はもう最後まで聞きはしなかった。

「八雲紫は死んだ」

ぴしり、と。叩きつけるように、ただの一言で、橙の言葉を切つて捨てる。

沈黙。

「……知ってる、よ」

やがて、橙が振り絞るようにして声を出す。痛々しい表情を浮かべた橙を見て、神奈子は嗜虐的な笑みを浮かべた。

「じゃあ、このことは知っているか？」

「？」

「八雲紫は死んだ。なら、殺したのは誰だと思っ？」

ぽかんと口を開けたままの橙の表情が、いくつもの顔に変化した。まずは戸惑いに、次に悲しみに、それから疑念に、最後に怒りに。

「……まさか」

「ああ。八雲紫を殺したのは、このあたし。あいつの気配があたしに残っているのはそのせいだ」

間髪入れずに答えを返す。ゆっくりと、橙の全身から怒りのオーラが立ち上った。

「……お前が」

「だから、橙。あたしに従え。弱きものは強きものに。式神は、主に。主がいなければ、主よりも強きものに」

「お前が、紫様を」

橙の声が、震えていた。

「紫様の……」

橙の握った手が、光を発した。

「カタキッ！」

その手に生まれた光弾が弾け、神奈子に迫る。

「『屍解永遠』！」

光弾はいくつにも混ざり合いながら、神奈子を撃ち抜こうと飛来した。

しかし、神奈子は避けようもしない。迫ってくる光弾を邪魔そうに眺めて、ただぼつりとつぶやいた。

「『マウンテン・オブ・フェイス』」

そう唱えた瞬間、冷たい風が吹いた。紫の時に使ったような魔符は現れない。けれど、風は身を斬る刃となって橙の光弾を弾き飛ばし、そのまま橙の全身を切り刻んだ。

「ぎゃ」

つぶれたような声を出して、橙が吹き飛ぶ。たったの一撃で地面に這い蹲り、立ち上がることもできない。

「あつけないね」

神奈子は薄い笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

既に勝負は決した。こいつと自分とでは、力に差があり過ぎる。

もはやこいつには、自分に従うしか生き延びる道は無い。

ただ、それでも。

一撃でボロボロになった体の中で、橙の目だけは力をわずかも失ってはいなかった。

その目を我知らず見つめながら、神奈子は橙に語りかける。

「もう一度言う。橙、あたしに従え。あたしと一緒に来い」

「イヤだ」

悔しそうに唇を噛んだまま、橙はもう一度、やはりきっぱりと拒否の意思を表した。

それと同時に、神奈子の体から風が巻き起こる。風は再び橙の体を吹き飛ばし、蹂躪した。軽い体が神奈子から少し離れた地面に落ち、バウンドする。

「ぐう……」

こもったような音が、その喉から漏れた。
だが、その目は。

「橙、あたしと一緒に来い」

「イヤ」

その目は、やはり強い意思を秘めて、爛々と輝いていた。

「なぜだ？　なぜそこまで頑なに拒否する。死ぬぞ」

神奈子は、わずかばかり戸惑いながら尋ねた。

「……私は」

地面に倒れた橙が、拳を握る。

「私は、紫さまの式の、藍さまの式だ。お前なんかに、従うもんか」

「強情なヤツだ」

神奈子はため息をついた。もう一度、風が巻き起こり、橙の体を吹き飛ばす。

「げう」

橙が、呻いた。

——そろそろ限界、か。

「最後だ、橙。あたしと一緒に来い。あたしなら、お前にいろいろなものを与えてやれる。力も、信仰も。形あるものも、無いものもだ」

一転して、神奈子の口調が優しさを帯びた。橙の不安を溶かすように。いかに強がっても、眼前にちらつく死が恐ろしくないはずは無い。

だが、橙はきっぱりと拒否した。

「……イヤだ。何回も、言わせないで」

内心で、神奈子は焦る。別に、殺してしまっても良いのだが。八雲紫の関係者を従えることにこそ、意味がある。それを殺してしまつては元も子もない。

「……じゃあ、殺すぞ」

神奈子は、淡々と最後通告を突きつけた。実際に殺すつもりなど無かった。

だが、橙の行動は神奈子の予想を超えたもので。

「お前の思い通りになんて、なるものか」

それが神奈子の聞いた橙の最後の言葉で。

ぶちり、と音がした。

何の音が、神奈子には分からなかった。

そんな神奈子の目の前で、びくんと橙の体が跳ねて、そのまま地面に倒れこんだ。

「？」

何が起こったのか、神奈子には分からない。

崩れ落ちた橙は、もう先ほどまでのように顔を上げ、強い瞳で見つめてはこない。

もう、動かない。

「何、だ？」

橙を見つめる。

その口元からは、赤い赤い血が溢れていた。

「お前、舌を」

それ以上は言葉にならず、神奈子は橙を呆然と見つめていた。

しばらくの間無言で橙を見つめ、それから神奈子は一言も発せず、ふらりと踵を返した。

くくく

仲間が欲しかった。

ただそれだけだった。

出会ったのが八雲紫の関係者だと気づいた時にはこっそりと喜んだ。

だが、実際はそれが良くなかった。

どちらかでも欠けていれば、こんな思いはしなかっただろうに。終わることのない堂々巡りの中で、神奈子は歩き続ける。

その神奈子に、追いつがる影があった。

「神奈子」

それは。

「——ああ、諏訪子か」

振り返って影に目を留め、神奈子は虚ろに笑った。

懐かしい再会。仲の良い友であり、同時にライバルでもある神、諏訪子。

だがそれは、喜びをもって迎えられるものではなく。

「答えて、神奈子」

諏訪子は、開口一番、厳しい口調で神奈子に問いかけた。

「あたしに答えられることなら」

笑ったまま、神奈子は返事をする。興味無さそうに。
諏訪子の足元で、砂利が音を立てた。

「神奈子、あなた、猫を殺したでしょう」

猫。

「……」

「……」

数秒間の、沈黙。神奈子は答えない。諏訪子も、二度は問わない。
じっと待ったまま、いくらかの時間が過ぎた。

「……ああ、殺した。あたしが、殺した」

神奈子の口から、そんな言葉が漏れる。

嘘だ。

だが、嘘ではない。

誰が殺したか、と聞かれれば、間違いなく自分が殺した。自分以外には、殺さなかった。

八雲紫の式の式である橙。従えたいと、仲間になりたいと。そう思ったただけだったとしても。

「……どうして？」

震える声で、諏訪子は言葉を紡いだ。その問いかけは、多分話を引き伸ばしたいから。きっと、自分が否定すれば、諏訪子はその言葉を信じただろう。けれど自分が認めてしまったから、諏訪子は別

の出口を探してもがいている。

……だが、苦しいのは自分も同じだ。

「どうしてだと思う？」

自嘲気味な笑みを浮かべる。力無い笑みに、諏訪子は怒ったように体を震わせた。

「答えて。でなければ、私は……私は」

諏訪子は、顔を伏せて言葉を絞り出す。胸元で服の裾を握った手が、ぎりぎりと震えていた。神奈子が促すように眉を上げる。

「あなたを、倒さないといけない」

ぽつりと出た言葉に、神奈子は皮肉げに笑った。諏訪子はそれに気づく余裕も無いのか、言葉を続ける。

「私を信じてくれる存在を、私は裏切れない」

ぽつりとつぶやいて顔を上げた諏訪子の目が、神奈子と合った。

「……」

その言葉を聞き、その眼差しを受け止めて。

「そうか」

神奈子のその言葉は、諏訪子に向けたものではなく。

「はは、ははは。そうか」

唐突に神奈子の口について、高らかな笑い声が夜空に響いた。笑い声は夜の澄んだ空気を震わせて、やがて消えていく。

笑い声が消える頃には、神奈子の目に力が戻っていた。静けさを取り戻した夜の中で、神奈子はぽつりとつぶやいた。

「そうだったのか。簡単だ。簡単なことだった」

だが、その目は、奇妙に静かで、諦めたような感情を浮かべていた。

「ありがとう、諏訪子」

「？」

神奈子の言葉に、諏訪子が戸惑ったように頭を揺らす。

その諏訪子を見つめると、途端に意地悪な笑顔を浮かべて、神奈子は言葉を投げつけた。

「私を倒すだって？ できないことを言うんじゃないよ。あんたがあたしに勝つことなんて、幾百年経ったって有り得ない」

その言葉に、さっと諏訪子の顔色が変わる。

「神奈子、あなた……」

その言葉を遮って、神奈子是不敵に笑った。

「言葉なんて要らない。答えを知りたいならかかってきな。改めて

思い知らせてやるよ、どっちが上か」

そして、とんと後ろに跳ぶ。

「さあ、神遊びの始まりだ。差し出すものは、己の命。得られるものは、一握りの誇り」

歌うように言う。それが恐らく、戦いの合図。

「……神奈子」

呆然とそれを見送った諏訪子が、爪が食い込むほどに強く拳を握る。その瞳は迷うように揺れて、帽子が力無くすり落ちる。

けれどそれも一瞬のこと。

きっと顔を上げた諏訪子の目には、怒りと、悲しみと、それらを覆う神々しい輝きが宿っていた。

そして、二柱の神の戦いが、始まった。

）
）
）

【八坂 神奈子】

現在地：C - 4

前登場話：《30・ハート・ハート》

次登場話：《》

【橙】

現在地：C - 4

前登場話：《31 紅の夜（2）》
次登場話：《-》

【洩矢 諏訪子】

現在地：C - 4

前登場話：《31 紅の夜（2）》
次登場話：《-》

38・その背負うもの(2)(前書き)

この作品は、『上海アリス幻樂団』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用していただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂団』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

38・その背負うもの(2)

——初めて出会ってから、一体どれだけ経っただろう。
実は、一日も経っていない。

それでも、出会った時のことがもう遠い昔のようだ。

「あらあら、まだいたの？」

いつか、自分が椀にかけた言葉。

その言葉を思い出して、雛は笑った。

ああ、そうか。

「まだ」いたんじゃないくて、「やっと」自分が現れた、んだ——。

くくく

「いたい、いたいよ」

雛の渾身のスペル、ペインフローに貫かれて腹から紅い血を流しながら、それでもフランドールは立っていた。

「いたいよ。すごくいたい」

その顔は、怒りと苦痛がないまぜになって歪んでいた。

「いたいよ、いたい。どうして？」

その目が、すうと色を失う。

「どうしてこんなたいめに、あわなきやいけないの?」

答えるものはない。

「ゆるさない」

答えるものはない。

「ゆるさない」

フランドールも、答えを求めてはいない。

「ゆるさない」

フランドールの体から、ゆらりと立ち上るものがあつた。それは、ペインフローに良く似ていた。

「みんな」

立ち上った気配がゆっくりと拡散していく。

「みんな」

フランドールの金色の髪が逆立つ。色とりどりの宝石をぶら下げたような翼が、唸るようなスピードで羽ばたいた。

「みんな、しんじゃえ」

そう、つぶやいた瞬間。

フランドールを中心として、爆発が巻き起こった。

ほら穴が、木々が、地面が、吹き飛んだ。

土煙が、木や石の破片が、乱れ飛び、すぐに爆風に巻き込まれて溶け消えた。

「！」

雛も柊も、声を上げる間さえない。一瞬のうちに爆風は二人を周りの景色ごと飲み込んだ。

「……みんな、いなくなっちゃえ」

膨れ上がった光が弾ける瞬間、フランドールの声が静かに響いた。

爆発が、爆風が、光が、すべてが収まったとき、そこに立っているのはフランドールだけだった。

周囲が円形に、まるで掃き清めたようにきれいさっぱり平らになっている。

ごふ、と咳をして、フランドールはぐっと腹を押さえた。

「いたい」

しかめたまま、視線を落とす。どくどくと、腹が波打っていた。そこに、一体どこに隠れていたのか。

「大丈夫？ フラン」

どこからともなく、てゐが姿を現した。

「あ、てゐ」

その姿を見た途端、フランドールの顔が嬉しそうに輝く。けれど、すぐに顔をしかめてうつむいた。

「ひどくケガしたみたいだね」

気遣わしげなてゐの言葉に、フランドールはうつん、とかぶりを振った。

「いたい。いたいの。でも、でも」

フ란の表情が変わる。腹の痛みによるものとは別の、苦い表情。

「みんな、ふきとんじやった」

「ほんとだね。さすがフラン。すごい力だ」

ため息について誉めるてゐに、しかしフランドールの表情は晴れない。

「ふきとばしちゃった。わたしが。でも、でも……」

なぜだが、突然泣きそうな表情になる。

「みんな、も、こんなにいたかった、のかな？」

不安げな顔。

誰かにすがりたそうな、助けてもらいたそうな、怯えた表情。それはてゐが初めて見る表情で、そしててゐはそれを見ても何も

答えなかった。

「考えちゃいけないよ、フラン」

耳元で、甘いささやきがフランドールの心を縛り付ける。

「迷いがあつたら、レミリアには勝てない。絶対に」

わずかに抵抗するような素振りを見せた後、それでもフランはうなずいた。

「うん。……うん。そうだよ、ね」

こつそりと唇を歪めたてゐが笑い、フランドールの手を引っ張る。フランドールは素直に手を引かれ、二人は立ち去り、そして、誰もいなくなった。

くくく

フランドールの魔力によって円く吹きとばされた大地の周縁で、ぼろきれのようなものが微かに動いた。

「……」

ぼろくずのようなものは、二つ落ちていた。細い何かでつながっているらしい。動きを見せたのは、そのうちの一つ。

片方が伸びて、片方に触れる。弱々しい動きで、それはほとんど撫でただけのよう。それでも、通じるところがあつたらしい。

「……雛」

片方が、音を出した。それに、触れられた方が応える。

「椛。無事、だった？」

それは、フランドールの攻撃をともに受け、全身裂傷と打撲だらけになった、雛だった。

につこりと微笑む。けれど、動いたのはそれだけだった。

「……雛」

触れた方がもう一度声を出す。ひょこりと出ているのは獣の耳。

風が痛むかのように、ひくひくと動いた。その下に覗いたのは、雛よりもずいぶん綺麗な、椛の顔。

「……大丈夫？」

そう尋ねながら、もう、雛が長くはもたないことを、その目ははつきりと悟っていた。

椛の手には剣も盾も無く、ただ、雛の手だけを握っていた。細い何かでつながっているように見えたのは、目のくらむような爆発の中、最後までお互いを離さなかった雛と椛の手だった。

繋いでいなかった方の手を伸ばして、椛が雛に触れる。いとおしむように、痛みを取り除こうとするように、血と傷と埃とで黒く汚れた雛の顔を、そつと撫でる。

「……雛、どうして」

震える唇が、言葉を吐き出す。自分自身を呪うような口調には、絶望しか無かった。

けれど、その昏い言葉は、最後まで言い切ることはできなかった。雛が、わずかに首を振ったように見えたから。それから、そつと椀を抱き寄せて、耳元で何かを囁いたから。

「……！！」

椀の目が、見開かれた。

「ひ、な」

口を開いた途端、目からぽろりと涙がこぼれた。

尻尾と耳でしか自分の気持ちを伝えられなかった少女が、泣いていた。

「雛！ 雛！」

追いつがるように、突然叫びを上げた椀の顔は、くしゃくしゃに歪められて。

「やだ！ やだよ、雛。置いてかないで！」

今まで表情に乏しかった椀の頬を、後から後から溢れる涙が伝い、見上げる雛の顔にばたりばたりと落ちていく。

「お願い、雛……」

うなだれてつぶやく椀の声は、やがて大きさを失い、掻き消えていった。

それに合わせるように。

雛が一つ、にっこりと笑ったように見えて。

椀とつないだ手からも力が抜けて。

そうして、雛は、そっと目を閉じた。

「……雛？」

ぼつり、と、椀がつぶやく。

もう分かっていたはずなのに。

それでも、椀は、全身を裂くような痛みを感じながら、雛を揺すった。

もう一度だけ目を開けて欲しいと、伝えるように。

雛が目を開けることは無いと、もう気づいていたはずなのに。

椀は雛を揺すり、涙を流した。

「……雛」

何度も揺すり、何度も声をかけて、それでも返事はない。

その姿勢のままで、椀はずっとそこにいた。

そして月が天を巡り、傾き始めて。

「……ゆるさない」

夜明け前になって、椀はつぶやいた。

きっと顔を上げたその瞳に宿るのは、静かな憎しみの光。

暗い光をたたえて椀が空を仰ぐ。ちょうどその上に、影が落ちた。

それにつられるようにして、椀がのろのろと振り返る。

「……あなたは」

そこに立っていたのは、最初にフランドールに襲われていた二人の少女、上白沢慧音と秋穰子だった。

「ごめんなさい」

奇跡的に、二人はほとんど無傷だった。多分それは、椛と雛が力を合わせてフランドールの注意を逸らしたから。時間を稼いで、二人が逃げる隙を作り出したから。

雛が、自分の命と引き換えに少しでも二人を守ろうとしたから。暗い光を宿した椛の瞳の先で、慧音の頬に涙が流れた。

「でも」

そして、震える唇から、言葉が生まれた。

「ありがとう」

その一言で――。

もう動かないはずの雛が、もう一度だけ、笑ったように見えた。雛が倒れる原因になったもの。けれど、雛が守りたかったもの。それで、もうダメだった。

収まっただけの涙はまた行き場を失くしてあふれ出し、傷だらけの顔は歪み、無口なはずの口からは絞り出すような嗚咽が漏れて。雛のリボンを握り締めて、椛はただ、泣いた。

くくく

争いを止めたかった。自分は厄神だから。

厄を預かり、幸福をもたらすべき存在だから。

自分が強いなどと思ったことは無い。

だから、いつかこうなるだろうことは分かっていた。

最初から覚悟はできていた。

だから、自分が倒れることに悔いは無い。

けれど、桜は厄神ではない。ただ自分を慕ってついてきてくれただけ。

だったら。

自分が死んでも、桜は決して死なせない。

そう思った。

だからあの瞬間、フランドールの攻撃が炸裂した時に、雛はとっさに桜を抱き寄せ、自分の背中を盾にして桜をかばった。

引き裂くような、焼け付くような痛みに、意識が飛び、気づいたときには自分も桜も、地面に倒れていた。それでも、つないだ手はしっかりと握ったまま。

もう、体は動かない。

言いたいことはたくさんあった。言いようも無く悲しそうなフランドール・スカーレットのことにも気にはなっていた。けれど、それを全部言うだけの力が、雛にはもはや残されていなかった。

だから、雛はたった一言だけ、伝えようと思った。

今まで自分の隣を歩いてきてくれた不器用な白狼天狗をそっと抱きしめて、雛は一番言いたかったことだけを、精一杯の気持ちを入れて、伝えた。

「ありがとう」

桜が息を呑む音が聞こえる。

けれどそれもすぐ感じ取れなくなって、意識がどこかに沈んでいく。

桜の声が、桜の手の感触が、徐々に薄れていって。

最期の一瞬、雛はとびきりの笑顔を浮かべて。
そして、目を閉じた。

）
）
）

【鍵山 雛】死亡

前登場話：《34・その背負うもの（1）》
次登場話：《-》

【犬走 桜】

現在地：B - 1
前登場話：《34・その背負うもの（1）》
次登場話：《》

【上白沢 慧音】

現在地：B - 1
前登場話：《34・その背負うもの（1）》
次登場話：《》

【秋 穰子】

現在地：B - 1
前登場話：《34・その背負うもの（1）》
次登場話：《》

【フランドール・スカーレット】

現在地：B - 1
前登場話：《34・その背負うもの（1）》
次登場話：《》

【因幡 てゐ】

現在地：B - 1

前登場話：《30・ハート・ハート》

次登場話：《》

【残り 28人】

39・神殺しの神(2)(前書き)

この作品は、『上海アリス幻樂團』様の『東方Project』に登場するキャラクター、設定等を利用させていただいた二次創作です。

キャラクター同士の戦闘描写や残虐な描写が存在するとともに、各キャラクターの設定についても『上海アリス幻樂團』様による公式のものとは異なることがあります。

お読みいただく際には、以上のことをご理解のうえをお願いいたします。

39・神殺しの神(2)

八雲藍は走っていた。胸に渦巻く違和感は、いつかひどく嫌な予感にとつてかわられていた。

心臓を鷲掴みにされるような、自分の半身を引き剥がされるような、そんな嫌な予感。

「橙……」

心当たりは一つしか無かった。自分の式神である橙の身に何か起きたとしか考えられない。

走るたびに胸騒ぎは強くなった。それに追い立てられるように藍はただ走り、月の下をただひたすらに駆け続けた。

「……橙？」

そうしてやがてそれを見つけ、藍はそこで初めて立ち止まった。

・
・
・

「どうした？ 諏訪子。なんで手を抜くんない」

諏訪子の放った弾幕を腕の一振りで弾き飛ばして、神奈子は忌々しげに舌打ちした。

「あんた、あたしが許せないんじゃないの？」

「許せない」

間髪入れずに答える諏訪子の言葉には少しの迷いも無い。だがその鋭い言葉とは裏腹に、諏訪子の攻撃にはパワーもスピードも欠けていた。

申し訳程度に生み出した水しぶきのような弾幕が無造作に振るつた神奈子の右手にかき消され、諏訪子は一步下がる。

「こんな情けない弾幕であたしと戦おうってのかい？」

神奈子はいっと笑い、すぐに真顔に戻った。

「なめてんじゃないよっ！」

声と同時に宙をつかんだ左手にナイフが生まれ、銀の光をきらめかせて飛ぶ。

銀光は諏訪子の帽子をかすめるにとどまったが、一瞬そちらに気を取られた諏訪子に神奈子の影が月明かりの下迫る。

「そら、終わりだ！」

いつの間にか神奈子の右手に握られたナイフが、諏訪子の首筋を狙ってぎらりと光る。

回避するには遅すぎるタイミングで諏訪子が視線を戻す。しかしその目には焦りも絶望も無く、ただ静かに光っていた。

「『鉄の輪』」

迫るナイフに、諏訪子が右手をわずかに挙げてつぶやく。その途

端、右手に金属のリングが生まれ、がちりと神奈子の刃を受け止めた。

飛び散る火花に眉一つ動かさず、諏訪子は左の掌を空に向けてもう一度唇を動かした。

「『風雨』」

その背後から巨大な水柱が立ち昇る。うねる水柱は上昇するにつれ重力に負けてその姿を崩し、飛沫となって舞い散った。その飛沫一粒一粒がまるで意思を持っているかのように飛来し、神奈子を狙う。

「風雨、ね。その元は何だが、知ってるかい？」

神奈子は飛びすさって楽しそうに笑うと、両手を地面に向けて突き出した。

「『雨の源泉』！」

言葉と同時に神奈子の両手が地面に触れる。その瞬間地面が大きく波打ち、土が溶けるようにして澄んだ水たまりに変わった。

諏訪子の水しぶきは吸い込まれるようにその水たまりに飛び込み、飲まれて消える。

「！」

驚いたように身を固める諏訪子に、神奈子は嬉しそうに笑って手を振った。

「そら」

ばしやりと音を立てて、神奈子の足元の水たまりが弾けた。
神奈子を中心にして、水しぶきが弾丸の雨となって飛んでいく。
諏訪子は自分に向かってくる水しぶきを見て、とんと後ろに距離をとった。左手を目の前に突き出して、叫ぶ。

「『翡翠』！」

ゆらゆらときらめく薄い水の膜が諏訪子の目の前に現れる。飛んできた水の弾幕は、その膜に遮られて消えていった。

すっと諏訪子の手を降ろすと、カーテンのように諏訪子を守っていた水の膜はゆっくりと消えていった。

最初と同じくらいの距離をとって、再び二人は向かい合った。先ほどまでとは打って変わって、静けさが二人の間に落ちる。

「やるじゃないか」

神奈子が口を開いた。

「……」

諏訪子は答えない。ただ帽子の陰から、静かに光る瞳が神奈子を見据えている。

「神奈子」

「何だい」

「どういつつもり？」

その言葉に、神奈子の表情が凍りついた。

「……何のことだ」

「とぼけないで」

「……」

二人の間に再び沈黙が落ちる。

「あなたの攻撃には殺意が無い。神奈子、あなた。……私を殺すつもり、無いでしょう？」

またび沈黙が落ちた。けれど今度の沈黙はすぐに破られる。

「……良くわかったね」

神奈子はいっと笑った。嬉しそうに。

「そのとおりだよ。けどそれで戦意をなくされちゃ困るんだ」

「なぜ？」

「さて、ね。それを知りたいきゃあたしを倒してみせな。

……言っとくけど、もう手加減は無しだ。ちよっとでも迷いを見せたら——」

そしてもう一度、神奈子は笑った。寂しそうに。

「容赦なく殺すからね」

神奈子が笑いを消す。一瞬だけそつと肩を落とし、それから神奈子は諏訪子に向かって翔んだ。

それと同時に。

あらぬ方向から、

「貴様らか！」

声が響いた。

それはちょうど諏訪子の後ろ、諏訪子を挟んで神奈子と正反対の位置。

「！」

どちらに対して反応すべきかと迷った諏訪子に、一瞬の隙が生まれる。

神奈子も新たな声の主もその隙を見逃しはせず、二人は同時に諏訪子に狙いを定めて。

神奈子は諏訪子を体当たりで弾き飛ばした。

諏訪子は弾き飛ばされて尻餅をつき、そして見た。今まで自分が立っていた場所を、何者かの影が鋭い腕で振り抜いているのを。

その場所には、ちょうど諏訪子突き飛ばした神奈子がいて。

「あ……」

胸を貫かれて、それでもなお笑っていた。

「——っ！」

声にならない叫びを、諏訪子は上げた。

ど、と音を立てて、神奈子が前のめりに倒れる。

ワンテンポ遅れて、その体から赤い血がじわりとにじんだ。赤い色。自分が守れなかった橙の体から流れていたものと同じ、赤い血。めまいをこらえるようにぎゅっと胸に手を当てて、諏訪子は神奈子に駆け寄った。

「神奈子！　しっかりして！」

駆け寄った諏訪子の耳に、襲撃者の声が届く。

「お前たちか。橙を殺したのは。紫様を、殺したのは……」

橙、という言葉に、諏訪子は目を開いた。そして自分の後ろを振り向いて、初めて襲撃者の姿を見た。

月光に照らされたその姿は明るく輝いている。

「金毛の、狐？」

「貴様たち二人とも、橙の血の匂いがする。……許さん、ぞ」

襲撃者は諏訪子の言葉には耳も貸さず、血に濡れた右手をかざしてみせた。

「あなた、まさか……」

ぱつと距離をとって構えた諏訪子にゆっくりと歩み寄りながら、金色の襲撃者は呪文を唱えた。

「『飯綱権現——』」

だが、最後まで言い切る前に、そいつは足をつかまれた。

「!？」

驚いて下を向いた襲撃者に、神奈子の笑顔がまともにぶつかる。

「そいつに手を出すんじゃないよ」

口から血を吐きながら、神奈子がにやりと笑った。皮肉げな笑み。そのまま襲撃者の足を握った手を離して、神奈子は口を開いた。

「『ダイバイニングクロップ』」

何の予備動作も無いまま右手から弾が生まれた。弾はとつさにのけぞった襲撃者の前髪をわずかにかすめて、あさつての方向に飛んでいった。

「ち……」

舌打ちをして、襲撃者は神奈子から距離をとる。そのまま、諏訪子の方にちらりと目をやり、もう一度大きく後ろに跳んだ。

「忘れるな。紫さまと橙のカタキ、お前たちは決して逃がさない」

そう言い残すと、金毛の襲撃者は夜の闇に姿を消した。

・
・
・

「神奈子！」

襲撃者の姿が消えてからずいぶんして、ようやく諏訪子は神奈子に駆け寄った。

「あなた、どうしてあんなことを……」

言いながら、諏訪子は必死になって出血を押さえようとする。だが神奈子の体からは後から後から血が溢れてきて、見る間にその顔色は白くなっていた。

「……やめな」

それでも諦めずに止血を試みる諏訪子に、目を閉じて横たわった神奈子が口をきく。

「神奈子！　しゃべらないで！」

既に泣きそうになっている諏訪子を見て、神奈子は笑った。

「もうあたしはダメさ。分かる」

「どうして。どうして……」

「戦いの中で死ねるんだ。あたしとしちゃ満足さ。もっとも」

あんなヤツが出てくるなんて予想外だったけどね、と、笑いながら神奈子は言った。自業自得かね、と、まるで世間話でもするようにつぶやく。

「どうして……」

先程から同じ言葉しか繰り返していない諏訪子の目から、とうとう涙がこぼれ落ちた。

「あたしはさ」

ぼつりと言葉をこぼす。

「強くなりたかったんだ。誰よりも強く」

しゃべらないで、と言おうとした諏訪子を遮って、神奈子はしゃべる。

「この戦いに参加して、あたしは内心喜んだ。自分が最強だと証明できる。そうすりゃ、信仰心も今まで以上に集められる、ってね」

時々詰まりながらも、神奈子は静かに言葉を続けた。

「でも」

神奈子の瞳が、力を取り戻す。

「八雲紫に負けてね」

「？　あなたが八雲紫を殺したんじゃない……」

「確かに、殺したのはあたしだ。だけど、あたしは負けたんだ。あいつは、最期の瞬間まで何かを守ろうとしていた。自分を盾にしてあたしはあいつを倒すことしか考えていなかった。完全に、あたしの負けだった」

懐かしそうに目を細めて、神奈子は語る。少しずつ、息継ぎの間隔が短くなっている。

「それから、あたしは考えた。八雲紫を殺してしまったあたしが、どうしたら、八雲紫を超えられるのか。考えながら歩いていた、あたしの前に、あいつは現れた」

「あいつ？」

「八雲紫の、式の式」

「橙が？」

諏訪子が息を呑んだ。

「あたしは、あいつと一緒に来いと言った。誰かを守りながら戦った、八雲紫と同じように、あいつと一緒に行動すれば、あるいは八雲紫を、超える方法が見つかるかも、しれないと思って」

「けど、そうはならなかった……？」

「ああ。あいつは、どれだけ言っても、私の言葉には、従わなかった。そして」

神奈子の顔から、表情が消えた。ごぼりと咳き込むと、大量の血が口から吹き出した。介抱しようとした諏訪子を目だけで静止して、神奈子は続ける。

「あいつは、自分で舌をかんだ。死んでも、あたしには、従わない、そう言うて」

「！」

諏訪子の表情が、曇った。

「あんたに会って、あたしは、気づいたんだ。あんたも、一緒だつて、ね。昔、あたしとあんたが戦った時も、あんたは、民を守るために、あたしに降伏した。強いって、そういう基準も、あるんだな、って」

神奈子の目は、もう諏訪子を見てはいなかった。

「あたしにも、そういうことができたなら……そう思ったけど、あたしの進んできた道は、その真逆。どうしようかと思ってたけど……。こんな風に、達成、できる、なんて、ね」

ごぼりと咳き込むと、赤い、赤い血がこぼれだす。

「神奈子」

諏訪子の言葉に、神奈子は返事をしない。気にせず、諏訪子は続けた。

「やっぱり、橙を殺したのは神奈子じゃ無かったんだね」

「やっぱり、って？ ……気づいてたの、かい？」

神奈子のつぶやきに、諏訪子は初めてほっそりと笑った。

「そりゃ、ね。どれだけの付き合いだと思ってるの。あなたが嘘をつく時なんて、三秒前からお見通しだよ」

いたずらっぽく笑って、諏訪子は笑った。その目から、ぽろりと涙がこぼれ落ちた。

「……そうかい」

かはは、と、神奈子の口から乾いた笑いが漏れた。

「今回は、あたしの負け、かな」

そのまま、そつと目を開ける。

「けど、あたしは、満足、だよ」

一息つき、ごろりと仰向けになって両手を広げ、神奈子がつぶやいた。

「あゝ……、空がきれい」

黒い空には雲ひとつ無く、きらきらと光る星が二人を照らしていた。

「うん」

同じように空を見上げて、諏訪子は応えた。その目が、星の明かりを反射して輝いていた。

「諏訪子、ありがとう」

しばらくの沈黙。二人の間を冷たい風が吹き抜ける。

「……やめてよ」

震える声で、諏訪子は答えた。その頬には涙が伝い、月光を反射してきらりと光っていた。

「ずっと、あたしを支えてくれて、ありがとうな」

「やめて」

「長い間、一緒にいてくれて、ありがとうな」

「やめて」

もう、諏訪子は神奈子を見られなかった。そんな諏訪子を見て、神奈子は笑う。

「あんた、相変わらず、泣き虫だねえ」

そつと諏訪子の目元をぬぐい、神奈子は笑った。血の泡を吹きながら、なお不遜に。

「なあ、諏訪子。あの子を——早苗を、よろしくな」

その言葉に諏訪子のはっと顔を上げ——そして、きっぱりと言いつ切った。

「私を信じてくれる者を、私は決して裏切らない。人であれ、妖怪であれ、神であれ」

神奈子は目を閉じて笑った。声を上げて笑ったつもりだったが、口が開いただけだった。

「あんたらしいよ」

それが、神奈子の最期の言葉になった。

山を頭上に、大地を背に、風を胸に。

すべてを従えて、八坂神奈子は眠りについた。

後にはただ、影のようにその側に寄り添う諏訪子と、月明かりだけが残った。

）
）
）

【八坂 神奈子】死亡

【前登場話】《37・神殺しの神（1）》

【次登場話】—

【洩矢 諏訪子】

【現在地】D - 4

【前登場話】 ≪ 37 ・神殺しの神 ≫

【次登場話】 ≪

【八雲 藍】

【現在地】 D - 4

【前登場話】 ≪ 30 ・ハート・ハート ≫

【次登場話】 ≪

【残り 27人】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7231i/>

バトル・ロワイアル東方

2010年11月23日01時17分発行